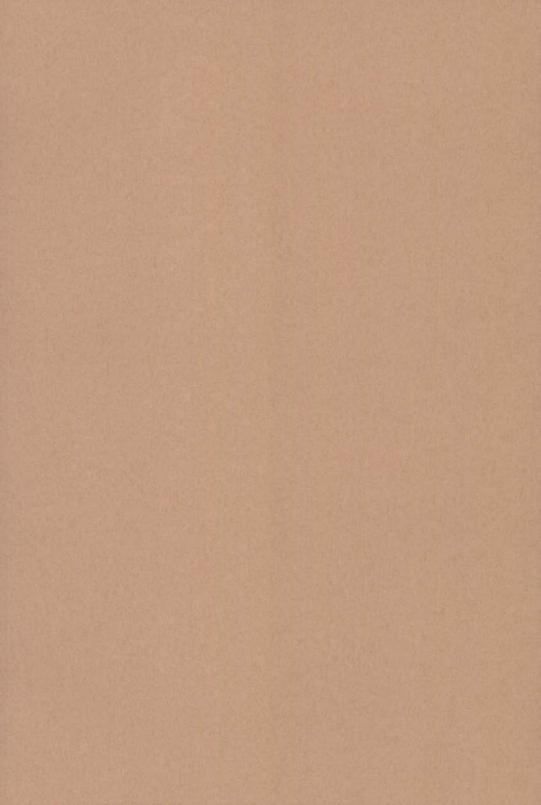


岳山

年 十 二 第 號 二 第



雜

錄

ら(竹内亮)○登山の效果とその活用(武田久吉)○七ッ森(岡田要之助)○高山植物雜記(武田久吉)○臺灣花蓮港埔里間の水準測量に就て ○紅葉の金炭山と清津峡(大平晟)○牛奥山の雁ノ腹梢について(武田久吉)○籠川谷大澤小舎を中心として(船田三耶)○山旅のノートか

雜

(陸地測量部三角科)

報

〇十勝岳硫黄山の大爆發〇十勝岳爆發〇十勝岳の爆發慘害

報

會

〇會

員

通

信

○第三十二囘小集會記事○會務報告○交換及寄贈醫書目○本會規則拔萃

附

錄 +

第

八

年 總

目

欽

至自 一〇八

至自 一 〇九 七九 =

至自

九四八六

韓

霧島東神社、

二ッ石、

高千穗拳、

四

皇祖發祥の靈地

三田井、霧島山。

〇霧島山 大平 霧

島

山

高 狹 霧島の 千 裾野、 穗 峯

野 神 狹野神宮、 宮

杉並木、

皇子原。

大浪池、 國 韓國嶽、 嶽 霧島山探滕日程提供。

天の逆鉾、 御鉢、 千里瀧、 霧島溫泉。

大

平

晟

五 鹿 兒 島 神 宫

日本一の種馬所、 溫泉鄉、

庭兒島神宮。

陸測廿萬分一。鹿兒島、宮崎、八代。 五萬分一。 小林、紙屋、横川、國分、

加治木、

加久藤。

參照地圖)

(222)

有了中

佐ずは、

八寸土 代計人

0) 間、

10 _

黄熟

L 0

落花生

脳草

0 玄綠

10

配

する

稻

苗

0

淺線

など、

然

72

は

ジ

1

2

V

T

70

3

彩を

す

8

宛然 変は

組木 旣 +

模樣在觀

3

Sp

5

0 0

あ 帶

2 褐

57 総

耳

JII

0

峽 は

谷

VC

入ると、

數多

0)

隧道

を潜

るので、

僧

しくも其

水石美を

斷續

的

VC

見

遺

らねば

なら

球グ

磨"是

急流

を下

7

0

統 3

點で

あ

17

着

5

72

0

は

午

前

+

時

十分であ

る。

發車まで三十分許

(1)

徐

裕

为

的

る言な際

T

狹 野 神 宮

i Ŧi. だ 朝 月 時 日 發 + 0 祥 九 光 0 映ず 種 靈 0) 地 大 る 束縛を受け 龙 TE 3 士三 拜 如 寸 ~ 100 车 <, 居る車 右 晴 窓 朝 17 Ŧī. 中 は 時 四度温 0) 前 客で 十朝 途 分七旗 0) 能の本 無くばとの感を起 H 程 本 K 發 屬 0 汽 す る 重 温さに 泉芳搭 さず 嶽 75 VC 棚 左 は るら 窓 51 多渡 VC 和 Vi な 昨 3 朝靄の か H 採 0

た

0

213 17

旅

噴

烟

F. 72

禁

B 0

0 國 接 ÷ なが であ 道 装 歸 道 地 L りに 總 ガ 0) 72 ハ る。 0 右 カン 0 せ 似 積雪 後 個 6 0 1 is 15 九 1 + 州地方 る。 深 東霧 13 2 17 3 伍. 此 S Ш 我 此 33 L 島 麓 0 か 老木 て、 のセ 原 VC Щ 鄉 瓦 0 野 (1) つて多 地 衮 に於て、 力: ンダンは、 セ 色彩は更に淡泊優雅の感じがする。 內 花 6 2 は、 をし A. IF. 40 2 vo 成水覺束 て吳 此 满 ノキ 花 予は 二葉より香 開 32 33 in: 6 多く、 遠 30 72 此 近 行 な 0 松 VC 朝 力 72 其淡紫色の 5 棚 0) しといふ、 鮮からの歸途、六月二十二 元 蘊 X を見て、 办 芦豆 夫 君 を頻 5 0 72 花が 山陰地 ED 0 果質 光景 は 度に産する栴檀では 予は Ļ 梢 は、 は 方 頭 2 0) 數 UC 2 株の 藥用 予に 簇 花 ダ 6 期 日出雲大社 2 郵送 惠 着 12 pi: 供 礼 いた風姿 丰 甚 を受 す 得 0) EV だ遅 無く Z 花 け、 FIJ 17 は 象 n は、 n 庭 を與 3 標此 園 0 頤 3 10 17 時 3 た時 植ゑ 72 旅 木 始 0

-

物を宿り

0 山

入 屋

口

登

Щ

П

〇霧島山 大平 0)

通

學

るので、 味も亦 構 內 佳 販 賣 い様である の 辨當かし は 23 1 を需 めて晝食とした。 九 州 地 方は、 鷄が豐富の爲 か 肉 0 用 量 B

零時 車 を賃 Ŧi. の丘 + 72 る高 陵崖 L て、 分高原驛に下車した 原 霧島山流 性 一曠野の 確 で車しナ 中を貫 た。 7 VC いて走る車上 7 向つた。 驛前の案内標に ッ ヽジ の花がぼつぼつ目に入つた。 霧島山の 0 氣分、 「宮崎神宮別宮狹野神社四方三十四町」 裾野 如何にも清々しき感じがす野であるので、前面には旣 滿開 のハコネウ 既に霧 る。 島の靈峯を仰 とあ " ギが つた 多

ル」と週 佐 右 位野は西諸縣 0 T 呼 郡高原語原 h 70 ねる。 原村大字蒲牟田 と 大 日 本地 名 に屬する。 辭 午後 書 10 時二十 は 驛名標 濁 つて 五分狭 には あ る。 野 た 着 かはる」とあったが、 3 つまや 富 井 に投 般 宿 17 L 72 ダ 力

に託 には 是より頂上まで二里四 官幣大社 直ちに狭野神宮 宮崎 神宮別宮」 に参拜す と書 ることうした。 V 72 新らし さつまやは荻野 い大きな標柱 神 25 宮の入 あ 3 傍 П 0 VC 揭 面 示 L T 17 か

野 青 年 專

狹

案内者希望の方は狭野小學校に印 出られたし。

とあ に於ける、 つたので、 霧島 予は参拜後狹野小學校を訪 登 Ш 0 案內 者 周旋を依 戦 CA L T 歸 校長山下宰 宿 L 72 二氏 か 5 附近 0 地 理 一狀況を 聞 3 且 0 37

報があ 頃は、 ح 0 日 0 降 一雨とな 72 朝 0 は は、 爽か つた。 な時 頗る氣懸りであ 前夜熊 天であ 本 0 で見た たが、 3 新 高 聞 原 紙 驒 Ŀ T 車の 17 頃か 天候不良 5 潮 ならん、 次 曇りを増 琉 球 方 面 に低 狹野 小學 氣 壓 現 校 K は 立. る 洛 0 0 72

見童が 男女とも殆ど皆徒既 0 ある 0 は 或 は學 校 0 獎勵 かとも 想 は 礼 る。 非 常 12 肥 文

=

である。

大きなが を 想 た、 N 出 乳 さずにはゐられなかつた。 房 年 は 0 素よ 頃 6 + 許 臍 0 0 婦 あたりまで露は 人 办 2 n 8 素足 ic 0 女 悠々街道を歩 >, 雨 0 降 5 3 T 0 ねたのは、 VC 傘 * 8 持 土 72 地 す 柄だけに、 而 も帯 B 天鈿女命

神宮入 口 0 傍 IC. 左の大々的廣告掲示があつた。

之絕景 霧島榮之尾溫 泉

島 津 家 本 陣

内湯、湯瀧あ 高原駅より榮之尾溫泉に至る五里牛。 硫黃銳明禁鹽類各種、 ラチュー ム含有。

樂之尾より大浪池まで一里、硫黃谷温泉まで二町、 牧岡驛まて四里。

右廣告に、 高原驛より榮之尾溫泉まで五里半とあるは、 高 T 穂峯を經 由 せずに、 捷徑 * 取 った 里

五月二 + H 雨 晴 5 朝 狹野六二 夕 狹野 六八

0

t

H

T

たので、

とに 實で才幹 出發を約 Ш 下校 T もあ 長 返し L た。 氏 72 つた。 松元 周 旋 此 君 K 日 は曾て土地の青 約の 如く六時前 案內者松元義夫といふもの、 车 團長 に來 に推され、 72 0 だが 昨 今尚其幹部として活 日の 昨 雨 夕刻宿屋に尋 は尚 止まぬので、 動 和 し居る男とて、 來 日延期といふこ 翌朝六時 仲々着

兩 如 午後雨 侧 何 に並 40 3 ぶぶ老杉 も止 神 なし み、 は、 v 雲の 松 幹徑六尺以上に達するの 0) 切 老樹 間 カン らは、 け 幹枝蟠蜿して、 青空も見 B えるので、 あ 5 種 附近は 0 雅致を呈するが 再 び狭野 帶 に杉 神宮に詣 林 打續くので、 老いたる杉 でた。 參道 七八 欝 の盛々として天 R 森 町 なと に亘 5 〇霧島山

あ 彩 水

品

111

大

燃 天 起

之 皇

社

殿 0)

悉 創

く焼亡

し東

B 神 日

神

社 天 諸

1,0

澼 御 郡

け 降 狹

給 誕

N 0 VC

天

女十 鎮座 誕

年 5 里

高

原 を H

鄉

0 文

釐 曆

17

造營 年

せり

宫

崎

宫

総

12

t

ば

证

皇

は

27: 83

向 证

野

御

降

文

L

る故、

幼名

野

鱼

لح

3

昭 40

細

宇 22

設 神

江

6 天

初

皇 縣

地

1,0

南

L L

元

十 を狭

月二

葉振 和 ノネ 5'7 6 更に 2 を 脏 犯 古 す 0 雅 境 3 キ か 0 地 風 らざる 2 1,7 致を添 威 各所 嚴 ブ 力: 成 8 0 點 付 見 容 ~ 72 飾 與 る あ す L 0 3 3 ri 10 72 6 は、老いたる杉に比すべきものは無からう。 753 は及ぶべ 牛 此 ヅタ、マメヅタ、ウルシヅタ、 處 < 0) 付 3 特に な V 共 優秀な樹 0 杉 容 は を 發 揮 n チリメンヅタなどが纏 氣 L 味 非 叉此の 常 枝 1.0 莊 6 老杉の 12 嚴 感 尊 50 K 42 U 打 72 72 3

孫 後 樹 耐 老樹 務 所 为 12 就 is v 3 T 傍 新聞 15 B 紙 を殖 を 借 霓 やしませう、 L 薬 宮崎縣 8 需 8 と書 72 V た、白 ~ 2 牛 途 0 標札 から 目 40 着 v 72

征 裕 L IC 伐 か なりまし カ 神 祈 成 親 年十 あ 5 祉 Ŧ る 願 12 典 0 際 殿 奉發 其 神 略 F 緣 L. 72 他 泣 0 本 天 記 献 同 縣 大 今上 切 皇 it 月二 木で 仕 IE t 8 行 一天皇陛 n 御 TU ~ 「年六月 あ 十日御參拜 啓、 祭 泰 Vã ります 0 h 卞 同 T L 日 月二十 皇太子 1/2 來 T 向 まし は 國 南 など記 になりました。 高 ŋ 官幣大 Ł とし ます 72 原 游 日御參拜 村 記されて T 狭 社 宮 明治 野 明 宫 崎 治 神 12 あ 崎 六年 縣 維 社 る。 社 市中 なりまし 新 は 17 頭 宫 行 IC 前 此 别 啓 it まで 皇祖 般 官 處 VC 心に繁茂 た。 縣社 0 K 際 は 加加 老 指 症 杉 大 定 舊 天 10 世 IE. IC 特 は 御 皇 る老 + な K מל 主 0 有 5 列 本 御 B かなし 名な 杉 年 脏 12 生 津 は 五. ならせら 氏 n 日 は、 55 月久避宮 t 遊 光 慶長 6 ば 0 大 高 杉 年 辻 まし IE. n 社 並 間 殿 九 侍 女 領 木 下御 年 從 L 72 Ŧī. ·三月皇· 1 B 2 所 百 57 津 御 石 0 公 3 行 潰 明 あ 朝 古 VI 献 h 鮮 子 九 納

と書

た標柱がある。

丘

陵

中程の高

みに、

長十間横

七

間

許、

三段の土盛をなし、

段上に方十尺許の

木棚

を続らし、

石碑が

木*多 花 後黄變するので、 ば の筒部が著し テ 前 此 IJ 17 花 ハノイ 皇子 は、 **咲き初め緑白、** < バラや、 原拿 紅色を帯び、 黄白: 道 從是 相交り、 西十 ス ٤ 町 力 と書 恋や若葉 金銀 ヅラが芳香を漂 後赤變するので、 花 V の別名が 72 8 標 亦帶紅色を呈す 木 23 ある。 はする あ 錦帯花の 3 氣持 我鄉 數 戶 雅名があ 地 好 るを認め 0 0 部 V は、 落 スヒ を 5 72 花 通 被 力 6 公全體白 植木屋 叉花真盛り ッ 過 STO . ラの 連 色であるが、此處 花は、咲き初めは 爪先上りの は。 0 七變化又源平空 原路を のは、 純 白

皇子原は、 十數 町 步 17 H. 3 丘 陵 地 で、 共 入 口

20

あ

る。

などといつてゐる。

箱根山

に多

v

0

で、

此名を得

た

0

だ

35

我鄉國

地

方に

は、

野

生のを見な

v

ので

•

太子殿下 高原村在鄉軍人分會、 行 路記 念 高原村青年會聯合、 大正九年三 月 参道改修、

趣

樹

植

建 てられてある。 碑高約六尺、 幅 一尺五寸。

降武 之 大 皇 王子

日向國諸縣郡高原鄉流牟

田

明 治八年十月十二日 宮崎縣權中曆兼大講義田原在棠謹

と刻 h であった。

棚 を擁し 地 後 に高千穂拳を負 T 匹 株 0 赤松と、 U 前 VI 株の に祖母山*の根樹があっ を望み、 る 周 圍 眼界豁: 1/2 it 數 然氣宇爽快を感ずる + 株 0 岩 1杉が植 付 H られ てゐる。

〇霧島山 大平

つまや

宮崎

t

6

國

分

10

通

す

3

街

道

17

闻

霧島

Ш

登

6

40

3

3

0

で、

茶屋

一般宿

屋

2

V

0

72

E 中 宇 15 ارح 都 地 四 理 纂考 方 云 Ш 14 間 (1) 1:0 岩 許 は n 石皆焦げて色變ず 野 殊 Vã 0 17 中 高 10 < 车 7L 田 T 方四 狭 W 野 は 3 段 石 8 あ 許 察 稍 此 高 3 网 地 Ш より 所 東 石 17 を 限 露 0 東 4 相 12 變ぜ 傳 北 るゝこと三尺、 證 ず、 T (神 L て、 土 泣 人御 天皇 + 圍 降 阜 人 旋 此 一文餘なり、 居 趾 所 0 跡 を宮 なりとて、 ٤ 之 V 宇 霧島 都 4 又 又 馬 14 共 度 TU VI 30 K 段 梳 0 許 現 炎 为 0)

今

に神幣を立て

ゝ標となす」とあ

3

と共 至 多 川となり つて 1 n らかた溪流があ ば チ 12 3/ 名許 は 原 此 良 J. 7 立 平 必 3: 木 餘程 0 7 で 餘 203 美 デマ 容 神 拜 ò 九州 サ 王子瀧に通ず」との示 0 i 3 程 見 0 社 大 力 今朝宿 歸途 多く えた い環紋 て に参 形 y 牛 數枝 の自 0 る。 で 菓子 拜 E 7 累々 霊様 を持 花 7 流 所 學 イチ 長 文 1 霧島 3 大 35 牛 を呈す た 淀 高 團 E 目 0 0 Ŧi. T 原 溫 體 3 六寸 17 JII 崖 方 3/ ナ 着 驛 泉 果 1 から 3 ラ 3 を出 標に 1 0 宿 實 3 75 は櫓櫂 17 V ラブ 乘 霧 は、 ので、 ち 注 72 0 6 奔湍 2 悲ら, 車 發 島 兒 供 圣 サ Ш IF. 1 宫 7 作 イ 源 700 等 1/2 A 又 力 崎 る用 萱野 次 动 厚 グ に注 6 高 10 7 方 深 1 校 T 濟 3 降 L 170 ス 3/ 潭 をと、 材と 藏 t は 寸 T ス < 相 を分け 0 72 橙黄 3 翠 0) 光 士 72 速る 1 0 称が 澤が 0 來 1 7 1/2 A チ 店 だ 答 72 非 色 T は E 3 幽 行 8 は、 常 頭 2 6 0 あ 3 30 遊 けば、 1 ガ 呈し ブ は に喜 る。 V 17 3 3/ .(逢 最 1 0 仲 左 雜 为 良無比 72 手 0 3 + 1 材 木 雜 h 7 3 12 0 0 だ つまや 3 ス VC VI 木 繁昌 排 1 3 12 17 v 1 此 林 1 適 ح 徑 聞 寺 ス 0 溪 0 0 T ナラや 付 * 0 1 裡 13 L 流 V わ ば、 屋敷 あ 隨 顶 た。 け + イ は 10 n より 分疲 0 3 ヌ 淙 0 蒲 72 我 T T 4 グ 也 车 N de 隆 城台 鄉 0 薬 n 鞺 1 田 ス 層堅 る。 など T 0 中方 地 VI 1º JII 17 な 3 學 0 七 7 2 2 0 萱 t 3 0 2 緻 なり 香 ス 0 1 0 6 年 野 常 6 ガ 1 牛 30 3 生 10 > 老 + 图 12 けは 3 以 12 压 3 J. 力; 味 丰 此

頗

醇

風

見

文

72

十六な電気

此 3

月 から

明

IC,

時常

鳥

のな

數

聲

を

聞

3,

身

は

家郷をさること數

百

里、

遠

征

旅

情の

威

3

涌

V

72

遠 が 鈍 食 0 屋 式 共 鹽烷 < 後 6 素 衣 瓦 0 麵 物 桁 其 0 圓 T 置 他 5 鷄 1: 七 あ (V) 小 肉 2 屋 3 食 間 ふに、 鷄 品 ダ VC VC 卵 > 通 床間 は b 0 7 など豐富 花 茶代 3 隨 IC を彩 廊 時 足 面 需 下 0 圓 どる 0 女 15 VC 8 恭 を 使 あ 17 > 野景 添 用 盤 つて 雁 腰 から ず へたら、 L 掛 たが、 あっ を眺め る。 4 得 たの 客 3 の寝室を通 改め 鷄 得るのが 室 樣 ~ は特に は 設 て當家第 備 予は 街 3 余が 氣持 道 n 過 机 UC 爲 好 面 菓 VC 代 流 8 子 き不 品 VC 用 0 六疊 料理 L 外 5 便 羽を買 、繪葉書を認め K は は 敷 V あ 菓子 無論 唯 3 入 貨 25 圣 n 田 個 8 唯浴 含式 Ш な だ あ けで 盛 6 n た。 で 槽 Ū ば 17 はあ 提 あ Vo 0) 便所と浴室は 中 る。 供 酒 るが、 す か 多 5 るなど、 泊 お あ 料 粗 る

高 千 穗

日 月 朝 H 晴 朝 0 築之

Ti.

15 粲 4 內 鐘 松 0 香 元 君 17 目 0 TI. を覺 3 所 まし 10 よれ. 72 から ば 同 今 時 H に六尾 法五 は 青 螺 年 貝 團 0

事

す 3 此

3

0

で、

其

起

床

時

刻

0

報

知

0

あ

0

72

員 音

から

祉

會 渡

本

任 72

0

事

業 計

L 探

道 几

路

請 +

IC 從 0

8

4

2

時

8

n

ば

時

分

あ

後

かっ 君 時 8 と共 狹野 六時 て予 快 VC 17 出 前 一蔵を 予も 發 + げ 分 與 72 其勞を感 或 案內者 分 街 道 差 訥 松 繰 PLI L 元 な 南 君 0 72 1/2 は 進 0) 松 來 だ た 元 h 3 君 た は 約 V 2 予 潍 束 勿體 を案 組 時 かっ 刻 5 內 0) 腦 す 青 行 き態 3 年 0 爲 達 IE. 度 83 確 为 特 IC 勇 は 17 團 威 豫 女 員 心 8 示 0 < L 3 道 た。 同 な 意 か を得 靈峰 修 絲 0 72 K T 高 彼 來 從 T 穂 0 72 事 精 ことを、 L VC 神 登 T るべ は 3 た。 7 此 時 松 15 始 小 元

末

な

御

池

3 🖺

〇霧島山 大平

とと 島 神 頭 あ 社 朝 0 10 日 袋 72 12 拜 輝 < 東 記 秀 念帖 島 Ш 10 0 祉 FII 峰 3 請 ッ 石 N 受け、 * 仰 ž, 綸 被急 川点 葉書 を需 のつ 部 8 落 72 を 過 神 3 職 他 杉 森茂 行の 支度 0 72 4 坂 で、 路 8 質 登 12 5 間 + 髮 時 0 霧

標札 供 等 社 から 为 側 好 あ 0 つたの 標柱 んで食べるのは、 17 で 東霧 紫内に 島 Щ 何 聞 從是頂上マ 處も同じと見える。 V たら デー ス 里十町五十 ケ 1. とは、 問」とあ 然し 秋海 此處のは、 つた。 棠 0 方言 傍に 小 供 「スケ 0 あ ならぬ登山者 0 た。 1.0 取 との るべ 遊が かっ に對する警告らし らずし 酸 V ので、 と書 v 子 72

为 あ 叉 るとの 同 君 0 ことで 語 3 所 あ によ る。 n ば、 狹野 加川 祉 0 老 杉 は、 本二 萬圓 0 高 價 で、 大 阪 0) 木 材 商が 買 20 取 0 72 0

程 此 なく 邊 驚と 木 林 駒 を脱 鳥 し、 0) 聲が 服 屢耳 界漸 く開 12 入 け、 つた。 日 光 IJ. 12 朗 映 C かっ T K 玢 瑞 鏡 は 勇 0 樣 里 な、 形 何 0 n 御きも 池を 陽 氣 左手 な威 1,0 瞰 を T 與 L た 3

小池又雄池とい に、海拔 は又雌 池 三百五 0 名が 米突と註さる。 ふ火口湖が あ る。 周 囘 かめ TL 一十八 る。 池中 町 鯉 所謂 鮒を産す 彩 島 るおうだ。 TU 十八 池 4 共 西 最 南 大 -1-0 MI 火 許 口 湖 隔 てる 0 あ る。 周 [已] 湖 + 面 は 町 Ŧi. 萬分 を有

M E 1 士五. + HI ワラビ、 の標木があ ハギ、 3 アザミなど打変れる草 原科 面 を登り、 七時 四 十五分五 合目 に着 いたかって 從是

0 工 II. 合選より 滑脳葉樹が相茂つてゐ 合 E 丰 附 近 ヤ 森林 ブ か = 5 は、 を脱 7 ケ L 1 漸次急勾 るが、 E 7 x ッ y 配 + とな 登る 3 + に從 5 ブ ダ ブ 2 などの U, 1 森林 + (C E = 灌 入 7 木 0 才 72 UC 丰 " 伍 ガ 0 始 L 力 T 針 3 2 葉樹 は " 力 2 ^ 1 を Ł 交 デ、 3 功 + 3 3 力 ナ ラ v 麓からぼつぼ " 六 ゲ 7: など、 ノキ、 落葉常 セッ 0 ノキ 紅 赤

枝矮縮密 1,7 6 は 3 0) 全く à 7 b ~~ 生 = 7 濃淡 偃蹇 1 7 3 種 P + L 17 て立 IJ 震 あ V 揚 3 紅 7 6 紫 0 領 32 色 域とな 0 花 7 は ケ 小 0 * 形 な 1 0 ツ 色 3 1 は 30 + 光澤 35 7 + 3 20 y 0 る淡紅 72 3/ 35 7 は、 登 色 久住が役ひ 3 普通とす 阿产 3 蘇ッミ 203 山" + VC ---見たの 幾 牛 分淡紫色 IJ 3/ と同 7 35 じく、 変り、 を 帶 びる 幹 逐

島等 3 Ш 中に 3 で 本山 始 は、 あ 総注 の名 6 は緋 50 緋紅色を 紅 度 視 を冠するキ 位 を排 色 0 0 通例と 深 de つた 紅 あ 6 にも 色 y 17 2 接するのも、芸だ少い方であつた。 拘 7 稀には白色のもあるとのことである。 らず、 殊 ッ 12 -植 ジ 木屋 途に此の緯火式の 0 名 は、 0 所 調等火式の花を以 天下著名のことで * リシマ 花を以て、 松元君や山麓の人達の あり、 は目に入らなかつた。 白色のはシロ + リシ 且つ我郷地 7 の代表的色彩となすの 7 方一 2 水 語る所 花戸の所謂本霧 い即ちゴ 般に + によれ 工 IJ フッ シ 7

72 文年 Ш 土 橋南 地 15 あ 間 0 の貴賤群集 里 1 h 谿著北窓 藤堂和 L 0 關東地 花故 植木 泉守、 譜談 KC 屋伊 して、 方 兵衛と によれ 12 + 霧島山 リシマと呼べ 花 緋紅 0 ば 下 5 色 3 より取奇 10 「笈埃隨筆 逍遙 B 0 牛 0 りと y 世 接木 せ 6 V ic, T 2 7 秘藏 あ 10 3 " 6 る。 京都 Ļ 1 ジ 1 方: 叉揷 四 + 双 蔓延 條映 リシ 後 東 木 K 武 多く取寄せて、染井の下屋敷 L Щ 7 10 にて、もてはやすキ た經 ツ せしより、 紅寺の境内皆キ 路 ジ の名稱 も窺はれる 今東武には 15 y リシ 或は ので 2 7 V 映山 澤山 あ VC とい 3 して、春 に植ゑた 紅 になりね。 2 0 ッ 文字を當て 李 1 6 0 ジ は、寛 L 頃 霧島 を

急徑 種 をゆ を 作 得 九 72 ので 時 ッ 石 現 一个久留 に着 v た。 米躑 又雙子石とも 躅 は、 錦光 花 V 0 雅名 つてゐる。 の下 12 「八合目是ヨリ頂上マデ十三町」 英名聲を 天下 W. 博 9 3 樣 0 VC 標 な 木 功

年

前

久留

米游

士

坂

本

一元歳と

V

3

多

0

丰

y

3

7

ッ

1

3

0

原

種

より、

人工變

種

法

UC

より

百

霧 島山 商

四

游

記

10

1

n

逆

0

有

樣

圣

體

讨

唐

金

0

如

<

10

見

文

72

れども、

風霜にさらせるも

な

ば 岩面 尙 3 かっ 其 0 其 h 南 成 方 泊 甲 生 つて 17 は 付 萬 高 2 H 分 目 T 3 火 を呈 穗 口 御いに 0 遺 鉢分 i より 跡 n 6 徑 は 古 あ 標 る空場の 高 とあ が問 に通 つて、 數 百 個 米。 ず 見える。 る。 大 " 日 顧 0 本 轉じ 37 舊 地 ば 火 誌 T 山 東 VC 西 方 0 t ある。 3 n 仰 ば げ F ば、 す 所謂 火 雄 口 高千 池 周 此 巴 石は 穗 池 百 0 け Ŧī. 高 峰 + 頭 3 水 米 伍 は 丈 藍 手 Ti. * 方 湛 17 尺 UC 取 許 開 3 口

得 あ 3 3 此 瀦 办 處 水 か まだ 5 多 あ 花 徑は 8 見 小 一々下り 世 VQ 矮縮 氣味とな L 72 h 3 Y 左 7 カ 牛 y 綏 かっ 2 な 7 de 斜 南 面 3 10 は 斜 面 7 0 E F " 方 n 1/2 ナ 窪 ウ 3 地 33 あ 面 2 T UC 布 飲 V 用と な 中 な 5 0

壇 玄 0 右 F. 翠 頂 所 F. な 頭 VC 謂 見 VÌ 17 御池 長 72 容 天 逆 徑 h 鉾 四 着 昨 南 力: V 日 方 插 72 都 かっ 間 許 L 0 城 込 は 中 0 0 要 登 巫 墨 n 4 路 地 IF. 老 玄 17 左 方約 な 1-降 時 1 路 UC 見一 は 0 尺、 其中 あ 九合目 之を 0 程 72 高 取 3 0 隆 五. 五高 つた 頂上まで十一 尺 起 許 部 分 0 0 12 0 鐵 あ 町 栅 高 3 t 3 を総 3 約 n 往 書 二尺、 ば 5 K V 崩 L 72 T 千 壞 標 方十 あ Ŧī. L 木 百 72 0 3 尺 七 急 あ 許 徑 72 米と 0 8 b 積 WD 石 あ ち、 狭 0 3 野 壇 靈 t 2 Ш h 設 0 高 楚 徑

者が 即 싊 逆 方: 5 为 石 鉾 度 突 か 3 は 30 劍 は 6 6 稍 蒼 0 鳄火质 暗 12 石 に當 绳 色 を呈 かっ 其下 T 3 0 0 は 張 想 T 方 CA は 3 來 n 5 兩 地 書 T 上 る 側 載 地 12 50 現 泰 F. 異 す 3 納 七 樣 VÌ F. 所 7 な人 n L UC 72 胡 程 72 其 面 部 0 桃 0 を模 形 だ 分が 大 所 さらう 3 施 17 6 節 出 約 UC 10 拳 70: B L 見 尺 大 噴 位. H. 史 2 H 的 H 寸 0 る 目 熔岩 石 鼻 見 鉾 解 兩 733 П 侧 身 UC 0 It B VI 廖 UC 判 は 無 しく 総 然と 扇 種 渡 圓 N 0 積み重ね から 現 42 の説 あ VI L るか n て、 治 それと頷か B 5 長徑 T 隆 3 お 釜 島 なるが、 物 0 約 橘 5 突 Ŧi. 春 出 寸 は 約 上

蒂

端

四

外 されど今の 近きものと 为 立. であ ち、 ات 72 ば 堂宇等の る。 け 41 突 如 見 0 12 CK 長さも きるの 入り ^ T ず。 0 ったる先 所 頗る 天下の奇品なり、 一つもなし。 カン さの 相 南面 知 遊 n あり、 方は、 に鬼 3: 72 沄 神代の舊物なりや其程知らずといへども、實に三百年五百年位の 何程深く入りたるや知るべからず。 南 若し銘なども有るやと、詳しく見しかども見へず」 如きもの見ゆ、 長 愐 3 に鬼面とあるも、 丈餘 ば か これも風霜にされ 5 太さ 今のは東面と 大 な る 竹 只絕頂に此鉾一 たれば、 西 程 面と相反して兩 K T 鼻目し さかか 25 25 本のみに とあ 側 VC 17 地 る。 中 文 UC

る。 續 日 本 10 か 東學 0 絕 III IC, 今 _ 0 矛 を 植 為 其質 鲖 K あ 5 ず、 鉞 4 あ 6 ず、 其 長 3 數

神代紀 は 尺 ば 之を天逆鉾と呼 72 薩摩 四 東 地 理樂考 7 賀 共 10 折 風 12 III 事 の天瓊矛と為 甌 分、 土 氏 昻 を日州荒島 1 17 記 は 氏 最上 は 0) 天 CK 此 は E 1111 矛は佛宮 逆 鈴 TH 部 本 未 鉾 共 風 神 L だ 神 0 景論 幅 遺 VI. 開 代 面 祉 叉近 すい n 家 高 0) H Ŧī. 17 舊物 寸六 納 る 30 0 お八 によれば は、 世 獨 即ち一身二 なりや 站杵 尺、 分、 島津義久新 L 時、 近世 長さ六尺許、 角 瓊矛の最下部より高 0 頂 四 · 其程 類 天 にて、 寸, 明 諾 面 47 所謂 予を樹つといふは妄誕 許、圍一尺餘、其質銅 の姿 0 は 青 柱 知らず」 頃、庭兒島の商人某、 にし 往 銷 0) 神代の靈物天瓊矛立つ、 時 à 御 5 T 社 神 僧 耳目 打 天 さ一尺七寸の所 方言 V てば 0 ZA 浮 なが 鼻 神代 金 橋 口 一井然と なり。 らも、 に似て銅に非 の靈矛と 0 0 舊矛に模して新矛を樹つ」とある。 音 J. より、 す 此逆鉾 黄銅の鑄造物 其 IC, とあ 西 僞 人物の 眞に 遊 霧 り建てし ず、 の上 3 0 記 奇 海 鼻二 端、 天 物 書紀通證 こと語 0 72 にして、 往昔折れけれ 逆 h 個射 8 一路 下 無し、 5 出 あ 給 題し

WD

る

B

0

あ

柱

0

御

天

0

瓊矛を以

之を探り見給

ふに、

國

な

6

n

即

房す 代 共 略 口 0 せ 是を比 ち 否やなどと詮 頂 小 中 碑 丸 で \$ 111 天 說 上 內 す 逆 あ > * 左右 ばなら VC 處 子 5 鉾 す 42 10 2 3 17 12 に、 立 は すべ 3 办 戶岳 h L 跡 40 だ。 尊稱 て玩 から つて it 此 0 は 0 82 2 きる 長さ T 議 現 其 力: V L Ш 垂 東霧 在 僅 西 眸 味 7 2 霧 33 す V 0) 0 n 新沙北 子 あ 0) る程 0 記 す は、 n 13 な 絕 かっ 給 尺前 燃電直 とか を放 島 0 逆 念 頂 17 る は 登 見 鉢穿距 は 鉢 は 斯 兩 Щ 111 0 17 約 必要 は は、 之 後 無 樣 者 と記 立 2 一。一逆 る。 17 新 5 東 0) 0 v E NC n 鐵 柱 紛 記 里 0 燃 嶽 は 餘 地 L 霧 T 隆 東 製 0 を築 鉾 理 認 有 0 0 b K 事 T 島 に巨 圓 は巨 天 南 72 だ 纂 南 别 の劒や、 的 0 8 3 Щ 狀 17 稱 3 立 實 る有 け 考 る 10 82 ٤ 8 33 大 際 大 は 0 UC 17 名 난 で、 は な な 0 基 いよ、 南 雄 あ L 樣 天 づく 模 であ す 大 る、 三叉の鉾 あ める噴烟であらね 谿氏 都 v 0 其情味に於て、 實用品 た推論 0 式 な る。 逆 城 る 0 的 富 かっ 叉逆 る 鹿兒島の は、 鉾 由 ら宮 1: 蓋 成 か ٤ 來 などが 文化二 叉 層 鉾 T 左 0 5 0 K 丸元火 3 本 は あ 3 崎 10 L 岡^カ口 呈 よ 商 Щ 無 河東 3 て、 方 數 岳 す 面 0 0 人 年 誠 v 大侮辱ではあるまい 直 3 3 靈 73 0 個 ばならね」、などといっ 碧 1/2 12 其 3 見 現在 歿 域 徑 は 平 加 梧 七 野 矛の 文 72 L 代 新矛 S 桐 8 は 韓な る。 百 0) た人 る 0 湴 氏 米 峰 逆 國细 所 n は、 を樹 舊 る。 嶽 نح 以 鉾を以て、 T 無 で、 物 9 を示 其紀 0 Ļ 論 は、 v 7 12 17 新 あ 參 N 72 天 L F 記 炊 明 北 稍以 て、 る 文 L か 者 逆 は IC, は 給 は 天 共 共 韓 遙 孫 0 鉾 T 天 前 彼 奇 N 名 國 降 泰 右 かっ 0 代 3 孫 6 33 絕 四 1 嶽 臨 納 裏 17 有 降 0 0 あ 九 3 游 0 33 祖 通 4 舊 州 0) 6 無 臨 ると、 記 綠 本 眞 あ 母 靈 物 0 3 旅 今 衣 山 111 地 3 僞 叉 な 雄 行

出

12

1

6

近

年

噴 かい

し

3

+

0

口

底

1,0

小

池

あ

5

孔

數

個

あ

0

最新 3

裝の市気

微

7

あ

3

此 2

處 7

6 烟

rt

めら 深

n 百

82

西 米

方

近 火

脚

下

かっ 讨

白烟

黑

烟 噴

濛 氣

々とし

7

立ち昇 ると

3

6

P

大

な 種

10

對

1/2

至

0 外

VC

察時

を眺 0 歌 名 方 40 3 0 3 思 谿 水 有 更に N 相 谷 口 名 出 應 Ti は な 3 しく 遙 け 3 n か は 本 所 な lic Ш 謂 薩 雲霧 火 H. 0 南 0 侧 此 0 17 面 名 鎖 0 10 山湖和 方 遮 6 氣 面 聞等 礼 0 布 激发 (景 T 觀 九 から 此 卽 17 百二十 は、 處 5 近 御 73 却 < は \$ 0 四 錦 見 て價 米 江. 文 道: 灣 ¥2 鉢分 値を添 を望 Ŀ 0 此 で、 むことが出 香 日 爐 ^ け 現 た。「雲に聳 非 2 今 常 V 40 は 17 於 來 n 静 Vi 72 3 カン 3 櫻 场 九 活 る高 2 島 快 動 睛 の雲霧は、 14 火 千穂の 6 111 は 千百三十四 6 あ 8 つたが 3 寧ろ本山 0 紀元 37

辩 の手 は 往 九 古 州 3 第 拜 想 一の峻峯 L 終生 VC 忘 登 礼 5 得 珍 12 FD 5 象 3 E 得 睛 朗 72 2 0 天 そ、 祐 KC 浴 至 大 0 氣字 幸 運 2 豁 然とし す る 0 2 T 清 あ 3 爽 極 まり なく、 皇 酣

E

女 僅 n 17 か 頂 伍 Ŀ 3 蕾 L は まだ T 面 綻 17 3 7 CK 火 82 Ш 7 砂 y ッ 礫 2 1 X. ジ 3 などの 以 ウが T 點 蔽 はれ、 なと 小 灌 L 木 主とし 7 易 to 其 0 て禾 口 72 龄 33 な碧 本 科 = 花 莎 + 芦 8 7 見 = 科 0 せ 1 如 75 3 3 0 1 は、 短 7 小 具 E な草 12 " 天 in か サ 本 5 ウ、 Di 降 散 點 0 3 72 7 L 星 7 か + 極 3 2 8

た。 揭 示 四 北 VC 隅 霧 4 島 測 候 Ш 頂 所 氣 0 檢 溫 檢 溫 測 器 0 75 爲 为 8 0 た 設 置 高 L は約 あ 3 を以 四 尺、 T 决 侧 L 面 T は 手 を觸 尺、 3 尺位、 ~ かっ 5 白 色 ~ 宫 1 崎 丰 地方測 を 塗 候 所 0 T 3 8 る。 あ

7 7 銳 丰 刻 間 2 は 易 稍 1 细 登 早 Ш 17 かい 烏加 者 0 もっま 72 0 5 庭 Ď; 翔 け UC T 3 記 念 注 來 t 日 72 0 7 IJ 為 L 72 2 3 三五 0 水 此 0 ウ 六、 南 110 0 移 頂 3 數 J: 6 + 此 0 處 喫 間 次 飯 70 0 か 食 先 5 L 事 4 次 72 10 2 低 取 何 飛 つて、 處 個 彷 かっ X 徨 廻 ら舞 鳥 0 す 3 T 0 CA 見 來 0 舞 は 所 75 謂 15 0 接 威 羽 力 便 化 白 答 ¥2 正 蟆 1,0 仙 400 黄 0) は 情 蟆 量 調 6 ば だ は * な 添

付

57

北 御 15 0 宫 鉢 間 42 向 は 12 U 縣 應 見島 淺 属す 新 燃鉢 1 縣 弘 42 高 から 屬 0 T 0 東壁を劃 南 す 穗 50 北 ic 0 縣界 續 頂 L. S 線 T r 解 韓國 は、 3 3 嶽 此 處 此 0 南 かっ 處 勾 6 壁 3: 配 上 御 宮 0) 崎 50 鉢 徑 沿 縣 0 E 5 と庭 北 puj 壁 15 見島 四 Ŀ 降 を続 (3 際との 向 とと つてゐるから、 6 約 境界線 西壁外 十 MJ 侧 で、高千穂峯は宮崎 本 の裾合谷まで下 Ш 霧島 と御 Щ 鉢 0 0 東嶽 后至 西 外 侧 共 西

崎

10

3

0

あ

じが 島 0 本山 神宮 9 測 昇 か 3 3 實靈 降 à 力: 十萬 は、 高 0 此 古 千 口 圖を見 0 來 穗 を將 徑 5 ると、 路 0) W) ic 登路 8 阿 括 取 南 6 締 ~ 14 縣 0 表 界 な 腹 8 口 0 15 んとするが 線 6 2 於 が御 あ L て たの る。 鉢 彦 を続 火瓊 如当 17 對す 3 奇 K 0 観を 3 朴 有 尊を祭 敬 樣 呈. 意表徴とも見られる。 は、 L 西より り恋 强 6 77 北 T 御鉢を庭兄島 州 0 南 當 彼 0 0 有名なる 稱あ 縣 優 17 1,2 3 官幣 n 3 方 橘 以 72 大 力 1 南 谿 社 0 15 風 氏 霧 压

家 證 標 用 芙蓉 天下 3 的 左 10 榜 1 らう。 の八 得 8 0 0 靈地 る 拘 名 ので、 分六朵 北 らず、 嶽 Щ 0) 場合 麓 北 富 10 别 今や國 1: 於 發 近 は解 10 Ш Ш は 來 T 0 頂 23: 一般見し 計 旣 立 Ш 岡 即 所 盡 梨 縣 5 公 にそうで 有 縣 御 園 40 40 では 內院 權 たとて、 大馬 屬 0) 問 問 題などは、 力を傾い 30 題 北 る。 其 南口 壁 方言 大滿 森 0 起 W 即 北 林 つて 美 悦 5 角白 口 0 自然消 に入 大宮 即 2 > 3 湖 3 Ш 5 *b*, る際 水美、 岳 甲 0 口 波 斐の 办 すべ 戰機 風景美 須、吉 志 治田 最 自 古 3 IE 近 來 然 に熟 測 表 岳 口 网 縣 6 口 \$3 冷 17 倘 1 せんとする有 מנל 0 0 其 3 看 古來 勢力 僅 六 他 3 かっ 极 12 0) H VC 殆 節 3 配 M Щ 圍 揭 3 劑 學術 げ、 0 型 道 的 樣 者 所 10 6 競 は だと 研 屬 有 H. 連 爭 究 为 權 0 獨 東 隨 v 10 的 3 占 起 分 は 於 方 海 0 0 る 考慮 n 繁 ·T 0 面 道 10 T 對 昌 あ 0 線 を る 有 3 を呈 5 0 3 うが 利 趣 便 な 味 L 3 所 或 利 謂 3 8 居

干糖拳 〇線 島山 Ph 側 を降 大平 ると、 左手に於ける凄まじき噴烟と 共 蹶 K 0) 香 は Ni 次 强 鼓 膜 を衝台、

徑

A

7

煮

え立

ち、

其凄

壯

河

东

Щ

0 それ

٤

相

伯

仲

す

る。

5 殆 數 15 は t て、 個 4 御 通 0 n 掘 世 噴 ば 5 0 加 AZ 氣 北 速 n 程 動 T 岳 孔 壁 火 0 を カン 口 ŀ. 熔岩 起 あ 6 は 0 緣 る。 は、 略 Ļ 間 17 12 砂 通 門 白 形 物 礫 渡き音 をな 烟 烟黑烟濛 は 深 所 0 S 隙間 紹合 赭 L 謂 馬之 を立 褐 から窺 A 直 谷 育: とし を政 徑 T 黄 法线型 3 褐 Ŧi. 0 色を ٨ て、 百 3 險 ادر 米 左は 1,7 星 5 渦 か 瀦水 脚 0 を卷 周 カン 圍 下直 Ш る は 三千 8 步 側 0 5 つゝ立ち 17 は、 0 17 崩 丹攀綠攀 米、深さ九十米とある。 あ 火 n 3 雨 落ち П 蝕 昇 を瞰下す。 10 馬 5 3 ょ 爷 0 つて、 溶 砂 越 礫 液 は 語 8 は 八 大 は 數 かき混ぜ 町 多く 凝 日 條 2 本 0 稱 A 火 0 輻 地 付 П 音 誌 此 たやうな暗 射 底 及 1,0 0) 谷 右 には 妨 CK THE 3 手 げら 作 H 射 は 水を湛 本 刻 急 5 n 風 線 傾 7 始 1,0 斜 沿 終

を採 壁 呈 0 は、 脊 越 集 B で 111 沸 層を あ 72 中 ことも 第 6 叔 現 ば は 0 し、 難 な あ 所と 6 0 頗る急 72 82 する から 其後 峻 馬 爷 6 噴 あ 越 るが 烟 そ 猛 烈 河 東 危 西 險の 壁 碧 0 梧 恐 低 桐 力: 氏 v 方 は、 あ 2 か 寧ろ 5 72 0 命 數年 前 廢 越艺 と名 止 繩 L 72 17 づ そち 依 け 72 2 だ。 T v ح 口 Z 底 v った。 n 10 こそ眞 火 10 硫 口 蛋 內

谷 谷 越 Ш VC 橋 滿 とは 南 V 3 ^ あ 座 5 3 谿 ども、 UC 7 T 氏 v 成 左 ふな 猛 0 或 3 水 0 西 樣 燃 左右 向 方 6 遊 足 は 文 記 10 UC F 皆谷 隱 登 足を 17 あ t KD 萬 3 馬 方言 b 運べ 30 似 1 10 2 0 虹 又 て 0 腥 谷 ば、 爷 立 2 5 30 E VC 劒 越 0 得 栗 馬 T ٤ 0 8 0 15 双 9 B 0 0 v 言 脊 底 2 如 0 E 或 は 越 VÌ < 所 雲 なる 3 け n IC 50 横 前 か VC 行 至 82 る、 氣 T 燥 3 1 40 後 りて 眼及 72 左 吹ら 石、 如 なび 叉御 < 右 後 ば 來 15 左 さて総 ず、 足の 6 は 古 鉢 異 0 巡 唯 形 右 谷へなだ 踏 りとも 何 の悪烟 h は 0 T となく 墨の 成 谷 所、 せ は、 いふ、 るが 如 総か 現 n 深 < 落 は 動 如 25 る、 れ なる雲うづまき來 5 17 (馬 0 て地 鬼 なることも 其の 四 所 神 行 脊 は 軸 0 或 1 中 只今碎 如 は 處 程 登 Ŧi. な 3 佛 あ 狹 n IC きを 町 は 唯 折 0 KC 平 n 如 T 同 知馬 110 4 3 0



(無米)

武田久吉氏撮影

書 け 爲 種 0 n THI であ る、 に取 12 伏 R 共 0) B 3.5 0 猛 12 載せ らる 此 包 0 叉水 火 金 72 0 23 ず 12 色 T 難 3 t 火 1 1,7 B 匐 煮蒸 あ 所 出 6 な て、 0 通 (1) 匍 づ る 72 過 あ る ح 10 15 る故 なり。 よりて、 とも 0 0) ならざれば、 叉陰氣も集り來 700 情況と、 12 あ 叉折 5 當 種 此 時 R 昔人が 其 子 Ш A 0 は 17 風 形 陣 T 0 6 奇 見 は、 火 爲 0 好 怪 VD 奇 Ш 風 に此 火 不 るな 紛失する 吹き來ることあり、 的 觀 の上 思 雕 0 身 議 5 程 3 17 味 な る人 雨そう لح 8 取 かっ 又硫黄 共 窺 な られて、 多しと 1/2 は かっ n 言 が始める て面白 皇 ふる 加 猛 雲霧覆ふが いふなり 此 發 火 愚 氣 祥 0 時 な V あ 中 は先達教へて、 0) 5 るう 靈 5 ic 0 地 0 舞 故 などと書 静 紀 U 1/2 それ 12 40 文は、 是 對 落るなり、 す 水火 8 17 3 v 考 水をそうぎた てあ 急にうつ臥 懂 以 相 2 激し 憬 前 る る。 折 17 3 小 深 塱 3 昔 是皆 L 刻 校 17 0 時 は L 敎 17 風 に倒 谷 於

崩 233 で 日 it n あ 馬 落 鉢 概 0 爷 非常 ちる た。 越又 \$2 0 非 外 常 0) 側 馬 17 で、 穏 10 8 爷 鉢 鮮 か 西 越 廻 かっ 移 りと (1 0 な 江 步 降 修 Ifn 頗 業 3 天 v 0 所 8 る 0 2 惱 如 八 卒 南 T き赤色を呈する 宝さ 町 0 る 許、 72 72 る 和 0 0 治 隨 ٤ る。 は 分急 + 富 との 噴 士 で 時 煙 Ш 0 火 多 6 亦 頂 It П あ あ 靜 Ŀ 5 壁 カン 0 0 子 12 な 御 72 現 折 pi: 鉢 且 從 は 柄 0 巡 來 \$1 稜 とて、 りと 實 72 角を 驗 は 有 L 地 南 違 た十 す 谿 は 21 3 H 數 熔 黄 約 0 座 褐 岩 紀 4 0 0 文 周 碎片 活 は、 赭 弱 褐、 火 0 Ш 砂 巡 怪 黝暗 17 磔 6 於 办 0 サ て、 思 あ 色 ラ 0 は 3 サ 3 礼 だ à ラ 此 0 لخ 曾

部 離がに 岳 -5 T < 青 間 共 Ш 活 12 色 晒 17 煙 動 は 變じ 狀 O 几 中 況 巴 3 樊 0) 凝 通 登 種 過 視 L す 0) 1,0 72 耽 光 3 0 撑 數 3 だ とと 力: 3 時 放 間 數 0 0 其 第 72 あ 時 0 間 子 な 巴 は 壓 即 0 探 で 喧 5 檢 煙 明 記 5 降 治 念とし 0) 灰 Wg 1-0 所 見 Ŧi. -6 0 雞 年 けた 12 八 此 接 月 色 銀 L 10 緣 澤 d 72 2 服 火 永 鏡 明 1 8 治 П 保 銀 几 3 存 侧 1-周 0) L 72 時 年 計 八 V 0 0 月 壁上 銀 -0

T

見

82

所

0

Sign

0

72

〇霧島山 大平

島 8 0 Щ 7 72 253 殆 ど此 用 座 0) 黎 光 1/2 祭 t 40 0 接 得 验 江 旬 力。 0) 0 筱 72 12 0 は あ 殆 3 F. 消 2 夫 世 T T 0 72 今 巴 久 住 14 6 药 SI 然 Ш 霧

享保 72 等 とと 一百區 6 松 島 活 元 鄉 其後 尺 動 年 111 許 とあ 哨 1/2 九 始 尺 月六 火 爪 とお 3 屋 0) 5 H 111 1 最 より 6 弱 林 悉 75 沂 霧島 < あ 大 0 續紀 焚け 天 炎 る IE. ٤ 文二 [il] E. 脯 车 甚: 社 12 5 72 は t 1 だ + (1) \$2 社 延 月 1 傳 悟 年 3 明 15 、東等明 36 七 和 17 は 车 九 t 可 年 仁 月 岛等和 な 10 は、 九 安 b 师 0 社 年 火 年 炎 7 鳴 諮 3 狭 縣 大 動 始 甜的 噴 里子 1,7 二百 熾 火 0 市中 غ 諸 力: 社 (2 邑 あ 瀬 + 其 響 0 72 民 餘 後 雷 万 尾 屋 年 文 (V) 田 神 現 0) 暦 如 間 4 景 社 元 0 98 に、燃 年 30 拳下 を被 及び 大に えし 高 炎 るとと十三萬六千 Ħi. H 六里 原、 T 17 t 高 h 洞宇皆 時 砂 石 刻 餘 積

7 1) t あ か 所 2 御 7 つたが 南 金 K 1º 12 ザ ウ 0 0 72 Vi. 西 證 押さ終 花 Mi 此 島 t 出《强 邊 加出 0) -10 次 碧 富 ス 为 YIII = 5 原 色 ブブ 1 5 15 ナ 牛 緩 ٤ 小景濃 南 かっ V 林沙淡 江 伸 2 3 爪 所 为 7 CX 小 林 あ 先 7 7 1 50 1 カ 7 5 ウ 南 h 叉 とな 方霧 F. 0) ッ 的交 純白 名 リ 5 ナ 島 (1) 6 T 神 な 宮 12 0) フ 高 此 3: デ 原 ガ 戦 多か を辿 火 110 面 的大なる赤松 カ 0 カン こる氣 7 5 用 0 72 il __ 0 持 北 3 5 は P 方 23 書 珍 7 狹 L の林 6 IJ 72 野、 V た發 2 8 S. 小 初 ある。 ウなど見た。 告 3 林 0) 0 地 標柱 程 林下 カラ は、 10 通 办 の芝草 瘠 す 見 此 文 せ る 72 處 72 Ш 15 低 徑 伍 5 3 (1) V L 交 0 T 高

橋 文 脚 + 湯っし 時 二十 野" Fi. 泉とい 3 Fi. 符 間 3 許 行 0 5 0) L 70 橋 あ 7. 老 渡 0 72 n Till 暗 层 V 小槍 侧 1,0 4 林 灰 地 17 白 15 入 5 濁 數 0 棟 硫 淙 0 黄 家 1 泉 是 72 3 Di 73: あ Jil 数 酒 3 0 3 所 馬 音 25 4 鉛 1 聞 6 警 洏 4 175 き出 葱 8 程 1 植 な (3 3 3 谷 72 畑 33 111 8 V) 設 F 117 備 岩 12 見 は 8

料原

15

供で

L

72

V.

程

0

か

つ伸

72

中

割

合

17

太

1

25

出

72

ウ

1.

0

Ti.

六寸

許

0)

3

(1)

为言

澤

H

目

17

入

0

72

0

は、

夜營

75

5

採

0

T

食

颐 3 不 良 0) ġ. 5 0 态 3 崖 侧 0 噴 氣 孔 かっ 6 は 盛 h 10 白 烟 を 順貨 V 7 0 3

流 致 たと は案内 1 は新ジ 十餘 川と 頗る ふの 者 丈、 B 0 JII 歸路 優秀 は な 振 it. 6 0 15 約 72 是亦日 を氣遣つて、 或 想 千里 几 12 間 分 光華 12 n 3 瀧 11 發源 3 あ ح 嚴 る v 之を略 此 のそ す 111 共 C る Id, 提 3 n をも L 30 75 す たのは、 JII る所 又霧 孫 思 で 降 CI 0) 出 臨 品 師に因んだ天降の真景繪を見るに 遺憾で 3 華 0 野 嚴 0 0) 25 あ 名 泉 る。 つた。 治 (1) あ F 17 霧島 JII 3 方 共 + 0 名が 瀧 MI 落下する水容、 H 日 壶 案 光 公內要覽 35 (V) 0) IC, 2 る。 傍 12 n 元によれ 霧島神宮 17 近 比 111 岩壁 年 L は、 都 # 72 に翳 0) 城 0 第 發 PL T 0 里 電 を過 す樹 0) 瀧 所 5 林 は、 沙 布 出 0) 3 景 直 來

4 あ 薩 約 72 後 十五 0 尙 3 硫黄泉で、 + 燒 加 癲 南 五町許 時 病患者が之に MI 17 原料 近 三十分。 H 右手 (古の は 溫度百 森林 15 笠沙の御崎) 明藝湯 此處 17 浴して全治 E 登 罄 十四四 の白土に、 つて、 着 度、 硫黄谷温泉を經て、 3: 明治 L 加世田の白砂、及び粘土を用ひるのだといよります。 産業上にも亦離れの關係を有するとは、奇しき感じもする。 十四 (九八八米) の白砂、及び粘土を用ひるのだといふから、皇順發祥の 年なでは、 榮之尾溫泉着、榮之尾館 然湯とい 毒泉と稱して、 を見る。 2 難分徑 は カン L 格 土人も 别 V 別名 0) 高 (富田重治) 顧 B 低もなく るもの あ る。 附近から白土が 落しく B 無かか に投じた。 西北 自 10 つたが、 進 を呈 U 出 時 因 23

浴後、 新 豫定 6 0 よりも早く 松元君 輪廓 废く 的 段 茶菓を經し 到 槽 着し 5 力i 72 法 0 办 で T 返 构 良 L 造 **然**內松元 V 72 優良 0 狭野 君 部 氣 常 17 持 B 浴 10 明 勸 から 5 於 好 3 3 け る案 方九 早速 篦 內 0 料 引 尺 位 結 0 V 72 定 0 (1 TE 木製浴 入浴 25 THI VI 用 L 72 槽 清 高 水 Vi 穂峯だ 浴室 0 設 更に 備 は、 けならば 8 幅 あ まだ 二尺 木 深 0 香

〇霧島山 大平

Ŧī.

+

錢

とな

0

T

わ

3

3

なと 居 17 2 Ħ. 3 る。 との * 23 V 語 鄉 2 彼 な 敷島 里 は あ 0 72 午 力: 0 る 後 0 方 25 0 行 彼 K から 通 方 時 辭 IT, 方言 機敏 信 尾 L L 必ず意 なる館 榮尾湯 て歸 た。 8 0 ると 潑 延 主 潮 を出 味 長 あ 富 Ë 72 す る光 發 る 32 田 予は 青 氏 輝 は 72 年 を放 彼 0 0 宿 慰勞 だ 元 3: 泊 行 3: 氣 す 0 ٤ 0 動 3 を賞 あ L 快 か T 1 らうと想 感じ 讃 若 彼 足 に敷 し、 72 W 且 像 島 歸 0 彼 時 1 6 狹野 個 は 三十 72 33 を 年 梅 分狹 贈 青 齡 路 年團 2 1,C + 野 た 入 0 0 Ŧi. 10 3 六、 幹 歸 予 0 部 で、 着 は ٤ 彼 酒 \$ た 0 Ŧī. 烟草 25 て、 精 圓 神 ح 盡 8 な IC 照 瘁 用 0 ZS 後 T

によ 館 內 n 主 料 は VI 如 40 關 警察 才 なら中 す 3 部 長 12 地 女教 0 8 定 鋭鋒 員 85 3 17 は 13 v 2 0 前 韓 3 國 30 身 嶽 を 有 妻君 圓 L 八 は な 1 候 0 錢 まや 7 あ 大 か 0 浪 72 な 落 池 着 圓 味 , 办 六 見 觀 2 音 72 方: 翌 Ŧī. + 日 錢、 築 內 者 高 7 0 語 穂 3 所

木 分を あ 0 名 與 近 3 稱 は ^ 3 科 ナ ラ、 目 近 用 來 途 カヘデ、 等を 或 立 書 公 園 5 力 た 0 3 問 • 標 題 札 モ そ、 42 伴 其 7 S 樹 力 木 兩 7 UC 縣 " などの 添 亦 着 T A あ 計 闊 葉 る 悲 0 針 V) 葉 ž 步 所 を 0 K 逝 混 17 淆 8 見 樹 2 72 林 > あ 皇太子 るやう T だ。 殿 相 F 連 御 林 5 成 中 婚記 1,7 爽 は 快 念树 な

貨 12 店 あ あ 溫 泉郵 泉 無 便局 色 透 其 黄 8 多 名 明 谷 題 0) 0 沼 V 通 明 L 泉 磐 2 か b 看 泉 1 祭 多量 板 尾 は -6 和 方言 湯 眼 氣 0 3 温 清 硫 病 3 泉 麻 黄 3 12 0) 呂 で、 特 E 總 含 公 劾 稱 子 办 0 h L 謪 は T あ 6 ると 處 記 る 霧島 念帖 る。 0 あ V. 溫泉 最 は る 12 と傳 n 3 とい 其 多 T 數 ス る 0 る。 6 3 0 1 浴 n 2 6 30 客を 祭尾 ブ る。 を 收容 明 請ひ受け 13 到 溫 便 す 湯 泉 局 3 は、 VI は 72 硫 秫 共 黄 硫黄 3 東 黄 谷 出 谷 北 W J. 淵 あ 力 溫 泉 0 從 0 T MI 四日

許 雜

举

氣

味

五

町

許

12

南

3

泉

源

種

A

あるととは

狹

野

神

宮入

口

5

大

K

的

腐

告

0

通

5

で

あ

る。

此

地

海

0

稱

呼

は

一般

17

工

1

1

<u>ا</u>

V

つて

2

3

大正十四年

榮之尾館主富田氏の通信によれ

IT

此年春、

秩父宮殿下、

高千穂紫御登山あり、

初

夏伏見宮博義王殿下御登山、禁

〇彩島山 大平

竹 * L 鷄肉 U) 間 Щ 九 豚 梅 Z 百 一段する 肉 胜 (7) 朓 米 0 間 望 3 PL 2 0 洋料 に躊 絕 东 V ふの 佳 12 理 大隅 踏 温 な p: る 23-3 3 Va 4 深. は + る。 0) 島 Ŧī. 霧島 0 た。夜具 0) 麼 宿泊料 南 覇 前 る。 温 後 Ŧ. 泉 高 の絹布 は 元島津公 中の 恩 蛟 \equiv を Щ 首位 圓 見 0 なと 五 + あったのは、 0 を占 錢、 御 V 8 JE: ふこと Щ 湯 行 自 6 辨當料 あ で 盐 自 三千尺の った あ 證 か る。 ので 三十錢。 的 1/2 薩 0 Щ 廣 南 告 尾 上とし 今尚 料理 尾 (1) 館 記 通 0 VI ては 念保 Щ は 6 題 形美 樓 珍らしい。 る優 存 具 Ŀ 0 10 よ 良で、 h 室に、鶴の 天下之絕景と 錦 る開 YT. 灣 聞 F. 岳 0

It, 榮之尾溫泉 尾館に御駐烈あらせられたとのことである 溫 泉 又榮尾湯 日 本地 と記 名辭 し 書には、 陸 測 榮野尾湯。 Ŧī. 萬 分 圖 大 17 は 日 本地誌に と註 は、 祭之尾 し 種 溫泉。 K 17 書 霧島 V T あ M るが 案內要覽 地

Þ: 切 御 Ш 後 H 開 には 機 をも負さ 開 か 夕刻 游 ら歸 嫌 嶽 绕 统 再 伺 12 つて來 移 地 23 CK 入浴 に開 省 ٤ 12 ぬ有様であった。 撤 b 恋 3 巴 る人 な 談は 2) T 知 後、 T 6 大 に快 益進 られ 達 **隣室** H 廣 の L 7 話 h K い前 本居宣長 の一人客も亦此 0 る T 3 官吏 昧 the 其名 椽側 至 各地 0 一翁や 刺 吉澤 境 極 の安樂椅子 生 0 VC 0 40 情况 庄 Щ 入 17 作氏 宮崎 つた。 處 入 岳 0 ち讀 野 談 15 に及び 安釋 72 治 縣警察部長 來 に凭つて、 0 ら教 氏は せれ て 富 士 へられ、 72 温泉場と 屢來 其 Щ 0 機 縣 清 錦 氏 說 8 は 水 訓 江 X で、 得 學 初 德 L L 灣 17 ての 生 太郎」とあつた 72 F. 3 X2 時 0 1 0 を遺 中學 同 程 代 地 位 光 には、 置 景 憾とする 時 は、 の人達や、 展望 代 に見惚れてゐると、 歸途予に VC 稍 は、 盛 構 無 ので、 九 類 などと る嫌 必 12 警官などには、 0 日 す Ш 本 ことから、櫻島 かい 궲 語 岳 警官の來訪 Ш 攀登 母 0 岳會員 あ 72 H つた を試 を探 緒 2 殆ど みた るや が L 12 M 浴

森林を脱する

Ti

原管

原

となり、

池

K

着

v

た。

時

10

八

時

四

一十分で

南

3

1 | 13 5 3 6 ·校長井 一般非す 产 想 ると 3 T 勸 23 0) 5 予が五萬 iifi n によれ 72 分 氏 け 并上氏 一を借院 北 白 JII L 大 は清水氏と、 たり、 妃 殿 F 宿の 0) 主人 應 東京帝國 兒 13 にも質問 御 大學 成 を参 L で同級であったとの 720 送 L ての 後庭見島で逢つた、 歸 途 ·C. とと H 霧 指為 あ 宿益神

或

同

14 V 發 今 Ŧi. 月二 午前 H L 72 は 十二日 -6 韓 時 國嶽を探る日 -1-分、 河 < 程 朝 案内として松方嘉左衙門 珍らしき快晴な 夕 75 0 a. でい + 早速 Ŧi. 意 支度し とい ふの て紫 3: 內 者を持 見之 72 0) 0 たが、 祭之尾 仲 K 水 館 な

5 簇花 E 約 を関 牛 , 時 L 間 モ 7 3 棒の わる ッ 花 ガ , 功 , 力 此 2 , Ti ナラ、 彼 方、 程無く大浪 深綠林 7 又 7 , 17 紅 2 數 Ł 點 0 力 趣 17 を V 添 = カ > ナ ~ チ デ などの 7 ウ ジ は 混淆 IIJ 樹 憐 林 な帯 0) 裡を登 黄 白

里强 所 碧 で降 梧 池 に質に 十八 氏が ることが 批: 餘 6 立派 威 池 N 高 * 41 大浪池墨と 出 低 江 飒. の第二位を 典型 來 3 75 前火 古よう 登 V 占 內 ふべらだと批評 h 日湖を呈 福 33 V E 3 若 72 111 し池 庭 五萬 は " 一時で喧 整然た ゔ゙ 分 池 1 72 0) 6 噪 0 PLI x によれ る鈍圓錐 It L 南 + 壁 3 或 Ŀ. 7 ば 至當 で け 狀 ブ であ 紅 シ 0) 水 などの 面 Щ 1|1 千三百 Ŀ を聴すとき VI 3 海拔 42 混 在 池 は殆 林 3 1/4 -1-酹 千二百三 0 ど園 で 讨 米 浴 と註 展望開 那能 形を 3 十九米。 て、新碧の水に映じ、 30 なし、徑約七百米 の怒りに觸 裕 바 -6 處 南 壁 から水際 周 河東 〇霧島山 大平

11

天 水 36 俄 かっ 今や 17 暴 國 n 7 3 2 公 量 0) 誾 題 族 12 件: 群 棲 23 す 弘 3 版 3 練 習 所 K 恐 まで設 n T 置 補 ず 3 3 計 3 慧 0 733 ינג あ 無 3 v تح 5 你 10 け ^ n T る。 6 3 0 (1) 神 秘 的

湖

の、 滿 開 池 內 0) 畔 美 12 は 觀 種 8 E 稀 무. × A あ 15 L 7 白 かっ 3 3 花 33 + 花 0) ブ B 花 は 2 戸 光 0 潔 2 Ł 叉 あ 所 X ウ VI 3 絞 帶 藆 = 紅 h 火 1 式 淡 ウ 0 紫 多 深 " 色 +" 0) 緋 を普 などの 的 色 8 0 3 + 通 3 小 y す 灌 V 3/ 3 木 0 -7 72 735 ツ 17 伍 1 或は L 3 けは T 紫 此 12 = 倾 愿 + 17 7 10 3 72 キ 逐見當らぬ 3 1) 0 2 7 叉 頗 一殆ど 3 紅 延 0 35

沙 72 若 頻 芽 5 to" 17 12 1 訪 伍 夕 n L チ T T 110 ナ、 3 た。 P 7 T 7 E セ IJ " 2 2 12 夕 サ Z' チ ウ ウ 110 ナ 3 毛 (1) ウ P 果 セ 雷 牛 2 VI 2 7 食 11 15 L 1 得 3 3 ·p 14 2 1 7 2 7 = を、 7 2 ジ 1 築 力 2 內 1 IJ 者 ナ ブリ け ウ -など 知 力 0 ウ T か モ 3 0 1) T 72 ナ 47 な 其 花 15 0 は 崩 蜜 之 H

十分韓國線 との カ 茂林 高 J. 第 裾 幹 デなど茂 一徑を左 徑約 合 3 33 位 谷 脱 を占 す (1) Ji. 0 ると、 後者 すと 頂 あ 2 K 72 Ŀ 収 8 3 混林 3 0 h 40 5 迹 ふ旺盛 No. 方が 此 大浪池 次急 處 3 L 72 幾 貫 VC な 4 么 分 3 四己 濃 發 7 Fi. " とな 萬 育 韓 4 110 5 國 分 ッ 周 6 狱 ツ 即 6 -3-8 11 10 ち 2 火 + 3. 約 10 示 向 t Ш 0) 4 1 7 0 砂 37 紅 72 里 ケ T 磫 花 はず 0 登 VC 水 0 ٤, は、 つた。 L 1 往 T " 口々崩壞 千六百 子 1 3: 5 3 外 デ 始 0) 侧 0 ~ ブル 開 茂 * L 的 リの て接 + 花 林 降 70 所を、 九 を見 4 白花 h 0) 九米突であるから、 たの か ZE. 毛 が、 左屈右折してゆぢ登り、 かい 地 = である。 11 際立つて目に着 樹幹立 リ 大 沒池 元 花は 5 111 揚 4 5 何 侧 ツ 和 ゔ゚ V 8 高 Ш 帶 3 韓 " 約 紅 或 時

讨 は 頂 Ŀ 火 1th ि -1: 美 Ŀ 111 ינק 0 v 御 6 略 內院 圓 火 形 П 底 K 0) 液 12 火 及 智 を有 CK L 尚 JE. L 火 15 天 周 45 T 巴 侧 約 _ 品 1/2 里、 H -6 0 あ らう。 深 3 約 草 Ξ 面 本 百 VC 布 5 米 3 V. 72 P やう li: ~~ 丰 50 7 IJ 付 3 瀦 3 3 7 水 を主 200 無 (5 寸 花 其 3 爛漫 小 然 0 灌 72 期 木 3 節

韓 大 17 化 浪 は 7 池 do 畔 らう t Ш h IF. ح 3 12 推 紅 程 14 3 紫 高 37 v 化 0 72 す 力: る で 氏 あ らう は 温 + 0) 低 力 月 V 0 2 2 攀 ح 0 登 カ: 好 察 6 圳 あ + は 3 6 力 乳 倘 5 3 调 開 [III' 日 花 東 0 0 碧 後 真 梧 0 景 桐 あ 氏 15 3 VI は は 接 せ 慽 國 82 0 0) 0) 極 0 B. は、唐 あ 70 3 紅なった。

頂 E 又韓國緣 將 0 3 ili) 1 涯 H ~ Ł 72 方: 3 など U) 江 州 0 7 古 4 美 宗 名 枝 " 雅 7 とも 所 肅 家 办: 癌 L 牛 種子 案 伙 横 無 V 6 IJ 大空 內 全 云 0 خ 50 5 3/ ふ 部 屋 17 3 擴 於 V 7 廖 が は 八 か は は 透 3 0 予 本 5 3 口 供 17 3 諸 西 は 州 かっ 251 高 れど、 水 因 H 嶽 謹 以 T 7 叉 す 北 穗 h 園 る 72 健性 韓 0 藝 0 方 F 肿 國 尺 0 Щ 家 V 1 的 里 0 5 嶽 E 10 E (1) 1 思 服 人 は ッ T 高 6 42 37 あ 5 3 3 6 0 1 は 涎 Ŀ る 0) あ 30 見 47 VI 女 5 氣 堪 70 12 3 尺 麓 0 V ことが あ 晴 登 82 鎮 VC 國 ^ Do 限 3 3 號 VQ. 2 嶽 るとき を 迎 1 滿 > 方 富 派 出 5 は、 時 72 面 1: 0 17 呈. 來 治言 27 か: Щ 深 韓 餘 L 82 3 遠く 御 Ш 薩 72 3 共 程 V V. 內 0 隅 大 0) 樹 多 V + 院 0 霧 火 韓 日 容 7 V 0) 角 口 Ш 島 0 干 風 所 底 办 0 = 姿 樹 y ЦI 見 嗣 州 17 2 VC は 齡 10 萬 瀦 角 * 幾 は、 7 年 る 2 脚 實 23: 百 水 雪 لح 望 8 夥 高 下 17 年 見 办 は U 古 K L Ш 3 思 2 82 瞰 色蒼然と V. 0 經 禮 0 は 浴 弘 57 3 装と 解 は n 5 E 滲 得 VQ VC i 望萬 出 大 2 3 8 V 浪 7 Vt は L + 想 V 池 は 里 2 5 T n VI P THE. ば 水 かっ n 8 其 觀 3 天 IJ 3

崩 2 0 南 72 n L 理 为 篡 T 6 其 考 質 積 0 111 10 あ 掌 M 韓 UC は 0 所 圆 東 加 然 4 m 嶽 岳 3 天 t は h 逆 看 彩 鉾 VI は 3 から 登 0 B 牧事あ h 弘 Ш 園りる 矛 驛 0 東 举 かっ 岳 よ 5 叉 5 10 更 此 Ш -腹 す 層 17 12 草 n 高 ば 木 峻 里 州 無 10 登 L て、 陟 0 لح 當 は 定 特 期 黎 中 15 自 事 險 嶺 13 働 神 實 難 以 Ŀ 宫 次 JI. て は n 为言 73 な 更に草 運 ば、 3 V 0 之に登るも 古 水 來 3 徑 東 0 0 路 岳 为 10 0 此 登 此 最 徑 較 る人 白 \$ 的 石 稀 办 便 逹 焦 なり 利 0 + 多 7 0

便あ

とな

つた

と頽

[/Lj

麓

VC

有

名

な白

流

2

作

3

0)

0

は

あ

3

女

v

か

٤

想

像

す

る

(1)

同

篮

法

C

あ

3

V

H

VI

昨

H

12

4

優

3

H

本

晴

な

0

で、

南

方

H

應

兒

島

灣

Ŀ

0

櫻

11

H

は

V

ふま

7

8

無

(

此

ガ

IC

VI

國

分、

彩島 大平 浪 3

池

白 L

H

蝕

岳 所 な 御

0 かい 3 池

如 あ

逝i 韓

VC

富 0 湯 Ш

な

涿 く太

水

8 古 泉 直

な

す

3 休 湯 T

あ

る L

沸

腦

暗

出

3

3

或

嶽

如

t je 徑

6

熄 à 籽

T

霧島 硫 5 肌 3 玄 励 宇 間 10 黄 0 有 順致 附 1 豁 12 製 を UG 0 出 或 -1-鲸 3 る 懷 72 嶽 白 所 觀 **海**路分新 欺 1 は 池 音 息。治池 を 3 b 3 枯 h 4 池 山でが 鉢 ٤ 烟 第 3 見 n 0 V は KD 四 賽が一 3 える 左 72 付 3 立. h 島 10 方 H 0) 六三 原等美 つて だ 木 IC ば 光 Щ 觀 力: 北 は zi: 0 力。 KC 静 る 米 相 あ h 腴 四 归 3 3 深 伍 53 豇 岳 す 3 7: は 綠 E 40 0 呈 3 几 釜 稱 毛 此 0 口 肿 す 周 2 處 衣 白衫子 は 3 玄 から 裝 銀ッを 3 0 10 天 あ 金十 3 B 東 Ili " 17 17 る 葉 ガ 其 山 亦 着 開 黄で 17 原 0 樹 整 金数放 ग्रम 0 け v 頂 始 老 は 然 な 間 1/2 72 0 T F. 鬱 的 樹 赭 新 VC 72 緣 UC ٤ 點 福 仙 3 富 燃 登 8 色 L 紺 富 境 士 鉢 K 0 3 3 T 青 式 T 0 1: 0 E 之 光 现 式 の此 L 0 衣 景 3 6 夷片方 壯 C 0 0 擁 館で守ずに 玄 雅 3 湛 烾 絕 具 添 岳*岳 は 致 E し 無 红 72 * 60 4 华 比 莊 3 무. 共 御 7 明 即 0 三〇 嚴 深 0 池 麗 す 3/ 銳 大 で 威 3 池 統 25: 74 無 火 あ 中 あ DC 此 あ VÌ 天 口 U) る。 12 糾 米 米 b 3 0 17 全 越 碧 ulik 火 瞰 を 南 0 池 33 П F 古 與 池 畔 峙 湖 す lic 風 蝦亞水 10 頂 ち 大 す 霜 6 野 Ŀ 浪 副 17 相 觀 新 17 池 我 西 燃 とそ あ 映 音 火 3 御 旣 n ح 脚 から П 鉢 10 T 湖 加力 あ 0 か氣

櫻 治手 士 島 木*此 尊 ES. 雜 號 温 應 泉 誌 兒 * 負 岳 B VC t ^ * 0 終 n 3 TI ば 開 て、 街 聞 展 多 霧 嶽 開 良 島 ps: L 火 岳 Ш 眞 12 彼 終 帶 1/2 フ; 優美 は る VC rt な姿 富 大 あ 士 隅 帶 3 を 0 0 K 示 高 霧島 類 隈 L す 72 Ш 5 Ш 大 其 は 當 火 右 111 VC 12 之 は 脈 703 压 60 廖 て、 起 伏 糧 0 波 を 8 な 隔 ずる T 1 琉 球 遙 10 か 10 開 聞 は

方 池 盟 Im 二十 主 10 かっ 0 2 南 45 t.º t ある ラ 水 麓 3 * 西 座 7 麓 " 0 洪 F VC 火 大 定 は H 日 銳 力; 本 V2 尖 0) 埶 あ 地 る 誌 0 多 泥 硫 2 高 あ 10 F 礼 1 氣 v は 穗 ば 水 n

蒸 n

大 氣 高

千

藕

南

t

四

北

飯

盛

0

間

1,7

2

る

る

現 奉

15 (1)

門管 東

烟 す

> 盛 麓

御

鉢 h

圣

始 叉

> 之 まで、

野

溫

新

大

池

〇 霧島山 大平

推 0 to 凝 火 n す Ш 型 3 0 定 6 展 b 會 It. 場 截 0 頂 觀 富 方言 1: 式 à 0 0 夷 守 IIII 岳 2 飢 0 盃 展が 題合 à 5 切 8 瞰 頭 圓 す 錐 最狀 好の 抽煎 點國 緑 しが てある 3 Vi 霧 離島 國山 は 0) 11-頂に 上天 圣 催

高 點 韓 E 或 " 大 ----角 時 激 池 w 7)-0 池 石 M + 2 標 ウ 分 14 F. 40 分二 造 韓 12 2 或 -1 は 周 ウ = 尙 3 L 0 頂 角 5 72 4 譯 ウ 點 0 1 7 壁 圣 110 石 辭 F. 標 à 力 L 30 3 7 から 311 あ 士二 6 る カ 0 = 時 重 東 カ 大 ッ 木 南 阴 浪 Æ は ġ. ょ 池 IJ RF 2 サ h 0 外 ウ 17 降 崩 侧 を降 5 Ł 元 出 × Tex 0 ŀ 72 壁上 72 ラ ば 1 かい これ 老 h 7 ? 東 0 7 有 17 位を 子 巡 樣 It 1) 認 加 龍 的 僅 同 72 か 0 怒 --ば 17 b 分 力 1 壁 W 6 X 3 上 10 1. 0) ij 觸 れ最

3 6 追 VI 0 3 30 12 V 案內 111 天 12 T 外 昨 內 降 左 る 侧 方言 0 0) 学 者 完 3 右 72 は 縫 72 松 3 ·t V F 月 Ci ps. 0) SL Ti (1) 100 遺 道 6 72 込 老 3 3 噴 噴 7 受 族 流 17 けた 12 從 22 此 火 想 九 n 火 1.7 彼 贈 來 處 0 15 T (1) 小 H 1 3 荒 EE. 初 は 73 南 VC (7) 0 涓 辨 57 20 5 n 逢 3 江 3 0 當 何となり とで 所 男 失 U 淌 " 57 VC 逢 と合 叉 で、 20 12 8 110 5 東京 t L ッ 1 此 迷 る 1 (な 1 まだ ば 妻 0 111 勿 > ジ 死 L カ 體 逐 0 的 72 # L + 72 Ti かり な 40 72 は 人 地 方 讨 6 S 小 17 は、 片 數 理 ~ V を巡 來 威 霧島 のし 0 年 27 デ 5 C が向 落 前 T 爲 は Ľ 3 3 精 JII 1/4 3 + 为 5 8 積 來 洋 る。 VI 高 K 通 浦 0 T 2 in L 6 3 千 無 X 水 7 5 + 3 石 慘 72 6 ブ 穂 0 源 n あ 墨 案內 = 23: 0 3 0 Ш なる 料 爲 死 猿 2 = 0 10 72 8 0 ユ 23 登 0) 河道 年 5 10 0 T 賃 汨 0 1 h Bij 5 慘 げ 號 だ 72 (iXi 4 次 8 力: 8 72 高 は Do 0 何 死 祭尾 무 5 0 時 千 勿 水 L CK 氣 穗 3 論 容 揚 た。 老 共 我 圓 6 湯 0 n 大 等 毒 共 夫 Ph 17 T 湿 波 のか 崖 金 5 洋 登 池 分 み 0 並 は 65 上 る。 2 0 U) 餘 取 側 Ŧi. 人 大 0 命 池 2 Vİ 72 渗 瀝 -1-3 12 男 歲 出 11 程 僅 3 池 0 15 33 前 IIV 10 3 Vi 多 水 0 カン この 涓 70 な 換 步 额 3 行 2 あ 清 好 72 は 0 不 百 らう。 72 74 弔 幸 水 10 から Z + + 尉 10 233 仲 多 为 九金

Ď;

自炊制

を取るさうだ。

)霧島山

3 老 で あ 母と小見への土産にするとて、 子は鬼角弱いといふから、 à 3 るから、米の祝は大丈夫の積りだ」などと物語つた。予が辨當の蒲鉾や卵焼など分けて遣つたら、 などと笑つたり。自分は 强くなるやうに、 持ち歸つたなど、 妻を娶つてから、 虎熊と名を付けた。 心優しい所があつた。 二十三 一年目 1,0 男を擧げ 母は今年八十六だが、 た 今六歳になるが 元氣尙盛ん

林 下る in 林 に從 區署の經營に屬する杉、 U モミ ツガ、 E ノキ、 檜の殖林は、 アカマ ッ 徐程立派な林相を呈してゐた。 ナラ、 シヒ、 カシなどの混淆樹が能 < 成育し、 小

n ゼミの 聲が 類りに聞 えたっ ムシとい つてゐる。

館、 新湯 硫黄谷温泉に に下り 明禁湯 は霧島館といる温泉旅館が 硫黄谷温泉を經 土人はマッ て、 である。 午後二時三十分榮之尾館 各數棟 の客室を有 するが 12 歸 着 した。 夏季 12 明礬湯には は敷 百 ٨ 0) 高 浴客 干 穗

の樋で、 72 あっ 時刻 祭之尾 T 前 は 方に 館 早 眼界開 前 文許の上から落ち込み、 v ので、 知 事 板狀節理を呈した熔岩を深く け、 0 別壯 別棟になつてゐる湯瀧に飛び込み、 丘陵起 2 v 2 伏の 彼方 風雅 泉量餘程豐富 には、 な茅葺の 庭兒島灣 抉つた中 家 も見 では 津川 文 为 あ 展 汗を流 72 3 開 0 かい 3 橋を渡り 5 れる。 Ļ 0 郊外散歩を試み プラ 設 備 西南の丘 は、 ~ コや お 粗 E テ に出 72 = 末 -6 ス =7 ると、 あ 湯流 1 つた は十 ŀ 小平 数個 till

酒を製することを松方老から聞 も住味 id 我 鄉 で 水 地 ソ に見る日 本山 110 サ 0 N 밂 名物であることも関 ナ 種 2 と同 4 じい ~ v. 72 丰 イチ 叉だる 7 1/ 12 ミッ など夥 ナラの榾木 ح 0) L 邊 1/ に多 キ 12 イチ V t 椎茸 J° 7 0 " を栽 果實 ッ ジ 过 培 にア す 3 大形 N 75 = 1 0) 葉 3 in 2 ٤ JIII 1 紅 キ 0 亦 2 16 1

n

より

\$ 山

褔

發祥

0

地

として、

精

神

的

17

自然敬虔

0

<

チ

70 付近

12

35

0

念が 涌 0 付 别 問 題とし 共 展望 0) 别:

便を得 なら V2 0 12 3 麗 點に 15 加 於て、 2 3 IC, 雷 科 17 九州 學 研 究上 第 の榮冠を占 17 於 て、 將 む 72 るばかり 到 る處、 各 でなく、 性 溫 泉 質 0 豐 17 本 富 邦 な 第 3 涌 流 出 の名山と謂 12 於て、 交 け 通 ね 0 ば 利

H 霧島 **黎野神宮**、 山 を 一探る日程とし 皇子原。 て、 交通、 趣 味、 景致の 點から、 左 0 如くするを良いと思ふ。

第二日、 狭野發、霧島東神社を經て、 高干穂墓に登り、 新燃を經て、 祭之尾溫泉宿

第 門田 國分に出る。

第三日。

然之尾發、

大浪池を經て、

韓國嶽に登り、

六觀音池を經て、

榮之尾歸着。

但 14 日の日程心略し、 第三日朝の出發を早むれば、 共日の午後三時、 **霧島温泉殻の自動車によつて、牧園驟に出ることが出來る。**

JU 皇祖 發祥の靈 加

高く 谷に、 L 縣為 沛 社 郡 間 ٤ 共 ح 祖 科 17 樹木繁生す いよ。 天岩戶神 西 發 南 祥 0 電機獨山に二上神 種々の説がある。 0 近 霊地とし 近代上記とい呼社がある。 出 其間 72 ては、 3 17 所 大日本地名傑書 天岩戸とい 社 3 北方説の論據・ 6 國は無 天浮橋といふ、 神代字 論 ム穴あ 日向 書 を摘記 所載 3 沛 ではあ 5 刻み 社 があ ٨ るが 此 奥行 た すると、 類學會雜誌 る石 邊 つて、 , 17 Ħ. 問、 る此 唯 横 其局 穴 彦火瓊々杵尊を Ŧi. あ 處 によれ ケ瀬 幅十間程 IC 6 面 殿す。 川の 頗 VC 於て、 ば、一岩戸村 る大なり F. あ 此社 5 流 祭っ 國の 西臼 此 0 處より 2 0 てゐる。 北 裏なる川 1杵郡三 溪頭 方 态 白菜 る Í. 10 杵+ 東 酮 郡 0) 田井を中 町 北岩戶 向 あ ふ崖 6 下 南 流 は較 川の 磐戶 力 に、 諸

字三 10

田

升、

Щ

押方を合して、

は

南

方說

0 向

るが

E

本紀

に「皇孫乃離天磐座、且排分天八重雲、稜威之道別道別

、大日本地名鮮書によれば「襲山、今霧島

今高千穂村とい

つてね

る。

Щ

17

同 而

ľ

天

へ降於日向襲之高で ・古人相傳へて天孫

臨

0)

所

は 濛 火 日の J: 好 CL なく は、 A, 立 Ш 紀 劉であ りしが 國線 狀とな な 12 人類發生 奈落の火氣を噴騰するとは、 派に添孝 天降の段に「韓國に向ひ、笠沙の御前。高千穂峯と韓國嶽とであらねばならね る。 る。 字 は 者 以前 大浪 韓國嶽 挙づゝ殘れる 日 おうし Ш < 襲 池 に屋 重 の挙が 太古は東嶽 て一は太 にも 之 す X 别 るといふから、 也 3 なれ 楽あ るの 古の火口今は滿々と水 高字 は りて、 に矛 是亦好對照で は 者 神代 丁度高 添の 高 火氣布峯相立 神 に二上と云 代 **峯とも二上** 千穂峯 10 あらねばなられ。 所謂二上峯を霧島山とすれば、 と 並 を湛へて、 に添峯御鉢 ひしも、今の東西の峯なること疑なし」とある。 峯とも云 CX あ しが 3 , 地 其一 U 一大火口湖と變じ、 理 (火氣布峯) 地質學者の言によれ けん。 祭 考 方の添ひ立てる火氣 12 されば 今霧島 があるのと、 矛峯と火氣布峯 太古は峯二ッづく 0 東 ば、 は今尚ほ殷 14 布崩れ 御鉢 如 何 卽 の戦 17 T 5 K

新井白 共 此 h 霧島 川 本居 地 古事 沙 なるべし。 ぞ甚だ吉き地と詔 御 石 14 宣 記 崎 H VC 長氏 2 3 選り坐し は今の加 同 0) 說 古 路次を以 を述 事 て、 記 加世田で、空國とは、述べてゐるのに對し 傅 U て思 3 き」とある ic て其 ^ 神 ば、 代に高 Щ **空國とは韓國** を降 降りて、空國を行去て、 初めに先づ降り着き賜 i Ŧ 穗 橋春 半 嶽 とある 障 であらうといは を H 真 は、 は、二所 來 通 其著北京 て、 5 、 笠沙御崎 て、 同 名 窓瑣 n 朝 にて、臼杵 3 日 談 0 には 臼杵郡なる高 に於て、大に之を反駁してゐる。 直 刺 到 郡 或 h な るも、 坐しなるべ 夕 日 7 0 叉霧 穂 日 14 照 し」とある。 12 島 る て 川 或 35 共 共 3 1 45 n

推すべ 6 は、 日州都 鹿兒鳥神社となすを以て穩當とす」といつてゐる。 田 東伍 城 一說霧島 氏 VC は、 共 大 110 日 傳說 とい 本 地 to 名解 0 書、 叉鹿兒島神社とも云よ。 地 勢を以て之を比較する 高 千穂宮: 址 の段に 「今詳ならず。 叉日州高原高 に、人生生業 襲山 智保神 に便利多き方こそと想はる の下なるべきことは、 社 あ b 彼 3 とも云

〇霧島山

なら

〇霧島 Ш 大平

代宮 座も 1 Ш 0 腹 猎 3 居の 餘程多か 111 1. 3 in 小 御地 核 17 說 局 h 豆 0 6 さし 部 7 つたとい 如 居 12 何 しては、 盤居 溫泉 0 ic 拘 ふから、 大浪 35 0) 6 5 iHi 如 せら 何に 池 出 霧島 す n 觀 3 も遊だ古き地 III る筈は 香 0) 所 HI 獲物 池 池 F. ic -1-VI 3 無 は E 豐富 な V 地 高である 3, な 3 域 5 りと 3 廣 知 豁 想は 5 此 候、 6 點 歷望 32 幾百 か 叉 る。 海 5 以 雄 一十の鳴や 7 大 12 V 然し B 驱 ば、 快なる 近 逍 雄 6 遙 いから、魚介にされい 本 以 居 温 宏 7. 翁 浴 返 精 0 1/2 に資すべく 神 まし 所 を養 DE. ると云 かか 8 六 寧ろ 不 我皇 足 一種當 は U. Ш 궲 な 中 H は、 告 珂 F 時 12 j 必古は は

憶 30 からず惱まさ なすので、 ねば 成 子 6 ながら之を略し され、 は 延 岡 西 まで十三 V2 ध्य 九 E n 蘇 州 杵 Щ 72 Щ 郡 一般れが、 たので から 里 盃 (1) 中、一 0 北 間 方 あつ it 5 17 異彩 まだ去ら 17 雄 72 目下 此 視 8 Ш す 發揮 後榮之尾温泉で逢 自 12 3 動車 82 剂] [ii] ム豫定 のと、 L 日: が運轉 Щ 而 阿蘇山 70 _^ かい あ 3 -6 L 0 2 Ti. てゐるとのことで、 つた宮崎縣警察部長清水氏にから本山を經て延岡に出る n 72 八 25 ps: 米 由 · 融 冷 布了發 岳 古 祥 かの 生 6 靈 層 倚災遺 久/地 * 住まない 世 V 他 17 17. T の談 交 歪 则饮 VC 12 起 思 迦 3 3 0 12 雨 -12-0 i 不 0 72 天 Ξ 32 備 (1) H 0 石 Vi 泥 T 老 英 井 道 虚. 0) 斑 背 30 岩 0 H 3 井 遺 15 4

廊 神 宮

は、 刻 祭之 Hi Ŧi. 月 0 約 尾 出 期 验 溫 17 T 時 迎 泉 臭れ 刻 t H は、 寸 5 た 午前 0 約 橋 丁祭の五尾 t -6 6 此 時 下八湯 Ŀ 朝 + 悠 時 方三 カ 午 K 17 後 郊 FIJ (ii) 外 の處 3 時 玄 散 = VI 步 Ilie 津 非 0 111 [JL] 常 0) な急峻 福 錦 巴 -6 YI. 際 湾上の あ カン る。 5 15 (ので、 祭之 應 眺賜を縦に 兒 尾 とても 品 館 繚 收園 延轉 乘車券 入浴 すべ せで を濟 1 TU 周 3 田 まし 旋 7% 12 間 T 釆 F

> 111 6 動

時自

111

年生で巡ふとい 好 に乘 8 程 0 た。 なく路 L 72 程 つた學校はこれであった。 左 好 12 5 班 降 高 は T 6 予 穗 勾 から 荷 小學校を見た。 配の廣道であり、 物を 荷 0 て、 兄の重 榮之尾館主の 自 左手に 動 車 秋さんは、 0 は谷 發點 まで を瞰下し 男正 見 今鹿兒島中學の二年生であると、 男君 送 0 から 前 T 面 鬼 昨日浴場 いは n 概 72 丸 展 子 開 で は す 4 結 3 前 ので、 (1 -1-な 時 6 發 正男君 0) 持が 今四 自 到

It.

17. 11.

つた

叉槭 更 如 0 10 何 多 付近は 歩を進め 3 17 いことは、 的殺 あるから、 櫻の天登りを希望するの 稍 風景を想 て、 平 日本一といはれ 地 霧島溫 を有 春花秋葉の期節には、正に一大公園 像 するが、 する丘上で、 泉 付 沂 廣 T 0 かっ ある。 5 ねる。 v 長い 施兒島種 大浪池や觀音池方面まで及ぼしたいと思つた。 H 明治四十二 域 E, に互り、 所があ 年までは、牧場であつたこうだ。 の觀があらう。予はこの國花的櫻の植栽に對し、 澤山 る。 これは國立で、 の標が植ゑられ、旣に隨分成育して居り 面積七百餘町 種馬所とい 所謂天降りでは 步、 種 へは、

霧島溫克 時 M 十分收園 泉 東北四 驛 ic 11 着 V 72 瞬前の案内標

馬車約三 一時間、 山頂東 自 動車 約 五十分

高

彩島温泉マデ馬車、

自

動

車ノ

叉自 1動車の 賃金表に

霧島溫泉 Ŀ リー側五十銭、 下リー関

北 尾 此 沿 題浸、殿湯、殿湯、 温泉到る處 安樂などが著はれてゐる。 に湧き出 で 别 HI 殊 付 VC 鹽 近 2 BE 湯 共 VZ, は 約 九 州 M 0 步 一大溫 (1) 間 泉郷と称すべく、 三十餘ヶ所浦き出て、 中に

〇線

島山

大平

慧

に宮

内八幡宮の稱

作あるの

は、

後世に至つて、

八幡神を配し祭

つたからだといはれる。

E

宮

殿

12

神武

)霧岛山 大平

征 伐 **氣公の遺** の功 を了 跡 といはれ へ、此の付近で祝宴を張 分 0) 甚 ri 3 3 v 0 7 名 高 り舞踊を以て歌興を添へさせ給ひし處だと傳へられる。 叉宿る 窪/ 田多 0) 溪流 に架 H た祝 橋と V ふの かい あ 3 日 本 武算熊

0 あ 時 五十分牧園發の汽車に乗 6 十二時二十七分國分驛に下車した。 庭兒島神宮に参拜する爲め

る。 應兒 沿島神宮 驛前案內標 74 北十三町 12

和

氣清

麻呂

公遺跡

東北三

甚だ低 前 康 0 和 あつた。 屋 旅 館 販 賣 の饅頭十錢分を買入れ、

滿珠の寶物を藏すと傳へられる。古より大隅正八幡宮と呼び、本州 後 時、 官 幣大 社 鹿兒島神宮に参拜 した。 彦火々出見尊を祭 り、尊が海 一の宮である。 神から得させられた干 宮内 10 あるので、

後神宮境内で、

畫食代用とし

たが、

品

質

佳

良

價

つた、 鳥居までの 皇の御創 ある。 ことであるか 赤女魚 間 化粧 建で、 の故事 當 所 Vi, 5 今の 狭さまで店を出 に傚 彦火 其盛 正宮は、 0 大なり かの 々出見算が だとい 和銅元年の建立なりと記され、 Ļ しことが察せられる。 は 海 種々の 12 宮にて、 S 品を賣り販ぐ 豐玉 姫命と婚 每年三月十 中に、 晋時 姻 木製の 0 式を傳 日の は神領凡二千五百餘町歩に及 鯛と、 祭日には、 化粧 木 鯛 は 筥とを出 一の鳥居から 尊の釣針 すの が舊 h 72 0

[4] 麗な朱塗 第門 石 の宮 通 鳥 殿 居の がい 70 额 は櫻並 も濃かな老杉 敵艦 木 降伏」と題 かか るが を裾どれる松丘を背景とするので、其色彩が し、「日露戦 高 3 はまだ一丈前後であつた。 役 記 念、 海軍大將東郷平八郎謹書」と 境内には 特 老樟幹徑七八 刻 47 鮮 h で カュ あ 咏 る。 3

h



(岡田喜一氏説影)

ネモトシャクナギ

〇九重火山桑の黒 岳 竹內

登 稲 付 調 H

期

欝 T 大

22

L 尺 位 v 成 0 木で 3 0 ある 七 八 株 竹 柏羊 0 幹 徑 尺 餘 高 さ二丈以上のも の敷株あつたのは、 暖 地 のことうて、

はれ 境地は高 3 みに あるの で、 庭兒島 灣上櫻島 Щ 0 佳 景 は、 近 < 目 睫 0 間 50 迫 5 天 與 0 庭 池 庭 山 カュ 5 思

0 掛 け聲 門 通 も勇ま b 0 傍 しく、 12 設 女子は高 備 住 良 な 宮內 飛 運 動 小 を練習 學 校 沙 30 L T る。 る た。 男子 は 裸 體 で 屋 外 體 操 をな 高 學 年 生 は 劍

K 着 いた。 時 十三分國 (大正十五年三月十日稿) 分後の 汽車 に乗 6 車 窓か 5 は、 始終批 杷 0 黄果 累 K たるを眺 め、 四 時 分庭見 島

重 火 山 彙 0

内

竹

亮

查會報告九一 であ し難 居 着 311 72 T 族 つて、 7 いと云 3 火 私の 密 極 H 林 3 0 號。 從 共 つった様 て明 北 40 來 0 蔽 方 知 登 竹 17. 快 17 な怪 內 37 路 座 6 な感じに 0 を占 得 如き未 黑岳 奇 H 72 な傳説 多 岳 8 なる山 滿 0 T だ開 八年三 は 居 5 湯 を職 72 3 駆せ 名も M 九 0) 一號)。 原 L 地 重火 られ を形 全く 竹竹 長 此 Щ 湯村 3 内、 の顔 2 成 彙 n L け がは古來 て居 Ш 111 10 其 叉 中 岳 因 0 0 るが は 大 h 七 部 3 天狗 7 七 里 年 附 情 分 から 0 난 H 25 獨 森林 稍明 號。 住 5 h 都 處 礼 黑 確 野 で 72 岳 42 村 3 3 乏 3 八 0 年三 缺 つて 3 0) L it 或 6 V 號)、今 あ 草 11; 0) け 叉 悩が 度山 る 愛 原 高 0 性 東端 中に 約 津 あ 猶 な 登 富 原 0 植 た。 入 Щ 12 物 [in] n 震災 者 あ 景 蘇野 黑 ば 極 0 觀 生還 豫 岳 的 T 8 防 全持

地

點

17

達す

るとと

3

出

死

3

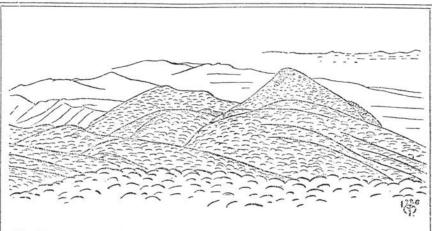
曲

である)。

蓬 6 T 登 黑 岳 3 岳 0 易 東 0 0) PLI 部 侧 1 納富 3 峠 3 約 de 九 災 0) Ti. 豫 防 竹 米 調 內 歪 27 報告 111 到 岳 'n 九 Ш 八 (1) 東 側 等で 號)、及 全 登 3 3 0 CK 65 都 72 0 野 村 岳 法 華 寺 院 かっ 溫 5 泉 大 t 船 6 大 黑 船 岳 Ш (1) 0) 裙 東 部 0) 谷

路を 路 私 (7 側 地 る 1 前 四 3 帶 プを直 共 線 私 は その 方の 攀ぢ 岳 0 0 1,5 は と大 t あ 本 日私は午前 5 細徑 谷 は 0 0 年 を下 て、 船 T 容易 Щ T 大 を南 23 六〇〇米內外の 樹 2 IE. 72 下には 前 十五. 17 0 八 に黑岳を上下することが出來 それ 法 とつ 間の + 時 车 時 華 に法華院温泉を出發 を下 頃黑 院 蘇 谷 て少しく 六月上 語音に酸 3 温 南北 泉の 岳 h 高度に達してから大船山北東側 きつてか 直下に達し の二系 旬 主人弘藏 行 は れた岩地が 37 JU 度 黑品 目 6 に分つ分水界附 氏 575 し大船山と平治岳 VC 右 て九 Ш 0 0) 深林 た。 言 頂部 磊 共 重 17 A 0 2 以下その 地 111 1 0) 1,2 薇 點 1/2 3 L PLI 入り 2 ば 部 7 近 过 n 0) 横 70 地 一峯約 當時 法華院 先づ大船 との な は あ の草原をからみて其 谷 h 0 によると約 其 た。 間の 17 0) 郭 溫 通 間 鞍部 Ŧî. 泉 -g-Ш 僅 との谷は 情及觀察事 2 治 る小 Ŧ. VC 滯在 平 17 に出 ○餘米を 二七〇 徑を 治 細 中六 徑 岳と 帶 項を 辿 0 0 更に 0 志 餘 月 0 通 17 黑 記 T 鞍部 ざし す 米 -1: 前 3 岳 大 述 日 前 續 10 T 0 高 記 9 出で、 出 黑 4 112 8 度 Щ 水 2 놂 5,1 0 玄 有 直 0 0 3 ス 登 5 Ш U 0

为 力 15 Щ な 側 間 な 1 は 容易 大 を 小 T 過することは フ 來 ic 0 樹下 岩地 時 5 30 7 VC 樹 70: を通 は E. 水 匍 IJ 過 出 匐 0 することが 口 ウ 種 して居る急烈 類 成 T ブ 0 樹 17 苦痛で F ~ 於 を通 = T 3 出 1. 下部 あつた。 過 來 面 で 1ª 72 3 2 6 などが 處 は 荽 2 約 獨 ブ 7 ナ = m 3: あ Ħ. 多 2, V (森 多 UC 0 72 な 登 林 v 米 治 に薇 0 0 17 T 登 殊 T 達すると地 來 行 10 る id 1 る in 40 從 と森 部 T 居 更 0 17 17 T 林 3 は 登 滅 0 形 3 7: 次 Di 15 4 3 第 17 に稍 F 從 ÷ P 10 疎 草 IJ 0 2 T 15 0 7 なり 生 益 ブ とな 4 bis R 且 る 多



岩上 た始末であった。 渗 V に立つて、 UC 利かな 洋 0 72 Ш 地 0 目 樹 ps ござす 0 高 北 かしその 承 为 15 頂上が十 難 向 體 L 72 7 ic 僅 高 居 かっ 數 1 5 くなつ 0 步 7 一時半樹 距 0 ナ 離 近 て歩きよくなつたけ 1 3 は 力 灌 7 下で盡食をとり 25 木の あることを F. 0 密林 老 樹が で通過 初 多 後附 8 n < T 知 近 展望 5

でなかつた。

立 の山 虚 てい もつて居るけれ Ш 部分はすべて灌木林 岩石が重疊したせまい頂をなし つて居 見えたことの印 の上 でその方面 辿りついた頂と云ふの ・云ふ程 米の 頂 形 部 部 震災豫防調查會報告第九 る峰 をし 標高 3 を僅 0 地 のこともな 點の 0) が平 形 かっ 0 北 に見る ど地 眺望は 0 を見ると、 東側 象が残 ПП 頂 記 地 點が の睾があり 入してある に蔽はれて居る。 17 tt ことが 全くさえぎられて居 淺 迹 つて居る位 僅 は黑岳の 5 か 南方に間 72 い谷狀をな ジ上端 出來 17 とれ等の峯の 奉が発 その北 Ŧi. 南面 頂部 72 號 近 \mp である。 5 帯の した 0 他 0 西に大船山 て前 方は 之 餘米 ピラ 爆 0) 西側に Ξ 値か 烈火 隨 るが平治 內側 に過 一方は ズッド それと相 との地 壁狀 記 3 " な草 口をなす ある一峯で 1. \mathcal{F}_{i} ぎな 12 0 मा 733 五六 狀 地 TI 點 成 地 岳 近 形が 並 0 な があ 45 1/2 米の 廣 伸 h 地 立 200 廣 拏 废 比 CX 70 0 間 らとり立 る以外 あ 眺望 V Ш 東 T 較 T 15 17 T Ш 私 地 的 方 Ŧī. 股 岳 地

7

y 5

往 h

復 な

出 D

來

3

け

私

0

經

驗

で

は

黑

岳

VI

爱

降

極

23

T

容

易

6

南

0

て、

法

華

院

温

を

根

據とす

m

ば

日

2

ュ

ッ

内

à 東 7 3 部 ネ 0 0) 峯 力 デ F 0) などが 成 0 IC 密 落 多 林 5 V 6 T かっ あ 居 5 る る 秋 樣 为 6 0) 17 紅 通 兒 葉 過 6 VI は n 素 容 72 躊 易 0 2 L 業 0 V 3 70 Ш な 0 處 3 12 3 ちが さら 周 草 VC v 0 な 見 峯 文 V 72 司 樣 10 丈 低 力 7 V 落 1. 9 葉 ~ 関 葉 -1. 樹 ウ 0 ダ 灌 木

火 K 遊 F 口 Ļ 原 h け VC 登 北 頂 נלל 6 12 6 小 徑 小 大 船 8 1 辿 Щ 0) h 四 分 侧 登 路 水 K 界を 廻 を 下 () 經 直 2 T ち T IJĨ 法 10 蓝 17 四 北 院 训 0 0) 温 泉 谷 念 斜 3 VC 歸 मि 间 成下 を 着 下 L 72 0 6 T 0 が 再 登 午 CK 6 後 大 rt 六 船 L 泉 時 Щ 25 頃 0 72 斜 6 地 あ 面 點 を I 方 登 6 6 ズ " 先 1 南 づ 段 0 谷 原 0 底

射 25 10 谷 元 來 出 0 來 著 黑 T \$ 岳 3 L は 70 小 V もの あ L < らうと 0 簡 注 から 意 な 單 思 3 < な 地 3 地 ^ す 形 狀 机站 火 極 ば Ш 山め 6 0 T あ 簡 0 10 づ 單 T n 0 Ш 0) あ 頂 方 3 15 カン 面 力 5 0 爆 6 (納 0 烈 B 富 火 3 口 * 震 L 災 罩 72 豫 3 to 困 防 數 調 難 個 な 查 0 < 會 峯 山報 办 頂告 あ 0 九 3 外 'n 部 號 17 Щ 逵 欢 侧 す 林 IC 3 力 は 放

花 髙 7 伞 次 0 42 あ 施 地 ナ 17 ゲ 黑 於 3 火 0 0) 力 4 III E 岳 + 如 出 3 0 0) Ini も常 森林 7 は 來 VI 水 2 Ш T 九 九 2 絲 事. 花 州 重 10 樹 0 戀 车 0 0 火 高問 小 Щ * Ш V から 量 除 彙 T な 火 地 す 2 觀 を 3 n カン Ш VC Jin. 通 殆 祭 は 0 は 見 んど落 72 納 カ 通 3 L L て見 72 重 關 富 17 0 ح 係 氏 見 203 水 6 關 6 葉 かっ VC Hi よ 0) 乳 RH 0 6 n 彙 3 0 森 3 111 3 葉 ح 樹 班 森 0 5 林 モ Ö 種 * 林 九 0) 3 P 0 記 發 重 3 0 は みで す 的 未 学 火 " ح L 0 Ti 33 Ш ガ゛ 形 彙 3: T あ かっ JL 成 落 L 0 VC 重 17 T す 九 自 火比 葉 0 生 3 闊 Ш 重 年 常 代 觉 T 葉 Ш 0 樹 彙 絲 黑 为 は 針 40 若 比 3 林 0 葉 0 岳 北 針 カン 樹 0 L 0) 東 種 森 葉 T VC 中 盜 部 3 樹 林 古 UC 混 期 種 8 Di VC L な 樹 12 0 生 近 C 玄 す 種 見 進 喧 L は 3 座 人 樹 0 h T 或 0 * 住 種 it 居 者 居 愿 占 は 3 Ш 0 0 8 附 25 " る 侵 8 3 T 出 沂 7 見 入 0) H. 居 來 2 0 る る 帶

〇九重火山彙の黒岳 竹内

が林思

次に黑岳の森林の高度に應ずる推移を見ると次の表の樣である。期に達して居ないものの樣に見える。

時

〇、〇七四	0,0回回	〇〇三六	0,01 =	0.0111	林内の光度
等の密林 学の密林 クリウツギ、ック シャプウツギ、ック ナカマド、ヤシヤ ナカマド、ヤシヤ アシャクタギ	多し ※ 木林の下部 ボ・ノリウッギ、 リヤウブ、ヤシヤ ブシ、コミネカへ ア・ベニドウダ シ・サハフタギ等	然木林も漸く灌木 林に移りはじむ。 林に移りはじむ。 オーニネカへデ、ナナカマド、アオダ モ、ベニドウダン、ック シャプウッギ、サ シャプウッギ、サ	上 同	高 木 の 密 林 で ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	班一の製景林森
約一五二〇米	約一四五〇米	約一四〇〇米	約一三五〇米	約一二七〇米	標高

光度を示す數字は寫真摄影用のウイン寫度計により其感光紙が淡色の標準色より淡色の標準色に變化する時間を秒にて計 る数字の遊数であつてその値の大小は森林内の光線の量の多少を示す。

度差 的 の狀態を見るとヤシ ではこの邊の山地 この はれる。換言すれば下 y に見ることが出來る。 表で見ると高さに從つて森 ウ (約二五〇米)に於ては ツギ サ 1 フ 0 7 + 高 7 地 ブ 部の森林 2 或 これは上部 0) 0 度外 灌 は 如きは、 木 ナ 兘 林 林 0 1 狀 の特徴 の變 L 力 す の森林 態 得 でに は るとすると、 化 1 3 漸 力; (全部 老木のみ 次上 出 では未だ他 て來る。 四〇〇 一の方 では であ 米內外 に及 Ŀ 次 の樹 0 標高 V つて、 んで 方 種 程 か はまさにその後機樹として盛んに繁茂 0 ら可 行 增加 0 森 侵入 林 多くは枯死 く餘地が 0 成 17 鬱閉 0 よる紫外 ハッキリし 餘地 あ が疎 から に頻して居るものが多 るのである。又上部の森 12 あることを示すも 線の増加が なつて居 て居 て、 その ると との とも數 程 邊 めと 度 か 0

字

Ŀ

高

沙 Ŀ

更

12 事

明かにされたら今少

ĺ 0

面

白

·V

結 30

論 つて

4

逹

L

得られ

る事 久住

を期

待

L

T 火

居 Ш

3 方

П П

旅の

1

1 景觀

から

度

(一九二六・六・下

稿

IJ.

0)

柄

は

現狀を主として

憶測

0

股

Ш

Щ

湯

坪

面

に於ける

植

物

はそ 論 T 居 れ等 リウ る。 3: " 大 先 34 船 g. III 優 0) 2% 東 L フ 側 初 17 O 斜 8 + م る 面 ナ ことも多 0 3 ナ カ É 7 原 1. 17 など 最 初 多 1/2 侵 可 成 入 森 す 林 3 樹 形 成 種 0 けは 先驅者で + 3 + ブ あつて、 3 0 あ 3 狀態 ことが見る 0) 如 何 6 17 n j 3 勿

は III 0 好機會 地 が岩 E つは il T 比較的 を 花 3 石 與 全 地 云 禮 7 容易 た様 るととが 草 火 Ш 原 IC K 17 10 密 接 1 九 林 重 0 L 様に 7 0 T 火 居 形 Ш 平 彙 成 樣 3 を見 な地 17 開 中 被 係 0 か 黑 表 3 覆 5 42 3 岳 より多か 乳 至 60 る 植 0 72 0 物 IC もの 美 0 17 0 移動 72 不 -持-と考 0 利 な 3 17 密 6 便利 へら らうと云 あ 林 33 0 72 形 和 7 あ 成 3 72 ふ様 3 つた 3 n 且. 叉岩 な關 ととで 57 5 係 石 など、 30 地 VI 65 Z 間 0 0 it 樹 最 3 木 れど今 3 種 大 子 事 ع な 0 發 組 0 原 芽 天

 \coprod 吉

武

5 H を供 Jil 溪谷 有 に牛奥と萩原 様となった。 13 す 5 數 0 车 は Bij 11: との境界問 否 最 3 数 近 ととを得 1-になって、 在 前 題 Do つる溶着 5 15 V この 次 徐 第 L K 谷 て以 であ 10 國岸 伐 來 られ (1) 森 然 て居 林を VI 3 た。 益 UC 々猛 1-近 车 Z ケ 烈 年 25 M 計 江 IC 至 なっ 盘 0 人 T 會 0 皆伐する案が、 は 村 0 JII 2 à 0 源 3 か 程 以 5川 度が 上、 腹 Ш 益 2 梨 0) 10 À 激 掛 村 111 け 民 T 10 修 な

武田

に伐木するもので、 盡され、 E にそれ 全部で三十萬 が質行 され てか 石とかに見積られ ら本 年 付 ケ 年 た木材を、 自 であるとい 年々拂下げて、 3 ح n は 幾 普 HT 通 步 0 施 ンかを 業 、案以 次 外 か 10 更 5

あ L 僅 谷と大菩薩 0 ると 々十 暴擧を默視するに忍びず、 て開發し、 私はその慘害(森林にとつて)の へと伐つて行くのである。 いふ意 Ħ. 为 二十萬の 連嶺主部との價値 日 味 本に類例 0 为 金 0 35 0) 爲め 0 な 七月五日附を以 にこれを破壊 い施設をなした方が小にしては山 單に山林とし 港し いことを耳にはして居たが、 i 去るよりは、 てどなく て山梨縣内務部宛に 風景、 その 梨縣の爲め、 眞價を發揮 植物學、 忠言を發し 近頃それを目睹す 史的 せし 大にしては國 方 た。 8 面 IC その て、 旦 9 るに 內 容 0 山 及ん は、 家 から述べ、 の爲 林 公園 でい 日 0 溪

क, 私は喜 こん 3 て忠告し るとも られ に對 體我が 私には な 元 な L おせつかいが、 で暑 たの 何とも 小 T V 故か 1 何 であ de 等 さを冒 何等の怨恨が 或 何 0 0 挨拶 る。 カン i 御 R 役所は は L の挨拶も にその暴狀を刻 て甲府 が 知 御役人樣 世間 な 6 な 30 そういふ慣習でもあるのか、私の書面を受取つたとも、 に存在することが衆知の事質となったのである。私は山梨縣廳やその のは、 迄 3 江 5 Ď: 四十有餘の い内 方が若し卑説 のではないから、 現代 ふるの餘儀 に(今以て梨子の磔である)、拙書の大要は同地の新聞に掲載され かっ 7 の紳士的 る ŀ 文書を新 2 に耳を藉されて、私に協議されんとする意向であるなら、 ならに ネルをくざるを敢てしたかも知れない。 態度では斷然ないと思ふ。私は寧ろ進んで卑說を發 いきなりその失政を公に指摘せずに、 聞 至 記者に示して、 つた のである その公表を快諾 一考の上返事をす 然し失政と認 先づ文書を以 (?) され 作ら 山

U なか 私 はまた、 らんことを希 廳 に書 望 L 面を送ると共 た。 聞く 處に に、 計 甲斐 Щ 岳 同 會 會 の幹部 力 6 山 林 にも出狀して、會とし 課 に陳 ふ情 され たが 課 ても當局 長 在と に忠言 בל 0 理 曲

不 得 要領 17 終 0 72 0 てとで あ

岳 るの から受けた恵み 會則第二條 ار 御苦勞に 12 10 4 111 對 東 岳 i 京くんだりから、 0 ても、 保護 を目的とすると定 個人として平然として居られなかったからで 甲 州 0 めら 团 0 世 話 叉斯 を焼かずとも 界の 重 鎮 0 * ことで 顧 問 とされ ある。 あ るが る甲斐・ 私が 山 . 岳會 今 日 迄 0 山あ

永遠に失はれんとする日川谷を救へ

111

梨日 諸

R

新聞

5

紙上に掲載すること

5 間

以て縣民諸氏に

微衷を

愬

へたのである。今左にそれを

に問ひ度いと考へて、

忙しい中を急遽一文を草

君の

御批評を願ふことにする。

て私は卑考を私自身の手によって世

大菩薩公園 の計畫を提唱す

里人 げて居っ むで居 0) 足音で る初 3 72 で ことがある。 夏 のある は あ ない る。 かっ フト 日 上、笛吹川を下つて來ての歸るさ、惠林寺を上、笛吹川を下つて來ての歸るさ、惠林寺を 惠林寺を訪 心を時 虔なる態度で、 うて、 折かき観 あの 廣 す 信玄公の墳塋 it, い境内 寺 內 を過 に默 小 でぎ行 华 禮 時 を

FI 機 象 Щ 公 心の 12 對 奥に す 3 毀譽 烙け 懐かしき國 愛貶 ずに は、 居 られ 主として、 よう 史家に委せて置 かっ 欣慕する甲 < 州 私 A 0 VI 唯、 心 圣 州 思 民 ふ時、 信玄公の一 が崇敬 し得 3 0 國主、 厚 V 人 英雄 情美 深雄と 假

L

ての

みでなく、

L 然美

17

あ

ح

がれて、

甲

斐

0

片

田

合を放

す

3

時、

賤が

伏

屋

UC

\$

軸

を掛

けて、

古英

捧

佇

過 去 JII VZ 於 T 中 でも 流 有 田 野 する 村 甲州 0 角 人は、 精神的 主從盡く滅亡した勝賴公の精神的に幸だと思はざるを を得 悲壯な最後は如何。 孩 Vo 敵として且 0 恐 1 且.

(23) 0 〇日川溪谷の濫伐と保護運動

武

H

知 號 甲 6 敬 12 82 者 72 拙 は 家 木 文 时 展 ٨ 3: 村 は 弘 揭 10 景 4 あ 南 T 3 3 德 あ 要 院 天 目 3 を V 起 Ш 栖 0 勝 3 v 賴 雲寺 L T 0 83 兒 終 加 は 之 5 焉 n 永 由 VC 度 0 緒 代 5 古 0 S 茶 T < 叉 湯 は 証 料 田 大 を 家 3 IF. 十二 ^ خ 寄 0) 年六 緣 進 故 L 月 甚 72 發 だ 7 行 深 は 0 な V 25 V 學 力 藝 は 叉 第 甲 H 刀口 州 野 + X ょ 卷 士 h 第 3 J. Ŧī. L る T

野 庫 裡 0 停 3 は Hi 寒 VC 場 風 2 12 V) 0 吹 8 甲 8 附 州 荒 近 隨 10 む かい VC 0 委 史 > 3 蹟 + 甲 名 72 所 州 3 景 0 人 德 あ 17 愛 院 3 2 鄉 P 0) 栖 雲寺 3 精 神 ^ 指 8 0) 6 現 示 P 狀 L 否 57 果 37 g. L 札 圣 T 3 Zis 如 な ^ 何 疑 3 v は 殊 L UC 8 栖 雲 る 寺 0 6 0 Vit 如 3 な は v かっ 堂宇 又 初 傾 旌

がの 合 沂 木 流 0 日 流 す 景 嵯 JII 峨 3 0 0 木 所 如 贼 谷 4 12 は JII 2 泉 は 遡 か 木 0 脉 手 32 1 栖 T 3 VI III 前 位 寺 史 + 踮 0 丁 0 程 林 開 33 小 3 陰 志 to 0) 福 業 所 3 V 溪谷 12 5 油 0 架 所 み 禪 ح L 15 師 0 72 溪 な 0 L 木 T 流 選 v は 公 橋 VI 素 22 田 蓝 麵淵 私 57 野 3 1 江 出 出 甞 天 大淵 目 色 T で + 0 2 3 景 境 鍵 n 懸 5 12 蚴 0 蛛 小 0 V _ 淵 な 猿 險 ^ よう。 橋 0 3 UC 深 龍 0 至 名 門 潭 3 8 0 手 聖 與 湛 瀑 前 から 見 72 木 とと 叉 5 贼 無名 n JII 2 办 3 あ 0 燒 3 VI Ш あ 日 JII JII る 0

な は 流 黃 E 金 0 H JII T JII 湿 T 0 御 左 居 111 源 72 林 右 續 流 3 3 Ш カ VI 5 0 0 0) 名 數 0 大 國 あ מֹמֶ 多 0 る あ 0 壁 東 支 8 0 鎖 流 控 72 کے を合 8 8 1 0 稱 せ、焼 四 す 15 8 け 部 Щ 私 大菩 には JII 200 力: H 薩 萩原 合流 嶽 JII 尾 0) 村 L 根 西 してから 0 0 面 入 通 會 稱 姬 地 H 8 0 方言 JII 與. 湯 あ 0 0 6 稱 72 澤 があ 連 10 甲 領 發 斐 30 0) L 威 志 この 支 東 一時 脈 17 H 付 代 为 III 10 あ F 書 は 流 町 0 2 連 步 Щ 0 嶺 不 林 間 0 知 は 主

2

昔

南部

H 箝 子 JII 0 0 源 天 林 嶮 流 Ш à 17 治 鐵 72 h 路 (1) から 間 VI を滴 唯 通 鳥 蹴 h 裏 落 0 街 被 0 道 3 3 所 12 0 委 大菩 をよぎつ 世 薩 冬 越 て、 は は 獵 甲 夫 쳶 33 澤 州 裏 廊 峠 0 街 熊 夷 道 路 3 0) 逐 大 1,0 t 菩 U 0 薩 T 峠 或 代 UI は 加 5 通 U 民 n 治 72 T 明 居 水 治 楢 3 0 0 0 中 だ 枯 车 木 以 60 表 生 後 街 L 17 道 VÌ 72 は

嶽

VC 抑

6 大

更

VC 連

付 は

澤 30

Ш

6

Ш

*

て、 0

子 0

峠 あ

坂

塊 は

VC

な UC

6

F 南

尺 走

VC L

L

苦

薩

Ш

VC

す

る

Ш

脈

0 7

て、

北 Ш

雁

起

5

主

峰

IT

連

日 至

す

る

0

大 南

Ш

分 田 屬

5 野

T

と國

0

その

風

IC,

習

慣 出 T

17 入

117 T 大

力 北

交通

史上 庭

忘却する

2-5

出

來 亚 州 かっ 地

な

V 3

3

0

0 6 部

あ あ 內 經 派

る。 る。

殊

12

明

治

0

中 する

年

頃

まで、物々交換の

行はれた遺跡

逕

あ

6

L

人 脈 黄

文 け 金 秩

F.

重 甲

な *

Ш

脈

それ 中と 雜

*

横

斷 つと 御

大

菩

薩 來 連 峠

峠

は

海 俗

拔實

に六千尺、

甲 な 南

世 * 冤 85 る 力 至 は 入 會村 11C 薪 炭 0 材 料 を 供 給 3 3 位 وُور 2 0 唯 _ 0 價 值 となってしま 0 72 0

遅れ など、 も見 る カン 年 明 日 當 來 治 JII 里 げ 叉 出 四日 6 0 v ち 谷 2 は + 0 な す 車 平 年 は 1 V 位 老 輪 易 3 日 0) 御 JII ٤ 水 な 车 KC 6 伐 害 谷 期 料 舐 峠 VC 筋 を越 b 林 的 着 0 後 溪 3 W) 6 Ħ 5 谷 2 御 n V L 日 なせれ n 役 T 1 JII 0 72 程 あ 3 前 0 J: X 樣 斯 平 流 0 3 は 美 5 附 方 T 恐 0 居 御 は、 迄 近 5 L à 3 0 は VC る。 料 V 河 下 左 瀧 行 理 林 嘘と思 流 右 学 < 0 0 * 文 T 當 得 は 兩 [1] 岸 澤 v 見 然 72 給 滅 間 と驚嘆する は Ш UL 在 多 4 h 梨 40 所 介在 0 3 17 なる密林 0 縣 峠 人寰の 0 3 ح Vi. する 道 6 50 6 0 T 近 品 左 天 は あらう。 一域を情 苔蕊 右 目 2 < Ш L 財 IC 及 カン 3 L T 源 叉恩 SS 6 た岩 E 3 L 8 気も 3 本 阸 JIJ 得 0 賜 流 峨 F. 3 石 な 鰡 為 で 林 流 0 轉 東 を は 0 地 23 皆 岸 な 伐 經 0 1/2 石 等 伐 T 森 2 6 V 俗 H VI 始 事. 林 0 藥 素 JII 8 業 稱 は Ш 沿 麵 57 VC 瓊 林 12 淵 III 5 L 71 0 步 近 27 0 伐 0 77 如 [NA]

間 17 手 Vt 失 女 は 神 す は 技 規 n 3 模 稱 17. 局 h F 木と 慥 す は す 3 果 VC 3 本 L V 小 3 0 過 3 T は E 言 + vo な 木 0 露 ijc 盤 な L 5 は かっ 力 3 V 彈 L 拂 Ŀ 8 景 去 F 月 素 げ 1 は 廿 徒 \$ 麵 0 刻 6 否 八 やと。 H 即 K 下 鮮 大 素 17 か な 麵 X 札 3 VC 0) 3 小 圣 瀧 行 5 0 0 0 0 8 72 秋 み 题 品 2" 33 け、 3 佳 域 け 綠 け vo 0 0 帶 あ 0 木 影を は 幾 0 Ŧ 滿 あ る 玻 0 Щ 現 錦 里 璃 金を 織と 0 V 如 そ ら清 齎 織 なす 0 L 素 72 流 絕 8 12 是 淵 0 N Di 72 は 0 永 稍 す 遠

p:u - 得

大

B 11] 淡谷の濫伐と保護運 格 指 n D.

> 0 な

2

武田

谐 n を 0 藝 旅 Va ٨ る 0 は 囚 決 11 0 跡 T 意 0 義 如 なさことでは 3 假 令 新 継 0 3 郎 学 0) 傳 V. 說 VI 取 る 12 足らずとす るるい 現 代 及 CK 未 來 0 國 民 is 4

n 色 る 一を賞翫する 17 私 與 773 も未だ足跡普しとは稱 初 引か 8 T n 大菩 12 は 外遊 薩 同 峠 を越 その他の 所に登ること数次なるを要するのであ L し難 72 事情 0 は、 で京 殊に支脈を探るには中々の日子を要するし、 去 が地を離 3 明 治 n 卅 な 九 期 年, 間 0 惷 を別としては、 -6 30 る。 0 た Ďî, 殆ど年 その 頃 毎 かっ 12 四 6 その 李 3 に應じて變る 0 Щ 部に 彙 0 足 非 * 凡 景 入 な

中 3 0 級 2 の山 刊行 團 以 12 F 彙が る霧之 0 L Ш 探 以 峰 勝地 旅 溪流 T との 會 2 0 110 如き 連 底 L 一領を 知 T は、 品指 n 世 82 與趣 本春 17 0) 紹 所 介 その機關 を發見し得 たるを認 するの 勞を 雜 3 誌 る人々 るのは、 致 12 L て居 大菩薩連 は、 質に私 近來 る。 のみで 嶺 2 號 0 地 方 Vi なる三百数十ペ 17 な 少 V か 在京 6 82 憧 0) Щ 1 憬 岳 デ を 0 威 家 特 Ľ 中、 T 輯 殊 Z VC

學上 葉樹 て驚 の上 F るも 菩 के に於 林 て大菩薩 ので、 嘆 カ 氣 薩 400 0 すべ と言 連續 限 6 0 H 麗は 8 毒 3 0) から 至 落 價 Z 連續 な 森 B よう。 0 殊 林 値を有 薬 0 て低 美が 美學 ので 樹 17 に限 0 VJ. 林 H 夫等 あ な JII 深 するもの の素養なき人と雖も、 6 v 40 もので らう。 vo 注 遠 な 谷 高大 は、 0 V 目 する 森林 我 であ その特 然し あ 253 本邦 0 美を研 る。 國 C あ 3 は元 あ 0 るが爲め 概 らう。 飜 風 長 究する 一景の 來 そしてその 0 K 0 てその 樹 0 雜 種 根 L K, 少くも自然美を追 あ 木 VC か 底 富 3 L は 的 利 却 美 樹 と貶さ 0 要素は、 用 T け 0 0 この 約六 てと 形 殊 方 居 れを口 落葉 千尺 面 n る。 に樹 葉 形 を稽 て、 實に其森 內外 殊 求 種 樹 ふる 僅 K 林 10 す VC 色 富 落 し鮭 る程 彩 ic な (1) 3 地 U 17 薪 葉 林美である。 0 雜 炭 樹 ds 10 10 0 地 於 者 方 多 質 材 0 0) L なら、 10 な 位 種 程 か 得 17 於て 3 3 VC 類 る針葉樹 江 けえ L 本 種 0 C 著 多 譯 針 多 邦 無 かっ 樣 葉 風 6 言 利 0 景美 ことは 眞 樹 0 0 用 あ 0 價を 林 中 林 あ 3 3 n 0 0 17 T 世 認 了 壯 す 2 25 却價 屈

0

日

JII

100

とな * 針 落葉 年 T とし する つて して 0) 叉 JII 樹 秋 2 谷 る 林 0 T 3 12 る 0 木 初 0) 足 美と、 0 8 0 T 陸 あ 圣 は カン T あ 0 12 入 5 幸 6 世 る。その 生ずる草 乳 來 傳 0 溪流 力 72 た杉と檜 御 Щ 不 Y 幸 料 地を訪うて、 一々を學ぐるは餘りに繁に堪 か 瀑布 本 林 を 0 若 或 沙 僅 の美とを兼備 L 植 少 る 森 30 0 付 林 金 こうに 4 0 樹 6 ds 12 木 n 代 17 た。 へる 8 L 本 た小 邦 無 幣 それ 限 12 を 事業 於 0 品 興 趣 办: 域 H 震災の 味と價 る稀 VC, 72 ないから今は専門の域に立入らずに置かう。 が開 な 品で 5 か 値を 0 結果どうで 始 その され 丹澤山塊があ あつて、 發見 多 H L 種 是等は 75 腹 あらう?今、 UC 2 Ŀ その る。 V 3 は 甲 17 ず、 頃か 州 私は去る明治三 際 0 < 事業 5 溪 70 あ として 中 نح 林 JE: 野 V は 局 品 す 域

は已 開 あらう 景勝開發係」を設 T 風景國是策の 一林をし に質行 居 カン 周 3 3 必ず Щ 殊に 勝 0 は、 林 地 7 L や質 居 T 日 35 VC る! 富 絕 居 JII 何 失 町 谷 置 る 72 は 行 \$P 3 0) n 知 0 3 3 3 幸 72 財 n 如 n 礼 6 Щ 現在 4 3 源 た 3 ず、 林 福 今日 そ、 ぞ 期 8 Щ これ 史蹟 何 梨 15 0) 一縣と 2 於 あ 私 \$2 本 と名 て、 5 12 ick 32 は 年六 h 3 L 現 は か 膨 5 求 代 雜 甲 ととを 2 月 마 斐 8 木 0 得 叉 發 科 林 CK 0 そし 學 度 3 涿 行 0 或 價 C 年 8 山 0 VC 梨 應 T 岳 値 T H -天然 À 縣 太 用 低 JII 麓 Щ 陽 梨 0 L 5 谷 もの 為 75 力 紀 縣 や大菩薩連 らう。 增刊 念物 て、 3 VI を、 最 12 とが 懋 良 ナ 何 菩 白 嘆 + 0) 故 薩 然美 ケケ年 福 方法と言 Ξ VC 連 0 此 冷 当努 微主部 內外 揃 0 0 日 膠 0 未 本 12 力 に皆 地 だ へよう 3 あ 開 大 0 合 8 部 致 伐 0) 發 か? 理 3 参照せよ) * L 地 分背 的 n 着 T 3 3 利 目 日 用 Ш 價值 3 0 n 面 V 2 P 縣 影 あ V2 開 T 3 0 3 0 残 で

か

17

復

す

3

2

n

\$

地

10

よつて

宜 後

1

からう。

しか

し、何とそれ

为

原

始

的 植 曲

な 付 來

ガ

法 3

で

あることよ!

然し

勝

開

發

12

いは

先

づ

現

皆

伐

を中

す

30

事

は

林

家

0

好

時

Sig 在

0 0

金。

は

自 11:

12 る

放

置

す

3

か

又

は

有 伐

用

樹 業

を

17 Щ

2

T to

幾 所

年 0

0 南

ず

Щ 5

岳 る

0)

為 から

談判に 何

0 12

8 0

應ず

等

顧

虚

所

は

2

n

v

私

0)

微衷

は

2

0

本 III きで 邦 林 林 12 0 於て、 あ 改 12 良 る。 於 は、 T 何 最 天然と ぞ 多 獨 研 逸 究 合 流 2 理 積 舊 的 式 人 だ Ш 《爲と相 林 國 學 有 0 林 糟 俟 UC つて初 粕を嘗 於 T は、探 むる めて遂行出來るもので、 伐と天然更 0 要あ りや。 新とを着 日 本 は須らく 々とし 國土と樹種とを全く異にする て各 H 本 地 流 に實行 山 林 學 を 7 樹 居る

らば、 初 を表 は鬱蒼た 8 L 3 6 ic かっ 難 公案愚見 る線 15 vo 富嶽 見 大菩薩 事 然 蔭 为 40 活 な 北 秋 若 連 カン v 10 で 奥 は 嶺 L もな 秩 749 T 0 步進 風 利 父 Щ 錦 用 V \$ 景 か; す 八 織 h F. 3 ケ 0 開 る か 夫 嶽 6-A: 國 發 は 家 利 圣 6 今尚 2 百 用 づそ 脾 冬に 0 年 發表す 意ない 0 0 は領上 n 下 計 を立立 から 10 しとするも、 先決問 3 す 一から甲 0 る大 て、 機 では 展 題 あ 心望 To 駿 0 あ 8 地 美 信 日 そ、 6 るせ 0) JII L 境 ね 谷 V 落葉樹 は 縣比 S 17 0 なら 連 皆 焦 0 H 伐 な 眉 利 す 林 41 S 0 漏 3 業 念 南 0) 春 ic 7 は 爲 は 付 r 寶 10 n 新 私 開 緣 玉 プ VI 發 圣 ス 0 15 せ 0) 美 座 L h 雄 芥 15 分 2 姿 中 17 な 夏

大正十五年 七月十三日一十七日。山 | 梨日々新聞 | 所

て筆を る覺悟 3 な 短 17 S 執 文で 盡 0 3 又それ 餘 L は霊 あるから、 暇を 得 3 3 事. 持合せ 3 n を 共 な UZ, 御遠慮なく御申 V. 私 な 權 K v 言 欣幸と 利 N 御 足 验 質問 得 5 等 な して居る。 越 \$ 0 V 御 簡所、 政黨 * 意見があ 願 者 23 釋明を要する點等甚 度 流 n 0 v 0 ば 疚 私 L は 時 v 點も 私 問 0 0 許 確 な 信 す だ多さに上 限 を公言 6 俯 仰 どん する 天 地 3 な際語 上 10 沙 恥ぢ 12

雜

紅葉の 金城山

大

晟

から \$ 我 0 K 會津 333 鄉 國 阿 超後 賀川 道 17 溪谷と八字 沿 17 うたの 於 て、 简°從 峠來 ٤ 诊 紅 近くは磐越 薬美を あ る。 前者 以 て著 は 0 往 開 n 洏

眞 を探り、測らずも弦に其紅葉美の偉觀麗觀 に嘆賞に述へぬのであった。

狀視察の機を以て、

目下掘進約

、金城山に登り、憲其三分一に達する、

清津川

の峡谷

に接し、

清水隧道現

3

VC

子

は

巴

東

洋

第

0

隧

道

哩

金城が Ш

南魚沼

郡

0

略

中

程

に位

日

町

我越 約三 0 かっ h 日 であ 5 冏 魚 南 時 野 を根據地として、 川を隔 10 3 半で共頂上 里强で、 於け Zis 3 紫内者雇入の 7 上公、田*近 著名の に達する 村大 東南 禪 往復 神刹雲洞庵が、八の關係と、こ 字 子雲洞が 一日行 ことが出 T 程とするもよ あ ある る。 來るから、 3 且つ雲洞 る。 そこか ので、 六日 17 は 6 町

耕雲寺 應 老 長 永 4 大 棟と 藤 H な 0 十七年上杉憲實殿堂を修理し、 原房前公、先妣の冥福の爲に草創したりと。 水 號す、後上杉家代々の菩提寺となる。 僧 地 名除書によれば、「會津新風土記 窓を請 時此 ムて開山とす、 Щ に隠遁 是れ曹 永享元 雲洞 云、 施 洞 主 禪 年 高 0

短距離

を選 6

h

だ縣 里の

0)

開整後

略

其

中

問

に位

地

近 道 町 Ha

10

在

3

0

で、雨

郡

吏員

や

有 20

カ

沙

春

VC

觀 距

秋には紅葉狩を共

同

開

ことが

中 藤、

行

24.

0

一となってから、

K

的

宣

傳の光榮を荷つたのである。

ある十日町と六日

とを連絡

する変通とし

て、 在

最

内や、

仙

戲 勝

道

0)

紅葉

地案內 5

かっ

らも、

宣傳

によって

0

利

便が

à

II.

一つ戯道

省

0

旅

遇を受け

後者

は 局

魚沼

南魚沼

0

郡 術所

地 0 行

6 殊 築

13.

同

施

12

請うて宿泊

L

た。

(267)

雜 鈴 0 紅葉の金城山と清津峽

盖上 T 此 守定 憲實 賜 IF. VC 寺 あ T は + を藤 滿 杉房 る。 る。 曹 四 自 洞 年、 0 原 墓 號 H 禪 2 房前 雲洞 家 特 8 あ 憲實 9 0 h VC 0 佛 廊 先妣 とあ 0 長 刹 in 繼 棟 ٤ 書 嗣 云 b す VC 明 A 0 又 雕 を誤 創 ح 著者 應永 師 盔 V 立 0 Z なり。 綸 n 吉 寺 年 中 るの 田 領 旨 其 博 五. み Ŀ 墓 士 字佐 + 並 は 杉 石 あ ic と註 安房 美 3 は 俗 駿 衣 說 守 國 * ग्रा

いた

見

之。

12

世

天

は

Ŀ

杉

輝

虎

勝

代

0

歸

依

僧

10

T

天

況を 全く 登 111 0 今の 庬 L Fff 爲 無意 號 た。 鶴 記 め は す 味 見 の譯 予が 3 金 住 總 0 城 職 持 特 山 は で 寺 もな 三雲洞 に當 管長 敢て 新 応 井 So 廊 新 無 」と称 石 に請ふて宿泊 井 用 從て當庵の縁起 龍 石 のことでも 師 禪 するから、金 師 で は る。 L 當 72 無からう 庵 や 城 0 Di は 111 6 狀 整 晋

V

般 かい 72 南 40 大 子 魚 日 け 沼 ウ 本 地 部 2 誌 1 名 月三十 を借 ウ 解 書 3 覽 10 すべ 濁 は 日 6 1 雲洞ウンドウ ずに (大正 六 呼 2 + h H 濁 TL 町 0 0 年) 小 る T 學 3 南 午後 n 校 10 四 立 答

> 描 10 同 は 欎 < 校 金字 游 * 金 た 城 辭 10 3 Ш し T 老 * 仰 杉 前 海 3 0 面 北禪 裡 稍 0 17 左 2 林 手 朱途 Ŧi. VC 門 時 雲洞 5 柱 0 樓 21 H 門 庬 天 33 VC 空 認 到 あ VC 金字 着 3 可 僧 L 堂 72 形 額 面 圣

と書 つて、 或 庫ク禪 裏の 卷大乘密山書 沈 標札 面 J: 洗 h 足 口 为 0 とある。 17 椽先 供 L 17 本 T 过 あ 堂 3 正 館 面 0 0 引 額 v 72 は 水 槽 洞 25 あ

終出 廣 浴 1 i 子 入 た。 亂 て清 け 二階 n す ぬ有 3 潔 浴 便 場 0 0 様は、 所 ö 客室 3 便 用 3 所 殿 VC 其修養 物 導 多 殊 に数 カン 0 = n 位 2 0 置 + 7 程 33 IJ 具 F 0 1 速 家內 窥 常 F 30 K n 6 敕 敷き を受け h T 奥 然と 逹 WD 33 L てス か T 始

牛蒡、 現 仕 L 豆 など 腐汁 やが L 72 若 あ 0 里芋 T 外 食膳 0 V 許 坊 T 0 煮付 0 3 力 初 修 h 餘 平 運 道 程 ば 0 8 21 僧 語 結 盛 は n 5 75 る 構 油 か 居 所 0 あ 其 無論 る ic カ: 八他奈 つた。 t 椎 n 茸 精 食事 ば 良漬 進 僧 料 南 當 衣 や世 17 理 瓜 H 8 庬 0 皆 藍 着 5 K は、 長 T 0 麥 る 給 浸

ic

は

八

墨

敷

0

室

3

開

放

L

T

提

供

30

n

室

交

趣

3

越

す

る

雜

밂 0 YD 爲 V 17 0 83 2 列 0 12 44 あ Ļ 簡 特 0 素 72 10 至 如 極 1 Ŀ 0 け 8 0 3 料 0) 粥 理 だ IC 7 5 煮 n V 57. 3 57 若 かっ < 0 ば は 5 清 感 唯 物 子 鯋 0) UC

20

とと 乳 Ŧī. 日 此 72 間 給 で 籠 仕 予が 城 0) L 坊 明 3 72 當時 治 'n は TU 1 0 华、 物 鳥 iii. 海 40 Щ 海 id 下 111 吹え 上暴 颇 る感與を催 の遊だと 風 雨に 逢 v CI 3 1

57 隨 为 火 好 意 鉩 殊 17 V 0) 歴が 就 茶 肥 道 燈 新 23 具 多 6 供 他 31 Ĺ す 3 V V) など、 T 室 あ 寢 具 3 12 0 用 けは 清 意 早 1 潔 XII 0 3 癡 あ 周 且 を 到 0 展 72 6 あ は

翌 日 けす + 月 日 0 あ 3

まだ VI 涼 0 3 統 170 V + Ŧī. 的 な 時 4 人 時 17 0 10 大 12 打 坊 護 鼓、 PL 3 經 5 目 鹼 h 覺 治 L 達が L 始まった。 坊 华 時 2 鐘 計· ん達 或は 0 板拿音 予 は 拜 ימ לע 早速起 跪 も其 ケ 席 所 き出 交互 或 17 VC 列 聞 は 巡 ic 文

聲

を

揃

T

0)

讀

經

8

聞

1

は

如

何

10

B

72

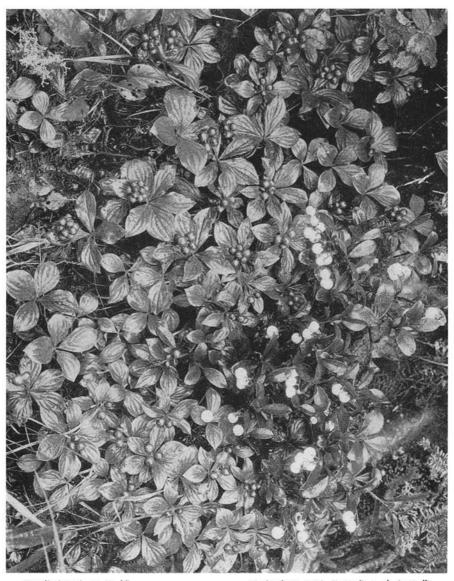
俗 界 0 7 72 解 脫 L 72 氣 持 力 す る 0 當 歷. 0 時 計 ば TE. 確 0

なと 72 之、 杉 讀 L 12 裏 經 て相 伍 为 枝 0 間 L ガ 総 は ると 12 茂 T 栗りり 檜 直 明 鼠へ 樹 5 3 0 Ŧī. 遊 葉 1 下 17 3 松 金 な 17 城 を見 ナ 0 七岁山 72 1 葉'足 る 力 0) 樹やに け で 7 1. 屬 旣 ルプす 境 內 毛+る VC 7 Щ D 櫸 F 3 散 地 モ 等 慶 0 30 6 步 景 を

老

72 うと 于 葉 開 0 700 於 T 6 25 hi. III 後と は 想 非 眼 行 訓 桂 南 常 つて 師 10 2 0) ٨ 3 門 若 0 40 H 72 0 芽が 來 资 杖 始 为 6 目 111 色 72 指 ٤ 力 3 15 I. 生 共 淡 な 着 T 0 亦 映じ 大 着 紅 だ 3 (黄 3: 12 木 0 褐 桂 葉 色 II/E 72 72 0) 0 73 72: を それ 老 日 0 0 斯 0 3 70 72 呈 3 7 0 < 木 まで -所 は 冷 あ L 0 は 全 力: 高 -72 無 坊 鮮 堂 數 発 目 < 公 洞 MI 3 カン 門 孫 h を 1 6 HE h 2 侧 3 樹でで H 31 桂 あ 0 72 語 -0 Ti あ 3 1 桂 途 は あ 3 共 5 は à は 2 知 6 rh 贵

3 うで 此 H あ は 海 墨 遠望 70 け は à 寧ろ良好 3 pis 1 殆 と降 0 あ 3 雨 0 0 6 心 配 昨 \$ 夜 無 依



シラタマノキとゴセンタテバナ

武田久吉氏撮影

録 ○紅葉の金城山と清津

:维

年生 を出 蕸 T L 2 發 金 T L 置 城 ふ當 72 Ш V 57 27 施 坊 登 1,0 3 南 3 ん達六人 寄 木 宿 良 L T 3 ねる 前 V 及 3 + 學 CX 若 時 生 六 V 三人 B -+-男を案 分 町 多 中 學 同 洞 0) 行 歷

徑 陸 72 測 冷 庵 それ Ŧi. を 出 萬 -分 2 右 8 圖 折 る に、 L 程 + 町 許 谷に も記 沿 入 3 山 12 道 72 17 0 線 77 Ш

た る 8 見 3 ブ 時 ラなど、 案 2 ラ 0 四 安 72 は デ 内 Ŧi. 者 山 7 岩壁 尺 は + 2 紅 0 V 葉 高 40 あ 0 ヤ 57 せ 歷 0 Ξ ガ 一
支
許 72 ラ る 0 3 中 た チ 大 崖 2 T 瀧 著 崖 側 7 其 F. 5 即 1C L 實 は 5 50 5 V 濃 は 3 ダ 工 %s B を 力 1 7 黄葉 油 路 王 + から デ 2 右 VC 採 3 呈 15 似 礼 7 サ 見 3 ウ 72 す 7

ブ

E

完

35 10 徑 横 約 此 處 贈ぶた -1-力。 澤がは 10 6 之 尺 0 de * 7 路 圣 見 發 る あ Vi 送 す る る 所 密 漸 0 3 時 次急 72 VC 石 で 登 力: 此 を 1 着 加 緩 0 H 同 倾 V 警 72 斜 八 は 3 鹽 時 F. 偶 な 澤 VC E + 驛 踞 越 T Ti. かっ 線 6 分 汽 越 脚 II 傍 長

> 湯二 方 遠 5 n 元 カュ 學人 分 WQ 12 力: 脚 開 は 驛 UC を続 圆 想 VI 道 2 人 第 殆 像 は 8 ど飲 るま 里 潤 8 n 73 巴 L 0 57 用 0 哩 T > Sp 達が 0 み 70 Ħi. 20 72 國 車 分 水 な溪流 为 嶺 -(1) 0 7 あ 鐵 無 如 F 何 0 道 3 0 v 3 = 72 25 3 40 T. 悠 宿 事. \$ ふの る。 米 異 3 为言 竣 0 距 0 此 生 視 3 成 る木 處 線 L 圣 かり T 放 ż 行 ら上 知 0 2

竹 + は メ ナ かっ 沿 往 其 干 な 5 道 " 々霜っ質 以 15 y 7: かい 3 力 Ŀ など見 HE: 7 0 0 た。 造がは 盛 などに デ は 13 を見 つ栽 正 となり、 イタ た。 樹下 17 徑 た 孰 伍 0 培 + 叉サ を見 17 形 L L 力 之を 中 T は 3 た桑樹 殆ご辨 學 П IN 1 デ、 ナ 押 潮 4 1 滴 年 3 力 分 次 1 根 け \$ 10 生 10 D 君 72 = 登 難 曲 毛 終 I. E" る 竹 ジ 6 は イ は、 ッ を ユ 告げ 地 丰 n ジ ッ pi: 方 餘 ナ IJ り樂 稱 ラ = 呼 此

で川

とす は そこに 3 地 + 下 1 VC 胞 南 = 子と 2 3 稱 絲狀 す ふる 3 體 \$ 0 多 0 を生 は 0 -0 Ľ 其 あ 繁 3 殖 機 我 關 17 殖 3: O 作 0

食

用體

2

本

雜

であ 先き 3 3 延 年 長 る 科 3 用 为 生 崎 密 0 放 8 5 馬 CX 九 先生 け n 72 君 路 叢 時 だ 6 つた。 時 10 まで 等は 三十 登 狀 尾 梯拿生 * 5 17 12 0 T 傍の坊 目 17 カ B 左 0 0 根 子がれ 一それ 覺 手 右 急 分、 6 た學 IJ 72 6 3 15 0 坂 年本 と冷 習 で 0 手 坂 辨當 3 か 1 種 Ti 0 あ 0 つた あ キ 3 溪 0 VC 0 2 嶮 6 長 in 隨 て、 h 30 崎 力 前 程 谷 南 37 3 VC 15 中 が冷 惱 0 3 分美 h 取 相 t 3 鮮 カュ 3 0 カン ケ 力 學講座 達だな -为 左 談 里 6 0 す かっ カン n 6 出 P 3 かせ も右 à ある」と告白 デ 5 0 Ш L 0 L L つた 登 カ 72 n 匹 側 梯 V 1 T の受賣 数 紅 路 ば、實 7 食 子 22 多 た 1 KC 6 坂 葉 斷 」と復 瓦 金 此 VC 0 A 小 一合し 始 處 行 + t 期 0 か 0 石 崖 城 氣 0 笑を買 溪谷 は、 0 は な 力 72 佛 的 山 23 忘 6 冷かさ 紅 嶮 休 た。 n 二週 講 3 か な L は 为 J 節で たら を あ 岨 6 献 歸 切 演 葉 北 0 間 見 を 中 途 T 0 眼 2 口 0 的 30 根 な そら 遭 呈 曲 T 界 た 方に 前 美 快 かっ 1,0 72 朝 は る 3 大 6 竹 理 辯

> t 7 ナ 力 7 U ツ ウ ラ 毛 ラ n ジ ブ 0 2 黄葉 ナ T r 7 は、 チ サ ナ 1 ガ 1 雲 + ラ 力 洞 -0 1. 庵 r ホ VC , カ 於て、 2 + デ 1 などであ サ t 7 7 て見参に 110 力 ウ " ラ 31

入

0

T

驚を喫

したの

0

あるが、

黄葉とし

T

イ

D

紅 朱紅 矮 朱 ナ ブ h ナ 行をし は 3 + B ナ 縮 紅 調 目 ラ 槪 r 站 は t 甚だ t UC 0 色 力 葉 寸 丸 カヘデ UC 3 て屢 珠 3 鮮 ネ 至 は 72 を 2 17 t Y 果 呈 淡 は Y2 ナ か デ 力 7 7 は甚 步 ザ 光 * な黄 T 110 亦 色 1 す は ^ S 澤が 彩 3 る。 橙 デ 7 は 無 ウ 力 深紅の だ濃く、 更 留 色 ラ < 0 3 7 黄 紅 である、 葉と は F* 0 T は 3 殊 で + 17 しめ は あ 黄 为 ò 老 17 紅 V 奇數羽 此 なら 向 3 木 L 黄 ウ 3 感 始 た。 陽 力: 7 沙 珊 は T iv を深 的 は、 ya 瑚 0) 鮮 2 U 狀複 は 褐 岩 特に 西己 時 黄 モ 工 10 黄色を呈する 1 繡 B 3 壁 VC ح ナ 力 葉に盛れる は淡 + 鮮 優 17 は な 0 織 1 3 あ 紅 る、 生 非 6 か デ 6 力 ので Ľ 常 な は らう。 成 ケ 子 t 壯 T VC 7 ŀ° あ R 秋 ウ 鮮 2 は 觀 は 72 甚 IJ カン サ 深 3

だ な

7

る

餘

UC

T

る

る

は

前

+

月

日

中

魚

沼

郡

VC

於

け

3

信

越

雷

幹

V2

金統 () 紅 業 W 金城山 津

雅

8

超

克

其

Щ

腹

3

北

叉

JII

0

21

Ł た

評

L

72

予

B

亦

同

感

0

南

3

情 達 仙 な 漸 6 は 3 化 趣 辭 次 ば 增 0 8 裼 L 深 11 3 去 色 地 栗 1 か 0 2 3 す 鼠 6 な な 一人木 な る ī UC h 7 5 所 言 3 0 8 る Y2 謂 N 晤 實 らう。 得 人 寒 褐 間 樹 林 ¥2 色 2 de F 蕭 落 UC ブ 此 條 着 移 5 果實 ナ 0 味 0 俗 h 界 T 光 0 から 質 3 * 景 あ 特 拾 採 脫 け は 3 集 L 0 滥 て、 其 T L Щ 味 味 地 T 棄 あ 0 超 Ш 33 食 0 3 鉄 色 人 72 悉 光

方 接 蕭 葉を 數 3 力 ح 會 條 予 4 0 町 枝がも 呈 <u>ک</u> 72 は 72 脫 步 社 忘 後 3 葉 す 折清亦 10 0) 景 3 峠 脆 0 n L 里 T. 年 瓦 得 を 致 事 あ 72 0 瞰 8 早 B を ブ 2 V2 た きを 高於視 72 FD 現 前 ナ F 3 象 す 0 L ラ 野/察 UC 認 小 純 ブ * る 力 川さし 降 得 ナ を 8 林 更 11 72 八 とき、 眺 72 雪 72 \$ 0 0 VC 0 純 芽 か 0 眸 8 0 吹 子 林 北 あ + 各其 米 魚 あ 數 中 3 は 0 から 甚 T 0 MJ 沼 111 津 72 だ 獨 步 側 IE. 郡 川 Щ 早 2 特 大 VC 0 VC VC 頸 鮮 沿 湯 n 0 v EI. 33 時 情 方 か 溫 力; 5 0 於 消 IC な 趣 T T 日 黄 轉 其 文 地 VC 遡

> から VC + る る 部 す

> > 2 澤力 望岳 83 0 ば Ш 側 眞 VC UC 其 嵡 特 欝 殊 ح な L 壯 T 觀 展 8 開 味 す 25 3 得 ブ ナ 3 0 0 6 大 あ 純

林荒

る

3 部 枯 h 0 樹 唯 0 燃 即丁 10 け で、 濃 樹 八 木 0 達 WD 75 17 葉 T. あ 0 箇 林 及 0 色 6 3 至 〈 2 多 峠 其 VI 紅 る 10 23 は 0 30 + 葉 數 單 如 0 色 寸 終 33 7 調 É 町 は 彩 部 恰 は 0 寸 3 3 3 0 紅 力 は 0 此 水 長 Vi 數 あ 更 淡 波 處 葉 地 0 美 勢 紋 數 ic あ 0 H る 如 E を遺 單 狀 上 前 其 12 圣 + 3 + 呈. 樹 比 町 調 或 0 多 稍 八 す 箇 憾 種 3 は 專 種 端 L VC ŀ 冤 32 峠 な ET. ح 倘 K 多 かっ チ す n n 幾 を ば 0 23: 0 樣 5 1 關 始 紅 3 5 3 3 分 成 0 + 係 葉 溪 0) L 紅 彼 0 8 は 綠 其 美 同 0 は 谷 IC 色 P 色 鹽 黄 を あ 漸 數 行 力 甚 等 觀 彩 3 8 緣 葉 夹 10 L 景 劣 存 0 * 中 振 T 72 坊 致 面 頭 は す 心

岩 力 10 飾 面 in 露 3 出 3 勝 P E 5 1 な ソ ツ 3 3 梯 I" ジ 子 坂 ナ 其 * 葉 1 33 B 力 ち 著 7 1. 登 VC < る 伍 紅 葉 T せ る 葉 7 朱 1

強 紅 3 城山

雄

雑

予 3 狂 味 紅 力 2 花 哭 * 办 稱 L 旣 モ 持 其 ٤ 圣 月 得 1,2 3 呼 多 0 3 産 遲 そ ウ 7: 0 + 上 地 ラ (5 多 72 7 V 理 à ナ 現ずるも 2 旬 0 V 科 生態を ゲの は、 U 17 先生から) 当 往 案內 高 F 屢 說 0 野 r 見参に 明 高 と見える。 潜 111 力 聞 Щ L 6 3 付 Æ v には、 認 易 知 72 1 入つ T 0 0 25 0 る には、 ح T 江 狂 72 たと語ったので、 白 0) 2 V 力 暌 花も黄花もあ + 狂 * 55 0 中學生 少から 突を 72 7 \$ ナ 予 23 見 * 見 は た ず與 之 Ni 72 は 3 地 车 時

服 るニ 梯 涉 功 3 3 多 優 子 0 此 坂 33 更 V 7 良 人 嶮 12 を 最 方: あ 0 0 1 開 登 3 3 B \$ v V 惱 0 9 坝 殊 0) 話 2 6 VC 12 0 信 3 我 あ 逢 8 越 4 織 72 32 主北 地 0 0 腹 んで 所 後 72 6 方 72 3 成 IC. 難 0 0 to す 關 箕 竹 け Ш 根 0 紅 高 曲 (1) 岳 0 72 甚だ 葉 長 VC 籠 竹 を伐 尺 (1) 0 は な 3 此 とな 美觀 許 旺 は 處 作 盛 根 0 採 まで 弘 石 VI, 0 曲 3 文 L 極 以 標 竹 材 1 T 登 前 3: 料 65 8 0) E 運 ると、 3 密 5 CK 後 0 3 版 降 護 (1) 0 す 3

Ш

稜

NC

专

左

右

0

溪谷

10

8

展

開

す

3

0)

思

0

3

3 0)

ps: F.

水

h 瀦 0

1,7 水 72

清

潔らしく

\$

な

E. ح

20

餘小

兎 3

4 は

部

15

から

あ

0

て、

御

殿*

清

水

50

異

觀

~

3

1-1 17 J 3 米 西 VC 行 を職 は VI 步 1 長 奎 尾 L 留 政 3 其 景 T 證 0 城 西 快 近 址 哉 * * 六 存 叫 B 9 À 3 HT 0 坂がで 0) 戶下 113 あ 街 山井つ 办 72 見 北 之

る 1 1 饱 70 優 远 實 秀 < T 高 デ 緩 0 72 ウ 程 V) ょ 大 0) Ш 料 望 モ 領 な 75 果質 形 6 斜 < 葡 行 大 0 UC 73 IJ ブ な 小 供 3 は ナ 兎 V) サ 0 蔔 深 形 慈 ウ 伸 稍 4 0) 喫 は など 紅 狀 果質 IE. CK 直 濕 0 V 7 を異 倘 72 ナ 0 徑 VC ず 氣 平 0 歸 且 熟 几 から ラ 薬 は 0 脉 地 5 0 は 下 ち 陰 VC 分 L 17 VC 草 17 此 携 T 华 ナ カン 0 17 採 口 \$ 帶 ば 較 山 VC 1 地 1 累 的集 は 霜 味 達 VC 葡 力 -6 0 L 大 て 適 72 K VC L す 萄 枯 7 粒 蔓 \$ 3 す F 72 0 0 力 ح 色を など 數 株 な 頂 夥 延 3 亦 る 上 L L 頗 UC 0 0 デ + , > た から 1 为 40 HI. 黑 3 V ことで 於 優 多 L す 2 步 0) 0 イ 讨 果 劣 T 72 3 N. 13 4 る 行 为 は 類 4 穗 H 其此慰 3 は 3 此 や丈 力

0

ブ 0

> 37. -

鳈 紅葉の金城山と清津峡

難

旣 15 3 Щ 葡 萄 3 0 無 仙 か 經 -) UC 飽 72 滿 L 72 行 のことうて、

II. 金城 Ш 0 頂 Ê IC 着 V 72

000 3 千 Ŧ. Œ. 雲洞 五百 M 高 字頭雲式 百 干一 今は上田村 九十八尺」 洞片 氏 尺强 より によれ 0 H 0 本 とあ ば、 に属する あるから、 里にして其頂上に達す、 14 嶽 一千三百六十七米突 る。右米突を換算すれば、 志 には、 大差がないのであ 別稱金 H 標高 三多あ

T

10 天工の 000 開 によ 頂 小 10 8 0 屋の岩窟に 功. V 成 上には 紹內 籠 岩窟 てあ 行 L 0 信飛 城 て、 力: 小 10 ő 10 出 は 目 スロ ので、 一般し 3 來 「金城山」 境上に聳える槍岳の は差支な 入口が二 比すれば、 る。 東に は腰を屈 い木堂が v 採光 + 向 安山岩の 一分され 坪 V 0 と刻 ある。 12 程 3 T 殊に一 2 3 て入 口を開 0 焚火 h 魔 T 露出 堂側 のは る程 おが る 方の る。 0 台 頂上に於 か: 一道かに 排 だが、 南 あ VC 3 煙 **猛內** る 胶 尺五 力 Ŀ VC か 立 優秀な 優 ける 稍高 弘 田 內部 は 1 第 7 等 都 弯 た巨 Ħ: 坊谷合 3 7 は

> 小學 す に、野上校長氏の 栞」と題し る威想文などがあつ 校 0 調 製 ic 小册子 かっ 緒言や、 1 3 72 を置 同 胯 校 寫 v. 兒 版 T 董 あ 刷 0) 0 0 該 72 金 Ш 瞥見 城 登 樊 登 すー 15 Ш 關 3 0

洞を存するので、 る 口 3 金城 碑によれば、 山と命名 雲洞 養老の 庬 Щ 背 0 上雲霧搖曳の 稱 藤 23 起 原 房前 つたの 13: だと 本 此 Ш 0 v 靈 登

h

これは 燦然 今や頂 であ 兎平に入つて、 0 た た。 これ る紅 上 一の岩頭 葉の は 2 美觀 W 立立 かり、 暫く に接し つて、 眺矚を缺 唯々讃嘆の 豁然 、花の吉野山ならぬる たる展望の v T 聲を放つのみ る た 雄 行 大

する、 目の は、 者 此處を通過すると、 天 狗 岩窟の傍に、 Ŀ 間、僅かに身を横たへて通行し得る所三間 頗る振つた名である。 0 押分岩とい 旗 二つの互岩がある、 數 尺に Ŧi. ム名は、 瓦 郎 男天シットウ 3 IF. 扇 宗押分岩と 平を呈す 前 高数文もある巨 方々 者は 女天上 (當字)と稱 10 る。 脏 3 v 立 2 3 約五丈、 \$ 0 3: 岩 此 あ の割 處 3 0

數

、左右は殆ど垂直線的

断崖をなすこと數

+ E

8 間

屏風

を

建て廻した様である、之を「百間

V

2

る。

此突端

の最高點に

立

左

ラ 丈、 とで

あ

3

办:

御嶽

Щ

0

笠

Щ

130

亦岩山

で

はな

5

西

南に

突出

L

た岩嶂は、

長さ数十間

ic

旦り、

雜

個

0

石

办

2

T

笠

H

な

2

ホ

"

30

P

7

"

1

3

3

ッ

110

ツ

1

3

~

が一 とあ で、 天 6 刻 あ h 3 海 海 Þ つた 山神 だ 学 Ш v 兀 石 0 頂 5 かっ 社 塔 3: た のそれを る岩 笠 成程 は あ とは、 と見 山 2 本 甚 72 場 Щ は、 だ 和 办言 で 思 0 最 此山 ば 無 奈 以出 八 近 良 木 v 會御嶽 頂 長 海 0 70 0 0 もの は Ξ 岩 尾 Щ T 笠 神 0 石 明 露 で 芳 世 Щ Ш 社 道者が 人熟 は 出 あ UZ 大 つた。コ と刻 も見 0 Æ. 狀 十四 知 美 寄 L 態 文 0) 1 年 3 だ 淮 力 2 S 六

> カマ 花 楽 谷 候 種 110 1. ナ 0 0 綠 美 33 1. ッ 觀 葉赤 1 ウ 30 ジ 13. 目を引 や 果 亦 1 想 " 0 シャクナギが W 6 1 いてる やら x 30 . " れる 3 T る。 7 力 P モ 隨 頂上岩嶂を縫 分多いから、 まで 美 うて、 1 初 ナ 紅

山がは、不然、 平智 方 17 多 5 0 で 銀

7

松と I. 地ラ會 呼 工 津 フ h Ŧi. で 葉 ツ る 松と は、 3 會津 v 0 て 地 方に多 Щ るが Ŧi. 葉 松、 v 我 0 鄉 叉 或 は 單 6 植 は VC 木 銀 屋

Щ

銀港連

期 雪 鳥 20 T 東 あ この 媒 0 頂 Ê 銀 3 南 0) 深 因緣 冠 天 21 を戴 空 谷 矮 其 に発 を彩 雄 0 縮 大 は L V えるもの 3 無 72 て、 なる脈絡 杉の 紅 く、道 崇嚴 葉 幾 0 0 者の奉獻的移植 大景を機 株 威 其 靈の感を與 かを見たが 実れ 山まて る峯 へる。 頭 九六〇 とは であらう。 には、 巍然とし 風 米

種 1 多 壁 × 樣 VC カゴ 4 0 色 彩 1 2 " 10 y 力 10 3 などの 3 3 17 イ J. >> ウ 鮮 工 綠 フ チ " 3 7 木 メ " ズ

200

3

あ

形

詞 0

は

境

1/2 8

用 20

N

眞

に適

なるを感

は、

式

形

嗣

0

は

とて

8 繡

滿

足

出

來

V2

黄

萬

於

3

Щ

は

此

卷機

Щ

一彙の

背景大觀

を得

葉 白

延

17 (2

段 け

價 本

値

老 此

高

錦

上更

に光彩を添

展

する てね

廣

V

溪谷を埋

盡

72 72

紅 h

葉

0

美

潮 方

紅門

葉

0

錦

とか

-

錦

織

6 8

成 33

> す L

とか

V

5

和

ば

なら

VZ

绿 0 紅 0) 金城山と清津峡

雜

落

着

味

は

あ

3

力;

5

1

0

中

5

な

多

種

多

樣

0

T

る

る

を

L

す

銀 は、 JII 6 線 世 8 を 北 右 界といふならば、 洋 引 17 手 \$ H なとし 轉 程 は ぜん なく 3 瞰 悉く是れ 1 T かっ 魚 す 北 野 其 錦 名 10 所謂 JII 紅 流 VC 35 0 葉である。 此 入 和 Ŀ 清 Щ は正 3 8 田 釐 見渡 鄉 0 清 11 水嶺か 0 0 沿 に錦世界の尊號 盆 あ 5 す 雪景を形容 30 限 地 T を貫 6 9 發 眸 纎 野 < 子 源 R B 魚 を す 72 を 野 西 3 丘 る 泰 JII \$ カュ 登"銀

唯 上 は N だ 曩 と評 さに 5 宜な in 梯子坂 3 け L 哉 5 な n で 行は、 あ はとばかり讃嘆するより外な の上でさへ る。 ・今頂上の美觀大觀に接 , 其 眺矚既に八箇 L 峠 V 以 0

偉 松 谷 遺 觀 慽 多 樹 VC VC 種 なが 之を述べ 見 は 配する紅 た 紅 は 5 紅 葉 葉 展 期 妙 た。 望 葉美 VC 0 高 ね 美 2 0 於 Щ 入は、 偉 ラ 觀 B H 阿 力 とを 中観が 賀 る 搩 得易からぬ景致 110 0 0 峽谷 た。 ない。 兼 八箇 ブナ ね は T 八 峠 妙高 で は 箇 も見 岩嶂、 あ あ 峠 た、 3 3 Щ 0 では 3 0 單 は、 調 阿 ある 展望 流 唯 は 賀 其 0 治 紅 0 青 前 峽 種

> 我 色 彩 越 後 0) 覇 鮮 Ŧ. 麗 0 味 ٤ らう。 方言 無 V 0 本 山 0 紅 葉美 は IE.

> > 17

忽ち 平 L VC な VC L 下り、 VI 1 治岩窟 T 各自 家苞とすべく 内 25 に入り、 あ 其 小 風 < 呂 る三 焚 敷 火 -1-VC 15 山 充 分 葡 暖 た を 萄 す 3 頂 取 程 採 上 6 8 0 集 Ü 辭 > L 專 飯

0 任 教 72 梯子 諭 坂 から 0 Ŀ 數 端に 名 降 0 學 0 72 生 * 時 率 六 る T 日 登 町 中 h 來 學 72 0 0 理 17 科 逢 擔 數

貫

タ

UC

達

L

た

兎 を

景致 ナ 飛 0 720 モ 沫 飛 午 翳 後 ジ * 瀑 時 2 根 浴 を見 ->}-+ 共 HT 曲 ウ、 な CK 五 4 步 竹 時 景 た。 7 VC 0 Ŧi. 致 其 亘 難を + + 不 分、 は 獨 路 果實をも る 110 避く 特 動 左 殆どブナの ウ 雲洞 0 瀧 2 0 洞 色 懸崖 2 ユ < 道と 澤 道 を 味 飾 IC, 0 0 8 0 6 大瀧 左手 長崎 放 T 純 72 5 3 林 高 崖 3 道 47 る 0 此 Ŀ 崖 長 2 其 壁 閃 丈 力 特 崎 0) VC 道 n 綠 殊 $\mathcal{F}_{\mathbf{i}}$ 岐 は ば デ 尺 * 點 0 な 塊 紅 取 1/2 イ は 0 ブ

B.

録 〇紅葉の金城山と清津峡

雜

壁 音 洞 屏 0 同 道 風 石 Ŧi. t 像 (1) + 6 か 如 分 安置 趣 < 味 十數間 30 7 傍 あ n に岩窟を見た 5 T 17 あ 亘るのがある。 る。 且 つ殆ど案内 附近 窟內 0) 溪側、 者の 約 五. 徑 必 安 間 路 ili は 岩 觀

歸 着 Ξ L 時三十分、 た。 月岡 0 部 落 VC 出 で JU 時 雲 洞 庵 1/2

V

湯 時 あ 湿 0 此 間 此 て、 ざ風呂や 日 許 夜 K 子は、下 厚 行く 17. 1 予に 意を 講 豫定で 演 本 B 夕飯まで用意 歷 無にする譯 Щ 0 72 後 あ 場 坊 直ちに鹽澤驛 0 おんん 0 な 111 33 達 17 岳 談 3: 3 して待つて居ら 寺では、 行 を請 既定の かず、 力。 は ら汽車 n 予が 辯 72 宿 論 0 泊 VC 會 為 L n 投 日 72 72 10 で 0 わ

副 本 歷 午後 0) 日 課 時より二 は、 午前 時 九 間時 より二 け 漢 學 時 17 間 關 rt す 宗 3 研 教 究 10

一、清水隧道と飯士山

業とな

つて

る

逵 72 日 車 時 洞 刻 歷 まで 1 辭 は 顕 る 時 餘 間 裕 許 力: 6 -0 あ 3 鹽 澤 VC

> 友 界を退 27: 大 脫 原 敬 L 古 君 たとて示さ 生数を 活員訪 四 3 + 72 n 年 の君 72 巴 は 顧四 + と年 題間 從 す る事 L

> > 其た

宿し て、 間、 汽 北 八 湯 T 力 澤 線 3 た。 毎 VC 車 る。 VC 1 0 引 よって、 it 終 越 2 日 後 ネ 數 返 點 松 で 坂 囘 湯 IV 0 運 澤 屋 時 湯元 內部 清水 5 轉 驛 五. は ï 17 + 隧道 松 P か 着 高 T = 6 分鹽 半坂 る V 建築用 72 屋 る。 旅 碎 0 人 石 館 2 高 機 特 口 3 など見 橋 土学列 澤 にエ VI 半左衛 榜汽車 驛 女 方 事. 为 は 33 學 主 0 + 約 電 任 目 力 F 時 請 H 及 夕 補 10 刻 0) 0% 走戏

浴場 を繞 槽 あ るとて 0 湯澤 改築 つて、 は 百 溫 度 著 泉 0 計 松 位 は は 畫 坂 6 n 中 屋 あ 單 7 0) 泉源 純 3 外、 あ 泉 る。 共 溫 KC = 度百 同 屬 軒 浴 L 0) 場 旅 + -古 度と 個 館 來 所 3: 1/3 あ 72 5.5 風 け 12 力: 特 劾 F 浴 25

飯至 飯 山沙日 士: 快 111 12 登-膈 6 -70 標 3 夕刻 高 3 0) 千百 73 松 坂 十二 屋 湯 澤 VC 歸 3 米 着 威 壓 上さた 1 田》 T 富 屹 立 士: 0) 稱 3

五六

た。 易 且. 曲 南 頭 立 あ 剪 か 0 竹 派 3 ら之 剛 な の密叢の 魚 Ti 頂 な感じ 緩 M-C H £ を仰 为 JII 0 12 な 17 景觀 爲 を與 (" 碩 加 3 17 ል! H 澤 趣 侧 0 味 惱なされ る 翠 線 は、 333 頭 立多 0 岩 橋 發 期 华 幛 打学 展 方 待を裏 3 腹 惡 振 驛 面 حے_ 以 K 6 かっ Ŀ とし 2 5 若 it 望 切る威じ 不 1 方 2 は 江 灌 湯 6 木 如 ずや ps: 何 澤 頗 潔 驛 L 根 3 IC 0

清

E,

1 は 3 所 淸 まだ 鉢草 津 信 前 芝川 四 水 K 越 四 尺 往 を見 年 五 17 峠 地 原学の 日 + 7 其 方 R 嶼 $\pm i$ 薄 峠 以 寸 0 72 大 遅れ咲きの花 谷を探るべ 曇なれ 四 其。 月 下 以 群 高 七二三米) 四 Ŀ Ŀ 落を 原 17 種質は既 旬 短 12 17 米 逵 見、 縮 Vt. 高さし す 甚 0 近 3 發 頂 72 だ 3 來 VC 山井の 育 E 多 於て、 午 越 あった。 0 33 力; Œ 17 前 後 V 叔 it 中 あ 0 盛 七 耶 成 だ 路傍 雅 魚 3 75 時 馬 熟し ゥ 致 B p: 沼 湯 + 溪 × を有 0 數 17 澤 郡 0 てあ 110 殊 15 3 は 即几 稱 0 チサウは す 2 發 12 VC あ 0 Ш つた 莖 我 瓦 L 3 頸 鄉國 8 0 6 57 子 高 旅 唐 0) とな

開 72 0 生 0 花 0 K 40 あ 接 72 1) 3 L 72 は な 0 は 雪 後 槪 0 叔 時 季とし : 位 T 0 珍らしく あ 0 T 威 其

Ľ 花 其

芝原 海 拔 峠 六 8 F 0 七 n 米 突と註 , 八* 澤共 3 3 === 俣泵 村 0 部

0

あ

る

b, \$ 俣 要 約 は 15 村 あ 沿 から 清 0 役場 5 彼 3 1 津 1/2 無 ح は 出 方: 70 0 3 とは 小 峽 都 逢 使 丁 出华一 谷 合 CI Ŧī. 萬 里 兼 溫 を探 L 徑 松坂 T 分 泉 路 俣 3 UC 郵 屋 圖 釣橋 釣 出 K 0) it 橋 要 便 主 10 3 まで 一點を 局 賴 によ 0 人 n で 集 0 2 案內 質 話 ば 配 0 1 問 人 徑 T 0 か 殆 左 樋 あ 路 6 L L E T 5 口 0 は 岸 清 吳 72 案 頗 0 叉 VC 津 n \$ 古 力: 移 內 る JII 緣 3 ح 者 嶮 h 0 5 偶 0 右 岨 V 必 で尚 是

4 0 當 通 T 地 E. 方 3 0 3 0 女子 會 逵 か 津 地 之を着 カ 猿 袴 0 所 を 用 使 謂 す 用 3 し、 モ 0 1 多 ~ サ 見 V 72 0 1 2 あ 2

途

V

0

72

+ とろ 時 嶺 八 五 木 / 澤を發 MI 發 許 源 L 清 所 謂 津 ス 米 JII 1 丰 0 0 生 右 藪 岸 3 0 木 中 IC を 出 VC 72 通 知 5 L 清 72 82 T 津 路 * 太川

は 進

雜

欽

雞

是) IC 淺 あ 3 を 作 3; 取 中 n 俣 魚 3 沼 0 を過 郡 宿 1/2 きて 出 然 信 清 今 濃 津 は 川峽極 VC 8 所 入 T 謂 る 小 の奥秀局 0 の部

吾 湍 其林 殆ど る は VI JII 心 力 見 處 兩 耳 磊 は 空をも 樹 3 樹 せ 0 地 ナラ、 デ 岸 其 40 3 K F 力 L たる轉 Ŀ 名 て、 は 洗 眞 12 10 0 步 7 17 デ 2 示 B. 3 8 世 所 7 E 0 ザ す 幹 ヅナラ、 石 生 運 謂 V2 Y 通 " 忌 3 0 老 П VC ~ ラな なり 激 ザ n 子 5 木 b 月 る。 0 冷 L 得 0 7 は 肥 密 多 どの雑木 力 T 水 ラ 花 Va 始 林今 白 ^ 沃 より さなが < は は 爽 デ、 3 な餘 雪 飽 感 0 枝 8 P 多 非 快 程 飛 相 地 女 IE. 梢 1 常 感 6 紅 がは ば 0 錦 相 茂 A VC 10 0 1/2 交錯 3 紅 7 あ 石 あ 鮮 打 0 6 L 力 清 葉 河 世 0 3 麗 72 て原 淙 界 のまし 加 (な n 関すて、 デ \$ A を カン 紅 72 廣 ブ 0 葉 训

岩

壁

僅

力

VC

手

303

か

6

足

办

か

6

8

求

8

+

數

間

F 大 す 口 な 楢 かっ 君 5 は 0 根 必 歸 元 途 す 12 採 部 は 立 2 寄 T 霜蕈 り下 置 v 0 て、 叢 V 生 御 ٤ 狸 8 應 所 切 0 A 材 17 17 料 見

0

0

あ

0

72

徑

路

17

於 n

數

個 夫

所 B

鳥 U

獸

を Vi

捕

ふる「

才

ス

夫

關

に當

萬

進 ic

能

す

V

て、 2 感 極 网 立 は 一致を U 斷 B 平 彼 匯於岸 0 等 为 崖 家 0 あ VI 寸 呈 の山 絕 T 洂 3 す 武兴鳥 3 壁 渦 次 殆と る。 幾 卷 人でや 0 泊 is + * 雉 な 6 6 人 潭 丈 6 0 行 50 問 中 h 羽 V2 ٤ 往 老 我 音 樹之 湛 叉 輩 は V A ふ敵 奔 鴨や 屢 力 湍 T 足 此 は 石 ž 小 静 音 却 を 多 鴨 L 碧 寂 VC 0 かい T 驚 知 潭 T な 嚙 6 遊 景 於 h V h 眞 な 0 T V2 かっ 致 3 近 樂 6 UC る 3 園 2 图 8 n 破 カン る 噴

33

0)

石

1

0

CK

四一 旦 上 あ 3 河 針 中 0 下 金 1/2 T 轉 仲 8 R 手 + 在 排 數 賴 す 人 6 3 6 0 巨岩· な 0 夜 1 P 營 横 地 此 行 岩 双 40 す 岸 適 壁 4 0 す UC 岩 る恰 所 好 から 壁 10 0 あ は 天 る 然 岩 徑 窟 は

岩 集 呈 E 飾 塊 0 3 熔 0 岩 T 京 0 T 2 1 35 る E あ 所 2 3 为 ジ A サ VC 多 大 < P 形 な は イ 村 随 狀 ~ 3 及 緻 CK 密 ケ 板 堅 1 サ 狀 硬 ウ 0 な 於 節 3 理 安往 之を 山々

46.

雞

設

葉

掛 1 3 VC 尺

0 壓

捕 獲

n

B

そう

0 È

> Ŀ 倉

る

0

を

見

た

ح 炭

は

湯

澤 煙

0 为

人 濛

達 17

为

從

事

る

Щ

0

麓

15

は、

燒

0

5

L

T

幾

條

2

る

物

高 亦 2 旬 擔 v \$ 木 何 す T 3 弧 办 任 澤 12 津 17 0 行 撤 僅 X 行 者 10 かっ 方言 板 出 6 15 2 巳 6 Ш 丽 な 之 小 逢 撤 力 け B か 0 るかか 積 de 出 8 回 如 0 0 な 事 避 後 雪 7 な 女 何 翌 4 年 37 は 老 け 0) 0 0 察 微 聞 通 被 t は 唯 2 T 0 通 米 害 月 甲 す 行 K W 72 ば 人 過 3 者 を 下 强 山 釣 橋 逕 0 は 3 澼 旬 此 0 15 す 0 3 頸 カ < 頃 橋 あ 間 足 を 0 部 釣 3: 踏 る 17 15 板 0 15 る 通 察 橋 爲 は 敷 0 行 は 72 於 8 板 5 す 左 0 난 0 撤 T 0 3 炭 稍 あ 渡 每 あ 3 少 VC 巳 か 人 礼 燒 迁 手 3 す 年 UC 3 3 前 る。 從 間 + A 廻 0 小 かっ 此 だ 事 屋 子 沙 to ح L 5 それ 5 月 老 は 苦 す V 事. 初 3 除 1 八 如心 10

> 出 Ŀ あ 17 來 流 出 釣 3 橋 3 0) 3 淺 0 力; 叉 0 0 稍 瀨 此 だ 8 擔 無論 から 下 3 沙 -流 任 精 6 者 徑 で 路 0) 通 對 者 小 語 は 岸 出 勿 8 3 案 卽 溫 所 論 内と 泉 5 頗 VC 左 徑 よ る 路 岸 す 37 不 17 0 ば 明 3 會 3 必 Щ す 側 釣 発 る を 橋 力: n 辿 t あ XZ

當 0 釣 あ 橋 地 方 0 3 丰 0 積 前 雪 0 は 樋 口 君 丈 3 迈 數 尺 L 72 17 0 達 時 す 12 3 + 0 6 時 あ 半 3 0

(280)

8

3

氣 75 鐢 ぢ VC 3 [1] 惠 72 登 75 2 降 h 個 n h 5 燒 炭 出 焼 炭 L 2 小 隨 籠 屋 分 かっ 12 請 寒 6 取 5 1 3 6 T 出 休 あ 憩 す 0 時 72 L 0 で、 專 非 飯 常 8 山 な L 側 72 8

十 氣 渡 九 弱 1/2 釣 惱 橋 年 V 2 八 多 は、 3 0 月 n 九 は 長 約 72 日 當 渡 Ł 針 時 6 間 木 許 8 得 思 峠 82 8 程 15 水 出 超 動 面 之 搖 を 72 距 す 薄 3 る 予 暮 2 2 から 黑 予 部 約 此 は Ш 明 釣 几 治 橋 0 丈 を 籠

6

6

雜

時 0 實 72 0 間 时 髮 本 6 车 あ 40 0 於 55 H 3 最 後 0 渡 橋 者

て、 h 0 此 岸 で 8 身 足 は 6 は 場 念 ねば 岩 7 嶮 皿 角 作 な * 12 0 5 碎 n 極 Z 8 H 所 3 3 か 20 徑 は 3 激 往 流 K 步 僅 12 吞 誤 カン まれ 5 12 岩 1/1 際 壁 3 かい 落 を 刻 0

3

ブ

ラ

力

時

0)

形

見

0

あ

る

ح

とが

首

肯

22

3

1

どの D'S 多 趣 UC ウ 兩 は、 な 闊 岸 v どの 葉樹 8 蔽 之 累 藝家 針 7 J° 0 葉樹 あ 樹 掘 工 7 る 林 6 0 力: 採 亚 15 は ~ 混 る 涎 ッ ことと す 槪 措 7 る 3 ね 工 1 は ع 0 フ 3/ 殊 3 7 ナ 真 能 ウ 17 " 垂 0) 10 VI ナ 少 矮 直 命 ネ 賭 2 縮 線 ズ 偃 0 12 7 V 2 寒 近 仕 逸 デ 事. せ v 1 岩 な 딞 7 3 3/

> 館 自 4

真 あ 12 は 斷 静な 斜 崖 天 叔 I. ば 走 17 3 (7) 现 な 1 妙 n 技 或 72 82 鏡 付 柱 を 殆 狀 (V) 極 如 ٢ 節 3 垂 理 岩 直 0 忽ち 脚 安 12 3 駢 Ш 涵 岩 10 刻 Ļ L -j-は T 深 虚 奔 潭 秀 K 湍 幾 は 淵 岩 藍 凄 + を湛 壯 文 啜

> 沼 越 刻 徑 2 足 線測 郡を 側 h 八 6 72 0 0 XD 通 显 0 樹 見 之 過 隊 幹 35 す 3 岸 __ 17 とあ は 3 3 0 p: 崖 0 中 2 る 往 側 腹 は 其 0 1 K VC 此 中 通 6 較 Ŀ 流 12 行 線 越 者 12 線 大 落 5 0) * 3 IF. 氏 L 0 採 T -1-4 現 3 掘 測 在 年 P 淵 1 0 泉 量 1: 车 カ 2 月六 月 廢 L 3 坑 72 日 3 中 日 な 3 3; 7. 魚 E

然 惱 古 雨 26.34 (1) 中 屋 12 图 滑 境 6 投 n C 氣 17 な 浸 から 味 72 あ h 6 8 な る崖 33 側岩 5 倘 悠 壁 午 R 步 絵 0) 和 通 TL 留 過 時 83 12 T は 小 は 出 溫 117 此 かっ 泉 旅 大

2 する 釜川 کے 湛 UC 但 V ^ 膾 我 T 3 安 鄉 馬 3 我 0 Ш は す 國 玄 岩 潭 美 走っ る、 10 は、 武 L 壁 خ 洞 な T 七 V 柱 3 11 17 左 " 古 對 岸 湍 釜 狀 0 來 0 ٤ す 節 から 0 越 理 所 る な 奇 後 3 6 に 3 調 300 勝 t 呈 経算 为 不 御言而 歷 彼 す る 思 32 3 カン 議 箱 0 3 is T Vi 0 0 2 其 6 右 は 清 名 T 岸 瀑 2 [NA] 淮 8 高 岸 ٤ から JII L 横 な 0 此 3 T 御 威 6 支 n ٨ 之 流 箱 厭

经 邃 但 雄 馬 いか な 武 3 洞 は 10 は 大正 比 十四四 す 年 < Ŧi. 多 な + = 日 0) 地

廣

數 端

間

あ

る

せつ

T

讨 3 老

往

K

間

1,0

石

1

吞

h

7

は

獅

子

奮

迅

0

剪

示

岩

容

水

態

睨

から

がる

景致

展

開

す

る。

溪

水

0

かり 葉の 城山

雜

5

3

0

あ

3

大部分崩壊したので、 殆ど其價 値を失って了った)。

خ 吹 對 水模 美 Щ 0 想 點 清 ては は 0 V 柱 噴 32 樹 に於 津 狀節 林美 出 峽 る。 UC 彼 かっ 理 は 0 叉 1 岩壁 IC だ 此 0) 共 狹 t VC 岩 は、 ッ釜 比 局 大熔岩流 す 崦 7 七ッ釜のと共 0 あ に比する なり 豪 3 の遺 批 は 無 勿 物 景 V 致 0 あ VC 0 丽 此 彼 55 L 斑 處 は 苗 T 瀫 0 其 場、此 7)3 10 溪

つては、 HE 清 0 嫌 津 峽 は 大 あ 3 ic % 如 彼 为 賀 老 0 凌駕 峽 其溪 谷 5 水 IC 3 美、 此 す 3 嶂 IC, 此 樹 は 林 兩 美 崖 17 利 李 族

此 極 林 清 0 敵 美 津 峽 6 2 け 殊 無 奥 K 其 州 幽 0 材水巖 豪 壯 K なる點に 此 す 3 於 に、 其 水 彼 VI 石 到 美 底

膛 42 山 清 美 模 其 津 溪 新 峽 (I 原 復 馬 3 始的 雜 九 耶 州 溪 は h 继 1: 0 17 邀 開 H 彼 馬 IC 16 好 放 至 長 個 的 溪 0 所 粗 0 1.C 敵 てが 雜 此 手 す 35 的 6 3 3 0 3: あ 此 あ IC, は簉 6 0 其溪 5 T 所 מל 謂 予 か 水 40 11 本 美 其 领 取 岩 5 0 tor.

> 所 清 宋 炒火 ri, 冠 謂 津 す を 隱 0 占 峽谷美 3 峽 n は むる 72 3 0 仙地 ٤ 清 境 あ 津 らう。 7 峽、 -0 h は あ VC 殊 0 我 17 72 鄉 紅 徑 葉 或 餘 VC 期 9 於 10 IC け 於 齟 3 V なる 3 3 0) 清 者

> > 0

尾

と験 大 5 TK 44. 16 0 らん ば。 盛 な 賑 IE. 所 つた + 岨 謂 2 と欲 Щ 七 極 T 12 H 岳 加 2 本 年 8 Ŧi. 3 す 開 3 3 然 17 r るも 溪谷 3 n 0 3 通 從て す で 17 10 プ Ŀ. ると 0 VC ス は 森林 原始 越國 人跡 方 全く人跡 面 v 3 必 的 境 未 は 3 验 0 到 Ŕ 眞 Ŀ 未 近 林 14 0 越 到 競 殊 岳 境 來 VC 原 5 線 0 12 は 地 跋 境 T 始 は は 涉 地 交通 足 完 曲 殆 9 的 自 E を 成 为 竹 3 治 此 L 多 0 3 美を 境 72 vo 不 0 な 樣 便

(1) 刻 地 12 紅 17 0 る様 南 紅 に入 葉 葉美 美 L 期 て、 * うとき、 (2 になるで 於て、 加 力 六日 そろ 上越 町 あ 殊 小 550 出 VC 鹽澤 附 北 澤 麗 近 緣 以南即 3 20 Ŀ. 石 6 に入るので 打 刻 近 ち土 車 き遠 湯澤 10 榜 搭 * ある ٤ 8 Ш 33 彻

奥

Ш

0

雁

1

腹摺

K

つい

7

錄 4: 奥 Ш 0) 雁 腹 摺 0 いて

雜

72 於 清 3 H 水 0 3 1 確さ 6 2 は 氷ドネ な P in 口 V 信 VC 越 至 或 る 沿 境 など、 道 0 紅 とて 葉 美 は、 8 比 信 較 に越 な線 つに

が順 る 3 未 溪 紅 予 TE 葉 VI 水 今 を飾 美 南 曾 目 VC 0 T 遭 接 金 境 n 遇 地 城 3 L は、 # Ш 2 划 清 IC 3 予 邃 登 津 办 紅 秀 峽 0 終生 葉 * T 麗 觀 探 な 開 0 0 る 0 五友 FIJ T 紅 豁 な 象 葉 雄 を得 美 る 大 原 哉 VC 始 鮮 た 接 的 麗 曹 0 L 森 終 6 林 富 あ 子 な

大正十 年一月廿九 稿

L

た

迄

6

あ

3

炡 久 吉

0 交山 力 献 本 12 民 5 あ 上 年 12 與 ケ 第 聞 昧 腹 3 50 慕 拙 糺 を 摺 號 索 持 文 巴 L 3 等 VC 0 小 v L 見 2 集 て、 揭 L T n 載 會 て、 居 Ш it 峯 席 Z す た 分 3 0 大 0 VC F. 2 で、 ること 體 VC 結 2 V 於 果 0 T 8 位 T 先 1 大 年 は 置 0 發 た。 表正 あ 3 甲 八 突 裴 る 年 E は B 詳 VC 旅 後 11: 미 細 月 行 な 本 8 VI 2 誌 0 6 今 叉 際 前 再 0 第 H

澼

け

黑 何 地 す 0 名が る 嶽 土 等 甲 所 为 民 Ш 明 記 あ 或 0 牛 北 殊 す る 志 る文献 ح 奥 木 肩 IC ح 高 嵯 Ш VC 0 は t 距 0 雁 峨 約鹽 * 確 雁 0 ケ 鑛 手 0 T 腹 1 腹摺 泉 \$ 見 九 VC 摺 主 T は L そ 0 な KC VC Vo 0 至 村 米 尋 位 先 0 ね 2 民 T 置 Z づ 無 72 0 n 誤 談 立所 は 4 0 木に 關 h VC 1 唯 唯 な 地 L t 2 か 3 0 奥 T V T 野 は ح > 定 3 信亦

田

は 及 罰 IE. h 然 だ 3 す 誤 に近 時、 3 0 0 あ 必要を感 先頃 ること 2 峨 を 鹽 0 す 發 位 VC 3 見 置 遊 8 VC L h で、 至 72 確 定 0 0 72 で L 談 得 會 次 第 5 た K 2 雁 0 > あ VC 思 1 そ 腹 2 摺 n 72 8 0 UC

易 が を 練 ら度 世 同 * VC 2 VC 誤 山伴 要 か す 1 解 民 L 日 Щ 澤 る 3 を 10 Щ 實 \$ 峯 起 人 0 地 15 0 圖 0 地 0 地 易 名 を 10 0 V 英人 1 T 8 3 示 0 村 L V 地 日 本に 殊 72 T 理 民 K 質 6 教 教 VC VC VC 質 先 常 問 は 塾 0 す 72 方 す 叉 n L VC 英 力: 3 は ば 72 とと IE. 場 誤 獵 地 地 語 合 師 は 圖 必理 謬 を讀 叉 2 VC 0 3 L 通 は 定 \$ 殆 中 如 案 4 み E A IE. ぜ 聞 な 內 0 確 3 程容かい者 手

23 樵

4 夫

風 10

Ш 0

0 V

腹 T

摺 聞

2

考

~ 72

1

居 ころ

72

所 70:

力

5 獵

北

12 は

下

h

日

72 VC 大 あ 鞍 0

0

は

須

<

撤

回

す

4

Con .

0

2

信

す

3

質

1

2

師

今

迄

利、

鍛 0# 奥 山 0 雁 1 腹 摺について

行 外 2 力 な な 失 樣 V 敗 を 招 土 VC 1 民 2 5 0 か 为 لح + 往 民 R 本 VC 測 皆 1 量 悉 T UC < 慣 あ 信 3 n す な 3 v 譯 VC VI

から 山雁 あ あ 0 0 腹 72 0 L 北 摺 72 5 肩 0 0 n 3 は 0 0 を 指 あ 以 真 す 3 木 T 0 木 胧 4 0 6 村 奥 は V. 短 な 2 か 0 0 腹 か 獵 白彩に 師 摺 屋*言 0 2 ٢ 72 0 丸がで 斷 0 叉 定 C 6 山 す あ 鑛 あ 泉 谷 3 3 0 0 T 主 1/2 明 は 0 3 疑 黑 言 業 糕 2 V

V

せ

る

地

點

私 雁

0

考

~

T

居 亦

た

所 0

2

は つで、

大

分

10

逕

庭 0

から 指

點

奥

Ш

0

1

腹

摺

\$

2

鑛

泉

主

だ 名 鞍 111 E 2 72 流 v は 2 稱 戶 賽 教 L 17 0 0 0 注 峯 < 0 र्गा 2 (原 瀧 あ n 2 2 高 な は 澤 3 距 稱 秋 0 す 然 期 源 九 3 3 飛 流 八 地 VC 雁 33 點 發 0 樵 2: 米 夫 越 す 6 0 す る そと を 言 72 鞍 腹 部 る 太 摺 カン 所 み * 6 は 故 呼 北 VC 雁 5 ぶに か 腹 E 0 <

かっ 腹 摺 かっ V n 3 名 72 名 稱 0 は あ 最 0 初 は Z 飛 雁 T 0 雁 通 は 路 通 UC 當 例 Щ 3 稜 2

> 3 雁 第 15 精 为 n カン Ш L 腹 な 巳 窪 1 摺 會 1 小 3 部 を 通 8 員 集 知 \$ 0 會 13: 通 3 0 中 0 命 過 澤 T 席 世 礼 す 眞 6 な F. 3 事 網 6 32 B 治 * 君 3 0 以 あ は 腹 0 0 る 摺 T 方言 あ 飛 御 0 至 0 話 當 雁 坂 T 0 F Ш を 見 捉 地 1 あ n 17 72 6 は ^ 於 得 5 る T 72 現 地 列 る

> > 席 VC

D: 天

6 聳 峠 部 名 6 後 5 茅 B 8 VC が 來 雁 移 轉 710 3 戶 飛 6 雁 5 2 す VC 雁 腹 72 3 な 0 4 摺 腹 腹 本 8 VC 0 峠 誌 至 T 摺 摺 0 第 2 ح 0 居 2 Щ P 小 考 + 72 る かっ 菅 な ٤ る 5 どる 方 考 る 結 年 轉 面 第 より 果 U 0 る 附 そと 72 呼 8 方 號 會 3 IC 多 から L 於 0 0 て、 IC ろ かっ は、 木 1 山 峯 3 合 Ш 23 眞 Z 推 理 皋 0 1 測 0 木 的 名 VC た 東 0 6 から 5 な

20 0 L 四 は 6 T 态 話 居 米 n 發 3 0 方言 筋 0 な 源 70 3 V す 角 0 本 3 2 n 點 0 0 VC あ 6 雨 を 戾 VC る 澤 獵 L あ 雨 る 0 師 T 然 200 0 5 番 方 20 3 な 0 过 0 17 る 黄って 雨な樵 奥 金*の は 澤光夫 澤文名 5 頭なの 力 言 0 山ばは ٤ あ 呼 峯 2 る 3 腹 滴 高 0 爲 點 西 樣 摺 8 ح 北 VC 0 か 侧 話峯

4 與山 雁 腹 0

雞

300 2 Bili 名 2 à Ö 10 25 5% 17 尚 2 n 5 (1) 3 T 世 0 尾 共 は zi; 别 0) 澤 17 さらう 間 3 定 な 名 5 證 は 7 2 名 稱 n 为 殊 據 8 世 は 1,2 頭力 ば出 0 0 山最 0 0 稱 Щ 9 VC 8 雨 居 人二 高 T 邊 5 T 舉 3 1 0) Di. 0 4 Ш * 東 0 0 げ 點 居 (1) 尾 な 8 = 峯 12 頭 な 面 ---VC V 角 質 5 般 0 0 0 四 0 通 あ は は V ۲, 名 6 澤 米 雨 點 3 名 用 12 8 VI 6 カン 大 0 澤 0 * 勝 为 0 L あ 峯に 定 = 命 菩 名確 あ 手 193 な V 3 氣 薩 里 で、 は は 3 8 角 澤 Ľ 信 V 矢 峯 3 點 又 關 儘 0 ع 4 Ш V で、 東 呼ぶ 5 か 5 張係 名 等 西 る K あ L 面 は 6 0 は 面 0 6 が、長尾 H VC 丈 種 0 で 黃 な は は 地 前 呼 分 村 6 N あ 金 v 危 72 名 CX 2 け 尋 澤 樣 險 \$ ٤ 72 民 3 E 0 かス 特 2 至 0) は 拙 75 角 12 Ш 10 1/2 3 T は 尤 考 極 故 緣 稿 3 立 0 7 曲 獵 見 75 1 Y 0 3 最 V)

Va

13

3

5 2 大 2 T W) 0 72 か 鼻 木 は が鞍 0 腹 可 部 賊 4 木 成 岩 笑 澤 摺 0 3 人 UC L L かっ L は 島 昇 カュ 3 6 4 木 6 V 4 與 4 0 2 2 燒 2 奥 83 7 0 鼻 野 萩 0) 111 72 燒 とで 所 北 木原 0) 野 字言 0 15 Щ -42 2 为 當 峯 引 ح 0 Ŀ 0 -言 3 W K 世 げ 境 0 カン る。 2 I, ح 外 72 多 L は 萩 T 0 俗 あ 原 取 だ 稱 3 T 分 5 女 境 扱 0 寸 JII 2 あれ即 方:

L 4=

1 76 野 6 2 點 加 70 3 0 2 3 E 玄 方 n 壞序 里 3 0 だ 0 VC 小 72 が大 地 17 を 公 Ti 癥 燒 6 燒 記 8 野 年 < L 3 H L 2 ٤ 大 T Vo 0 可 前 斜 0 で、 燒 置 るとと AL V 頭 面 悟 3 然 6 ع か 23 0 2 3 稱 度 72 2 L ح 0 和 35 5 > 3 す 0 0) V V n 75 0 2 8 2 ガ 30 3 0 5 燒 3 大樣 樣 は 3 8 V 方: 野 研 3 VC 私 分 UC VC 覺 聞黑 VI 究 Щ 733 00 あ 5 别 聞 2 4 更 5 岳 未 頂 とち T UC 5 3 Ш T 10 0 11 + 方 名 大 0) 誤 5 東 0 稱 燒 北 間 面 崩 h 17 人 0 壞 語 野 Ш 肩 は 12 35 15 地 な 0) 6 語 0 VC 預 15 0 頭 の大 傳 確 つ三 0 V V 6 東燒 2 6 へた角

3:

力 何 T

獵 地 5 UC

師 名 な は

は 为 3 名

1

4

鼻 0 17 V

木

0

0 Ш 稱

8 民 L

燒 質 居

野

TE

7 處 摺

72

0 2

あ

72 3 か 從

5

0 0 思 吾 L

は

茅

戶

À

笹 0

原

LC

は

か か

30

る

2

T

17 T

72

來

zi:

誤

な

腹

b

南

る

峯 2

は VC

な

V

6

3

T

3



武田久吉氏摄影

F 11 4 44 11 10

杂

錄

追 す

記

る。

を置 ずと 2 掛 居 别 あ ٤ 北 吾 は 3 言 諸 同 3 雁 け 口 す 0 N , 情下 られ < 塔 3 力; 0 L 君 %; 白馬 对 角 15 0 問 位 们 區別 腹 誤 す 72 0 0 僻 る様な 摺 岳 か 圣 る 多 好 ح 稱 訂 さることゝ思つて、 明 V 吾 D's ら見 位、 は塔 瞭 5 す み す K 2 0 2 Æ " 0 3 0 る は " 0 L 15 72 る 多 感じ れば、 腹 バ等と讀すれると、 ケ あ は M 樣 位 T 任 何 T 岳と稱 草 品 稱 ると思 17 真 す 摺 6 居 がするの 别 木 5 平 は 次 結 0 圣 ^ 0 る 書 常 0 ケと 0 位 7 不 L 0 拳とす やうと 4 茶 唯 + 置 VI 1 から L ^ U で る。 ては 分と 雁したや 方 飯 雁 1 7 Æ は な ある。 ٤ 撒 3 サと 讀 事. ガ V 一と先筆を 50 なら T 腹 樣 宜 3 サ 3 7 な E V ふので 無理 方 n 6 サ は 摺 す ح 0 白峯を 極 背中 綴 < ば ٤ n あ ウ ハ 2 唯 る 75 ٤ ٤ 私が とれ な 丹 强 3 6 83 I. > 擱 は 3: ٤ な VC 方 澤 U あ 0 V v < 冷 迄 6 差 夫 る。 17 Щ Æ 4 7 は خے 迄 差 Z 水 7 重 地 n 0 サ 與 1 4 0 40 芝 0 かっ T ウ

を

区上 唯借 ので、 違ひ 然出 る_xに 沼ブし 爲 指 爲 して堂 Ш す 部 筋 8 83 は h 旧窪の更に か見えな つかず 6 會 樣 記 通 0 VC VC ゆる境澤)の 記』を贈ら て一三 矢張 小 なと つた なの 事 b 元 多 測 辿 つく筈が V なか ع 大 同 ことに, は を 6 今迄 氏 Щ なり な 士 6 努力 0 北 今 V 5 VC 民 頁 位に ず喜 登ら 散 雁 勝 を 3 25 か 微 囘 な 行の 0 T 瀧 5 を 6 カ 土 見 源流燧澤を登ることに 田島 , A v 1 腹摺と 72 なの 大廻 樣 悦 ñ 試 る 11-敎 な 民 澤 そうすると瀧澤源 通 6 光祭 世路が を感ず 弘 私 8 12 な 本流 氏 3 は 測 よう。 UC 方 ると 盐 及 6 0 VC 0 力: 0) が樹立をかる記事がか H 考 誤 な 3 3 K 为 0) 0 h る次第 L 稱 訝 " 0 似 は言 ことが 人 結 で 言と 田 ず、 步 て本 カコ × L きを 島 簡に 確 17 4 T L n 經 當 案內 當 居 0 8 奥 勝 8D V 失 假令そ 流 T あ 致 ح な 0 速 太 L 0 72 3 を見 8 す を引 大 木 る。 かっ 腹 笹 何 な て、 鞍 雁 2 郎 0 3 鞍 3 た 3 賊 部 0 氏 原 か 樣 偶 腹書 具 間 な 力 72 0 を 0 UC

* 380 登 路

捐

12

0

縺

第

十七

II.

狂

第

に添

据え

U T

72

拙

30

33

71

用に

はに

n

申

置

書

Ш

岳

樣 島の がな 賣 5 B 付 手 筋 3 命 3 ij 名 ず かい 大 氣 氏 15 V. を御 0 衣 憾 分 是 限 大 丸 儘 あ 0) दे 木 やつ JII 抵 3 3 手 等 亦贼 7> 15 3 0 0) らひど 譯 樣 つで 0 n 0 振 3 立村 入 は 言 72 場 総 證 Щ 6 72 15 5 0 n 3 合 な 考 3 2 3 廻 姬 る した 才 T 熊 0 1 あ 他 ^ H it 17 T IF. V 猩 湿 5 な 第 樣 そち 4 0 湯 臭の 1.5 3. 地 11 應 玉 HI 灰 ば 6 カ 和 0) ... 1 加川 な HI V V 6 15 る T T \$ VI 37 0 八 do 띪 3 K (1) 舉 唯 0 年 12 聞そと 8 記 明 件 0 5 狼 域 何 げら 0 私 折 唯 第 す 0 2 巫 2 3 る UC 0 带 2 餘 態い は 角 5 12 6 0 は 0 指 小 如 · CE 號 n 暇 72 VC 澤 彩 ح 菅 4 程 な 地 5 0 0) す 2 名を 手 T 8 内 T 2 2. 0) 嬉 N 0 御 11 \$ 多 當 7 n 滂 容 載 居 2 6 談 な 0 は L 0 V L * 誤 自 論 0 # 3 思 n 0 h 問 7 v 認 樣 身 次 1 3 福 6 2 拉 0 から 72 0) は 需 あ 72 人道 2 の 考 微 113 -份 篤 澤 な 3 6 E. 变 紫 12 * あ 底 す 除 3 11

從

事

7

居

72

元

締

31

1

坊

111

を 3 迄 \$ でし 对 3 げ 石 何 位 T は 名 卒 15 居 な 初 貌 1,0 13 40 丸 VI そん 今 力。 御 稱 から 調 あ 72 耳 ta 峠 村 思 V 位 後 6 歷 非 否 U) (7) 73 3 111 る 查 役 VI 75: 27: 樣 公 あ嵯 2 200 圳 32 で HI 7) > 75 0 0) H 未 愚を 然 * 15 3 瞰 な 如 訓 17 7 6 1 0) 3 骧 4 窗 黑 否 と御 仰 -6 態 よ 0 01 E 闥 山學 私 0 3 72 宝 威 新 733 易 岳 方 12 は 稱進 度 Ŀ 坊 8 15 ---迹 面 から 願 T 3 居 111 h 御 な h -同 HI T 声 智 70 II 0 L LC U v. 3 称 3 災 % 譚 洪 名 對 Ti L 垂 殿 T 村 8 處 6 敎 考 E liki -1-木 花 T E 疑 L 亦 RL -6 L ri で、 3 5 置 私 3 贼 は T ٤ T 12 ^ 82 を > 答 及 ば Fi. 物 な は E T T 存 人 毛 あ V) -60 -ならざ 道 私 女 居 足 S V H 11 H 0 CK EH 賛成 100 0 は る。 島 7 ò 同 福 111 15 な 0 場が どう \subseteq Ξ E 75 3 U Ш 以 黑 L 度 0) 得 7: は 名 7: V) 3 T 與 征. 長 3 8 多 手 i 0 11 な 盃 か 江 1 2 頁 木 2 L 1 際 [a] 00 0 出 III П 1 V 會 今 C: ののな 拉 は 1,0

同 T 居 何 書 とも得 によると丹波 72 小菅に屬するもの 0 で、 心が行き兼ねる。 れを受賣 山大菩薩幹 りし ゝ様で な 72 あるが るるもの K 過 ぎな は これ な V. V 叉 等 樣

(大正十五年七月十七日即

○籠川谷大澤小舎を中心と

田三郎

2 17 頃に 17 为 F. 近 かっ 大 は 型 天 Ш v W IF. H ナ 氣 Ш + ての 脈 ズ T 4 72 で ス 0 CI + 一年と十 小舍 囘 間 日 は 形式 は 殆 想 2 1 JII をやうやく华 0 谷 ع 0 h 行 週 ど毎 懷 は、 CA 生 0 四 年の二世 1 活 大 12 とつの を送 澤小 登 H H 弘 を抱 り得 かい 過だ 每 · 日程 峰 含を中 歳を十二月 5 2 日 降 2 2 かっ た峰 雪 0 7 的 h L 恵まれ 登黎 見せ Ш そし K 心と 23 0) 0) 73 L 日 720 した事が 77 を試 て小 末 力: とつ な 續 冬の 72 力 二度目 天 舍 5 1-許 飛 2 U 72 ケ E 初 驒 ٤ H 6 7 中 月 A

> 嚴 やう 冬の 究 登 と UC 111 Ш 情 達し L Щ 强 明 福 8 17 V 冬 15 な気 悉山 季節 嚴 11 17 35 0) 4 祭れ 夏 登山 やうとする ば 0 求 高 H 15 ほん 72 1 0) 持 を企 5 15 迹 70 ,連中 ちで蜂 は異 の心 3 於 な Ш 脈 な る 空 てる者は 0 v 7 つった未 持ち か D ても僕等 17 in 0 0 すへと向 であ 惠 0 1 2 F. は だかか 三月 せれ 力 0 けれ も緊張し = 未 知 許 T 3 ズ 5 はそん ども 3 知な 7 りの をひき寄 4 カン 4 た。 5 狀態 旬以 0 形式 てね その 機會を摑 Щ 2 頂 頂 後 2 な 0 10 C 登路 あ る。 理 せて終ふ。 向 12 42 る。 立 初 屈 0 於 例 それ つ喜 つて る綿 T h は 登 0 700 73 拔 7 3 ic 密 3 5 < X L 冬の 冬の 好 0 VC 0 日 12 な 17 v M 研 应

~ 率 岳

で で籠 4 うや は 四 大 けて JII < IF. Ш 谷側 Z. + 來 た岩岩 6 四 几 谷 の響 72 年十 登 0) 庇 寒氣 M 73 3 君 0 月廿 け pi: な 相 L 餘 九 V 氷 談 0 粒 日 改 6 0 3 K L 狡 午 たが 登 劇 ^ 6 前 殆 0) 十時、 ることに L h 酷 V ど見 のと 蓮華 針 v えな 濃 な 岳 吹 木 0 0) 吹雪 72 頂 ps: V 17 吹

0

時

け

6

雪の

日

IC

大澤

小

含

と登つて二

调

間

吹

き出

72

雪

庇

緣

を踏

で

B

10

吹

雪

6

色

6

8

12 雪

見當

8 涯

0

H

T 17

藻

橙

v て登 りと

3 浮

夏の 出

藪

8 庇 灰

h

0 ぢ ात

5

V

面

0

12

時 0

ほ

h

4 h

CX

3

雪

0

け K

カ

为

鍛

雜

六 る。 5 だ 溜 ح ス 雪 米 17 風 脛 + + 突 綱 かい 10 は 1 面 風 1 吹 6 治 0 70 は VI 岩 三人 3 風 大 脫 餘 倘 飛 稜 1 丈 で ほ V h 0) で岩 口 玄 は 夫 强 穿 自 攀 3 な 0 成 < V 體 各 72 n 0 h T づると 稜 吹 雪 堅 儘 T 0 玄 0 金 害庇 結 0 陸 1 針 あ 樏 裡 緊 倒 木 CK UC ٤ 力。 3 合 かい 0 峠 VI 12 は 6 穿 落 < T 和 1 0 M 3 谷 かっ 5 す 0 当 まで 5 3 峠 な 込 庇 ^ 2 力 な 0) V T 0 ス け 鞍 位 + 6 緣 0 0 で 籠 不 部 5 湾 だ 1 近 安 III な かい を O む 定 谷 Ŧi. 6 脫 V P 江 72 足 in (举

2 槍 か 脫 E 6 3 n 0 Щ 8 は 拾 程 登 稜 樂 木 0 で T IE. 72 雅 72 ス 7 時 な 月 + ことを後 8 氣 0 1 ことだ。 8 早 樂 針 木 計 脫 か \"\ \" 悔 知 6 17 失 n 去 す き適 さいう 车 3 L な B 72 V だ 恨 當 V 今更 から 月 0 0 0 0 た。 あ 範 與 3 0 ス な 穗 キ を 0 高 驇 5 1 風 知 لح を Щ 2 0 L 攀 72

だ

3 为

月

0 谷

17

忍

堪 は

T

頂

17

蓬

た 0

峠 E

かい

時

間

劇

网

手

面

掩

N

乍

氷

粉

0

打

Ш

稜

꺒

8

L

8

72

0 0

後

0 天

あ

3

タ方 3

大澤

1

O

傍

かっ

5

運

do

ح

る許 臺 B n 戾 かっ 吹 3 VC す 72 る。 雪 沸 戾 降るやうな 腐 h 餘 を ス h かい 龙 + 6 0 防 VC 風 は は 3 0 は IF 頰 T を穿 相 乍 劇 0 VC 飲 峠 戀 か L 張 5 んでゆからかなどと伸 いて峠 6 v 0 各 大きな雪 12 h 氣 風 3 明 重 かっ 强 꺪 け 滅 0 H 微 を下れば狭谷 0 阪 V 3 办 8 温 氷 T 片が 化 湯 頂 走 か * り下 为 0 0 る。 搔 D À 寒 3 不 ずか 氣 思 5 る 摧 17 議 12 42 6 17 は芝居 吹 分 Ti L 峠 乍 舞 5 な 3 か 6 は 2 聲 版 30 0 峠 吹 茶 4 T 力 L 0) \$ 事 腕 25 郷 出 0 な UC

らう。 稜 治 ち 劍 蓮 V 寒 72 華 耐 0 僕 岳 吹 達 0 0 IC 文 得 雪 か 吹 朓 登 ٤ 8 ? 雪 3 吹 0 頂 望 0 雪 姿 な な か 2 冬に 8 8 F H 10 0 自 見 驅 17 8 から 知 分達 やちと 於 天 な 5 0 72 72 H 輝 氣 朓 か 3 0 望 0 3 6 \$ 結 L ri 哲 专 初 0 らう た ば な 8 無 素 あ 0 0 n T な 晴 だ 72 な か 此 0 0 6 らう 等 力 容 な VC L がどれ 5 0 な v ことが かい ぜ B 知 らざる 蓮 云 0 111 程 2 華 だ 稜 2 カコ 0

22 雪庇 き返 5 華 間 ラ 程 0) v うで 0 ガ 頂 0 危險 L あ ラ 直 H TE. 650 あ 7 专 月 T かい 終 慕 VC 0 72 72 多 n は 轉 出 0 た 方 石 5 ス V だ 办 6 時 + n 6 あ 1 凄 3 間 5 大 积 0 0 は 5 藪 雪 72 至 澤 小 0 極 0 8 舍 0) ス 深 0 < 被 登 かっ + 中 1 1 2 6 3 v 時 途 た T 頂 滑 v 登路 澤 見 生 降 李 2 たく 6 6 な KC 17 H は 行 2 0 案外 雪 0 な で 夏 T 3 崩 あ な 几 t 31 6 時 لح

針 木 峠

> 0 0 1 It

突 峠 ぎをやつて早く 7 を巻きなほ 室が薄 B すが 夜、 返 0 B 陸 と出 へす 時 測 星の 間 掛 墨 翌日 地 ٤ 程 圖 H 色 U す 5 VC とか 吹 \$ 3 かい 10 10 な 記 6 なると又 Ti. あ かっ ス B 0 n から 載 谷底 灰色 + け T 多く U 眠 5 あ 1 を真 でる 着 終 3 6 IC K 20 な 雪 H 地 n 海 て、 3 點 直 0 か 豹 出 な 何 心 20: な 降 皮 10 V T 度 までは など云 0) 目 登 0 をつける ねやうも 髓 其處 0 T 3 無 T まで 布 駄 3 つて、 浣 團 UC かい る。 5上 などの \$3 天 九 峠 0 0 2-七 下 凍 な 0 0 n 中 文 为言 あ 針 6 0 VC 叉 涂 0 米 木 6 カン 騷 終去。

麓の小 吹 置 畫 谷 0 0 + す 澤 で、 1 な 7 3 必要 0) 燈 0 * 小 殊更に 日 カ: 6 含うち 充 かい 迫 か 登 谷奥で雲崩 かっ あ 分 3 ら蓮 0 言が 灰 72 な る にはどうし 色 華、 ス キ 舞 皆 VC 寂 小舍から 1 沈 L 針 h 0 0 T なが あ h 登 水、 v るや 來 感 路 6 2 深 預 仰 本 2 3 0 ス 5 る。 録り 力: 採 通 S 110 v 考 な だ す 5 5 IJ 此 方の 岳 日 灰 3 ^ H 叔 色 33 は VC 17 0 なら 囚 は 2 谷 研 針 毎 江 究を 此 空 n は、 木 は 日 0 2 な n 0 UC 峠 殺 冬 峠 日

侧

本

7

C

ح 右 谷 大 抵 办 0 小 あ 九七 含か 崖 から 0 5 72 0 時 許 米 間 峠 突の か まで 6 5 は雪 下方 な 時 に写崩 間 0 狀態 谷 だ 全 0 た。 で随 體 0 为 出 分と異 かい 押 V つも乍ら籠 出 7: あ T 0 る。 72 2 72 方 左 JII

る。 林 ボ 谷 と峠 九 は VC 風 身 疏 0 七 をか Ō 林 强 ٤ 米 8 0 V < 分岐 突か なく雪が H などは すことも出來や 5110 點 17 風 峠 來 分程 る。 15 0 吹き拂は 方 谷 3 ~ 登 5 は 緩 33 \$1 孰 かっ n は n 17 すく て岩 登 多 急 7 3 3 岳 峻 7 樺 * VC 7 處 0 な +

7

雞 鈴 統川 谷大澤小舎を中心として(冬) 文

7

登

つたらう。

0) 疏

録 ○龍川谷大澤小舎を中心として

雜

n 體 0 ch 樹 in 35 II Œ. よく 遥 氷 10 3 庇 出 H 33 0 10 かっ T 見 麗 右 t 4 所 2 Fi. 色 樂 如道 ^ は 力 る る。 て隨 11) 6 L あ 3 と目 小 L 心 舍 立. 分 Ŧi. 木 V 色 ち 峠 排 办 0 その 並 W. 黑 峠 峠 5 733 3. 原 6 30 T 0 1 缥 黑 登 位 0 6 F. 緩 置 נל 叉 部 \$1 は 東澤 るや 木 11 1 る。 谷 谷 容 形 庇 30 30 易 狀 谷 (1) 75 下 6 な 0 10 办 違 鉛 通 h WD 6 は < 0 h ٤ 12 夏 拔 か 起 0 谷 伏 流 1 UC H 大

管川の女子からマーヤークーボ

÷ 8 7 ス から 龍 易 1 7 150 32 7 りが JII VC 3 + 7 0 ij 谷 * 7 本谷から 幅 向 前 术 33 漩 登る <, L 翞 至 換 北 處 12 極 0) 出 15 多 に発え 陂 狹時 谷 5 42 などは 和 VI < ニっ 細 雪 3 T より T. 3%. 崩 か 7 -(0 K 7 よく流さ 0) 出 あ酸 派 1 電 7 * 光 53 3 16 て熟 あ 形 から V 急領 登 3 n UC ると 登 T 右 n 3 * 総 P 0 5 針 カ 答 谷 32 0 力 72 0 から か は 0 木 な 登 雪 T b 2 ス

> 下化 緩 るが 30 30 リ 谷 h 0 と針 P 0 分 17 スキ 迅 カン 緣 鳴 6 針 淀 7 登ら 木 + 風 木 江 な V h 1 クボ 0 方言 0 0 T だ 鞍部な ñ を脱ぐ必要 淮 山 谷 Ŧi. 25 5 隆と 3 谷を続ぐ は 3 0) 0 取つきは風 ス な でニ + 0 本 分 1 0 谷 0 0 VI T 12 は かい 3 擴 深 分、 な Ш VI 掛 5 5 成 素 稜 v h 7 V は 針 堅 粉 3 ヤ 40 晴 뺡 雪 HI-5 木 窪 3 6 7 0 谷 面 け h から L 7 (1) 3 貯 8 0 城 0 V 0 な 底 取 尾 8 2 6 盜 T Ti カコ T 根 0 8 女 6 T h n 1 E は 6 ス 0 T ス ボ 0 2 63 10

異 谷 雪 32 IE. T 江 面 付 ス VC 立 吹 輝 6 50 18 る。 きだ。 ち 見 3 IJ 拂 塞 克 黑部 T 針 方 は 素 木 足 0 11 て光 T 0) 0 0) 敞 黑 下 70 3 鞍 20 5 部 V 0 流 6 7 E は 黑部 其 氷 22 2 3 3 な 處 3 11 壯 0) 3 ガコ L 5 2 溪 觀 0 72 谷 岩 3 は 地 は 冬 6 劒 角 治 雪 樹 12 が言 23 於 深 立 露 冰 庇 は 0 H 111 VI V 飾 57 形 3 20: m

部

造

パリ岳

谷 カコ ス 牛 6 1 7 0 + 1 ス 六 11 IJ 入 岳 3 ス 17 110 13 门 5 2 爱 3

0

JII

71:

案外

る時

の間

でが

50

5

け

付

72

此

處

0)

M

近

は

6

12

T

3

な

凍 風

這

松

がてと

雪

かっ

5

頭る掛

を擡げ

方言

75

6

0

點か

ら最

高

0

頂

まで

金標

とつけ

氷

L

Щ

稜

V)

越

侧

* 點

0

Ŧi.

8

うれ

ば T

行

3

0 72

0

11 17 あ

を辷らう

8

なら、

どとなで落

5 0

T

3

黎

V

銳 信 絡

V 濃 h

ス 侧

IJ 最 分 は

0 後 程

絕

道

力

古

3

最後

眞

L

T

0 110

U)

急な נל

1

0

隆

起 H 結

を

眞

盾

(0)

知 0) 3 2 中

n 斜

おうに 面

3

な

v.

絶頂から國境

線

111

稜

VC

赤 くか ない 登 る。

澤

岳

0

鞍

部

と劇

v

7

りとな

7

0

3 0)

其

針

木

峠

かっ

6

續

1

多

0

-

距

離

F

波 路

< あ L

和 3

難

な

簡

所

23 VI 木

מ ימ

登

東尾 3

根 針

נל

丁

0

E

天 L

な姿が又耐

6 0

75

多

T

來

3

6

る

٤

針

水

压

とそ

0

は

あ

大

な

B 振

のだ

尾

根

1)

粉

11)

飛

級 北

\$ 尾

麗 根

は

35

雜

敛

蓮 を見 添 だ。 ると 針 'n 境 < 順 線 華 19 で 木 岳 劔を 渡 + な ń L ス 0) 0) 牛 尾 だり 0 1 T Ŧi. 鞍 路 今日 分 麗 1 根 72 見 L 6 は は と籠 程 かっ 72 7 VI L 共 L 0 6 か 川 處 第 緩るやか てねた。 ス 立山 った。 時 で脱 谷 間 高 1 出 許 點 0 大 v 雄山 第二高 なその 前 re. かる 尾 n 12 日 1 辨 根 + 深を 遊んで 陽 尾 1 Ŧi. 0 吹雪 波長 點 极 VI 72 信 年 繞 その 濃側 との 0) 3 頂 線 0) 3 + 頃 裡 72 0 0 起 群 力 合 絡 27 第 伏 彩 0 1,2 h 0 丁 h 艘 峰 霧 77 度 3 70 0 高 慈 72 * 或 N 容 ら大 滑降 確 6 來 3

當

筋

で

6

50

TF.

JE.

月

九

日

ス

11

IJ

V

2

0

根

0

浙

V

72

久

出

から

胀

3

は 尾

矢張

6

登

0) 想

な 懷

形

な

る

第二

點

かい Ш 0

5

鞍

部

まで

ス

丰

1 C 6

二度 路

V

2

かい 高

など

0)

廻轉

8

0 は 式 <

T

33

6

且

7

72

だ テ

息

12 1

下られ

る。(ス

牛

1

6 a

此

0

部

6 鞍

733 で 四 ふた 針 此 あ 27 赤 八澤小舍 研 7 550 学 究 か 1 Ti. L 〇分も 5 ス を撰 それ まで 觀 ス 70 110 ź, より L 1] は急な斜 CK 岳 たくな いる。 利 岳 用 力。 ~ 登 1 つた尾根よ 3 崩 隨 Ti v な 分と滑 と狭 大 5 V) さな 危 2 1 非 險 ス V 班 常 谷底 733 はは 1) 甚 当 甲 h 由 な 斐 を 頂 12 困 0 0 滑 珍 あらう。 多 難 狀 と登 V 能 3 2 3: る。 す IE. H 0

72 登 針 る 木 熟 12 0) 2 北尾根 2 00 晴 3 n たっ 渡 尾 ٤ 根 東尾 つた日であ 0 دور 異 6 根とを比較 0

0

C

見

交互 3 非 (5 常 あ 3 使 2 47 鋭 技 その 尾 術 根 かい 登路 と廣 確 實 でな とし ろく T 緩 V と危 VI 3 a 種 3 險 な緩 な な 尾 所 化 根 3 2

辨

B

0

2

町 3 斷 17 岳 時 許 節 部 崖 思 0 問 h 崗 は H 別 * 0 は 胸 n Ш 破 尾 峠 8 75 t 碎 6 根 唆 かっ 6 IC 6 Z 7: る 0 T 为 最 17 32 尾 攀 辟 n 3 17 根 初 充 間 文 分 0 此 傳 3 华 17 岩 など 0 6 CS 位 E あ 尾 X などより 掛 時 6 る 根 0) 問 0 3 興 72 0 1 S. 黑 要 ス 味 3 + 部 危 3: す 頂 處 1 谷 險 あ 近 3 1 女 侧 0) 0 3 0 使 か 0) 0 登 用 計: 冬 3 1 出 大 Ch 0) 脏 10 5 來 な 劍 0)

17 叉 3 續 U 悪 Mi 0 ス ナ 力 H ح 場 で 学 北 11 规 6 Fi. るとそ 0 谷 あ -0 IJ 尾 分 模 0 越 0 3 根 别: 鹼 鞍 程 登 中 かい 氣 力 を殺 6 婪 0) 侧 部 大 L 17 な 0 E 容 v 0 0) 70 感 L 形 UC 氷 氷 ケ 3 ス 答 式 と岩 所 路 72 粉 + 0) 0 方言 急 岩 2 27 で 1 VI あ 深 7 坂 卷 L あ 2 6 脫 る。 1 V 0 2 る 7 尖 1/1 玄 Ш 絡 Y 登 最 稜 0 殆 53 1 7 E 6 72 3 7 3 1 企 7: ど尾 單 頂 K 頂 樂 林思 bi 200 から 女 6 \$1 6 3 0 0 あ あ Vi 根 穿 登 分 あ 3 登 3 な 通 v 0 な 3 0 6 T 6 1 下 だ 雞 す 0 か な 答 針 H だ 1 あ ち 3 V 木 h

VI 詹 \$ 滑 V 0 な は 3 ٤ 敵 1 本 ¢ な 想 下 0 原 JII 1 0 P 3 思 v 降 0 流 針 ٤ 像 谷 て非 幸 6 流 5 なく 2 1 2 3 かっ 木 な な せ る 然 得 CS 4 力; 33 17. 5 岳 0 6 で最 0) 緩 L 废 0 常 3 長 V. T 0 2 3 題 3 T 礼 3 Z 大 12 頂 ス 牛 V 頂 礼 思 登 味 0 3 3 ú, 亦 is 辛 粉 な 艺 Do D 1 72 3 は ス 3 12 35: 1 彗 2 高 -0 許 6 0 n 此 倍 胸 崩 + 75 17 办 望 0 0 答 h は 3 0 長 W) 1 L 時 を 思 斷 頂 登 6 2 所 赤 凄 ス 17 V な 間 陂 2 崖 3 得 0 見 まじ キ 学 滑 de 扇 2 充 好 3 6 は 3 T 72 1 冬 な 適 狀 降 赤澤 图 0 分 種 峰 見 記 E 登 VI 0 2 0 難 V 6 47 12 ح 72 憶 素 0 谷 あ Ш な 與 à な 8 L 時 夏 者 睛 7 3 要 味 3 0 危 L 鳴 T 0 6 は あ 10 72 203 す 席 險 澤 Bil 推 逝 خ L 姚 洪 有 3 3 大 23 测 1 账 0 V 6 L 穦 3 かっ 0 在 港 I あ 雪 T 身 赤 狀 F 8 HI h は 3 JII 動 何 0) 力: 澤 赤 腹 12 知態 .0 72 六 谷 應 3 13 はな 響れに 3 江 +

今な 粉 冬、 雪 永の 此 遠 水 等 花 17 0) おう 翠 1 撒 17 7 4 は あ 散 銳 5 5 < 5 吹 0 1 我 1 10 南 R 메 ス 0 CK 丰 72 統 1 0 H 7 6 0 あ IN 2 F. 副 3

72

M

なで

登

る機

愈

捆

3

得

な

力:

ス

110

1)

岳

-6 =

Ш 旅 0) 1 カ

通

る

中 底

N VC

堂

17 0

72

3

大

溫 泉 平

泉

町 入 カン

0

斜 自

72

狹 から

花*湯

0)

け

大

湯

泉

0

湯

5

約

許

合。

JII 平

0 温

谷

あ

T

溫 0

口

迄

動 里

車

の驟

知 n 古 ズ 1 72 5 3 L あ 0 4 な UC る -0 かっ 7 志 7 あ 0 12 す 72 IV る F. 者 F. Da 0 = 此 ズ 飛 1 ズ 0) 3 1 躍 簡 4 冬 0 0 0 單 0 階 新 な 高 梯 6 寄 記 連 錄 與 Ш あ V ٤ 办 分 脈 0 な 新 0 77 里子 坚 n 6 容 かい ば 72 K Ш 幸 17 17 家 永 悲 拓 見 4 0 6 か、出 嘗 間 n à 3

Ш 1

る

亮

h 4 5 湯 記 事 同 2 大 1 處 平 は T II-3 2 JII 加 + 黑 湯 0 日 根 0 泉 岳 H. 據 溪 0 人 Ш V) 年 ic 平. 住 لح 北 六 行 谷 1 0 Ш L 1:0 Ti 泊 月 6 入 1 K T 0 Ŧ. 容 h 高 法 1 黑 日 華院 法 原 翌六 K ŀ h 岳 久 10 箱 カン 華 住 院 5 本 出 日 福 崎 花 驛 泉 0 門 山溫 6 2 花 拔 UZ 泉 车 平禮 出 書 F 大 12 4 船 達 治火 2 72 0 Ш 岳 Ш L L 等 à 0 T 0 IJ. 2 3 3 32 北 跋 角 F 日 裾 0 は 3 0 涉 t H

> 見 泊 h \$ は T IF. 置 0 あ る 數 0 元 2 7 72 軒 + V 0 车 石 T お 72 炭 0 軒 UC 道 茶 あ 酸 的 3 烧 湯 を は 客 性 0 0 量 か は け 72 入 あ 3 UC 0 3 72 出 る h n 類 多 0 さう 5 だ な 泉 v 0 寸 清 だ 3 御 C 大 v 變 方 胃 だ 33 5 旅 湯 澄 な 为言 內 は 腸 な 館 家 味 私 1 內 湯 t 病 p: 力: 110 湯 け 0 は 軒 1 ハ ず 0 IJ 特 から 大 あ 봡 を だ 溫 3 劾 あ E 3 新 3 館 泉 力: 0 0 5 5 2 は T あ T 3 0 沸 3 2 居 云 S ٤ 白 0 か 揭 3 3 書 0 5 旅 L 不 許た いを 10 館

0

V

町 がは な 岳草 V 0) 谷 R 路 見 草 溫 0 Ш 17 田 \mathbb{H} 文 大 から 彼 方言 小 原 な 面 泉 高 经 h 为: 町 から 3 0 方 53 VC Z 原 3 Ź, 南 3 10 な は 離れ 傳 为: 坂 Ġ, 3 曲 E だ 說 横 ٤ * から がやがて杉 布 左 路 工上 0 17 登 T 0 5 IJ 及 朝 は 谷 T VI 鶴 6 力: III 水 緩 森 0 圣 H 見 切 鳴 高 長 H かっ 33 林 る 登 筑 V 原 8 者 VC 17 高 功 5 0 紫 續 路 2 檜 は T 0 F 1 12 遺 野 水 6 高 愉 出 0 行 は 跡 から 快 ると 造 4 民 は 1 平 譚 C な 後 0 あ 仰 坦 林 あ 5 L 83 から 8 17 見 地 L n 3 n 顧 な 渡 ば 3 0 竹 飯 T る 3 0 此 す か 5 居 \mathbb{H} 眼 T F. 限 3 1 0 平 城 3 下 右 多 h 猕 は 山千 0 12 坦 緑い段 ケ 11 な

H

72

尾 杰

根 林

2 7:

境

UC

1 T

て今 急

举 寶.

0

7

來

72 h

北 ge ic

1811

0)

寬

原 根 プ

VI 40

登 10

3

盘 à.

3 か

75

原

40

な IIII

33

T

尾

事

(1)

的 0

13

江

谷狀

0 R

淺

<

'n

ス

17

1

3

間

3

無

<

游

薬

葉

樹

ic

次

徑

35

謹

72

35

72 右

10

登

T

行 陽

0

72

253 林

中

谷 h

72: 細

2000

5 E

17

孩

1/1

0) 要 雜

第 1. 年 號

手 T 4) 15 並 谷 1 27 F 12 入 3 0 あ つて 1 T 3 又 行 1 行 Ŧ. 0 N M: Ŧī. 谷 H 别 米 W 705 7 0 入 沪 11 口 徑 1) は 東 站 15 草 2 出 侧 原 12 た 0 2 733 細 to 2 徑 す 和 0 圣 72 聖 祖 3: 定

大 111 T 0 ス 72 斜 居 1 1-面 牛 14 (1) T げ 東 花 Ti な 0 どが T 部 3 墨 力 70 淚 2 73 沙 手 3 14 多 大 17 T 出 111 V 3 3 居 0 7 70 (3 72 10 7 鈴 能 0 牛 は 南 WD 10 ij 近 侧 72 3 3 0 0 ~ -10 v 易 沙: 1 は H 黑 L 术 = カュ " 7 72 岳 時 0 沈 7 平 72 ザ " は 治 0 ٤ 撼 サ 許 ル 生 3 岳 203 H 2 h

部

70

あ は

0

T 产

" 角

15

鍋

Ш

續

花

滤

111

山

Ξ

九

米

0

尾火

T

3

尾

極

23 税

C 13. 3

行 東

5

2 种

PH T

細 居

徑

を下

0 根

所

R 鏡 ズ

10 Ш

苣 17 ŀ 金艺

0

間

10

サ 0 CK

ク

ラ 10

サ 13

ウ < 17

0 尾

居

ili

地 亚

为言

t 温

な

0

72

2

0

宝

I.J.

傷

1351

乘

用

6

維

泉

-6

13

今

红

八

1

間

を

7

à は K VC 0 0 L 车 2 11 2.0 2 花 4= 3 憐 茂 72 72 45 0 13 乳 T 0 馬 ZE. 0 治 な 原でと ほどの 竹 % T 7. MT 岳 禮 は 群 浅 內 無 居 15 火 閩 his 57 22 田 登 111 服 V V. ところ 谷 とろどとろ T III 33 0 ح T 12 ž: 居 九 岳 5 72 居 0 たちない 河 T 辟 重 72 踏 -九 茶 大 少く %: 8 7 野 3 年 111 今 ブレ 荒 n 15 な = 5 度 ~ 面 ら 淺 樹 200 號 0) do 0 初 III 路 林 0 間 附 L 2 V 25 T 池 73 3: * 333 703 (V) 沂 M 谷 店 20: 0 2º (3) 1,1 10 實際 72 ずる 3 10 72 1C 3 原 8 3 沿 3 0 白 < 高 黑 南 733 來 0 下 0) 0 岳 起 T 7. T 3 6 3 見 の放 钦 3 狀方牧のれ

25 溫 6 て、 盃 2 深 初 III. 泉 (1) 0 淦 Ľ 北 10 辿 III 地 0 (1) 方 3 小 0 1) 谷 3 12 0) 3 尾 豫 0) 四 0 ス 定 次 15 47 ." 根 V 蹇 徑 行 他 70 72 力 4 地 IJ VC 71 は 草 閉 出 此 0) 15 急 T 深 頂 方 勝 亚 念 E V 面 手谷 % AL 面 ic 6 8 知 10 T 行 迷 澄 巫 0 答 < 72 治 15 3 0 0 5 增築 込 3 徑 72 岳 303 路 b 10 を 8 かっ 法 斷 30 ス 5 華 念 7. 不. 大 Q +

-to

世 3 前 大 'n 70 (1) 台 40 宗 G. 普 色 W) 0 (1) 寺 T 木 0 居 ラ 像 だ ッ 715 0 安置 1: 70 简 頃 i, (1) 太 6 T チ 3 尊 3 0 7 72 3 1 チ 0 夜 72 3 1 11 -1-最 à. 沂 In 6 点 Wij.

二、片ケ池と本山

股 12 ijk 5 (7) 4 v 望は 池 V Ili 0 達 峠 注 13 す 華院 から から 見 次名で 本 遠 3 ことから少 6 72 Lil < 右 八人住 泉か 52 13 此 (7) 高 な 3 0 学を登 3 5 北 V. Щ と云 久 3; 側 天 0) 往 大船 南 狗 太 谷 3 MI 小 50 ケ 17 1 城 行 頂 15 0) Ш 2 (等 途 (1) 17 ラ 2 ٤ 73 は 企 17 r!: 東 近 容 7 チ 3 佐 く見 " 方 3 3 ケ 渡 近 0) モ in 3 5 直 文 往 < Æ 203 ラ 1. 7 切 'ni 彩 7 U 中 3 多 17 V チ 手 片 13 < か

72 滋 3 35 得 3 片 3 な 池 は 3 池 造 Ш p: 大 0 原 名 5 地 分 それ 閉 0 (V) て けは 底 あ 本 0 斜 TE 17 0 111 3 THI 3 T 37 U) 東 * 3 東 72 33 カ 侧 6 0 1 15 15 そん 面 米 T あ 內 n 3 0 爆 VI 在 T 校 셌 0 名 0 V 3 ス 13: 火 京 42 0 12 口 1 分 IR v 72 プ 脏 10 17 丈 UC 0 割 あ 逵 12 2 2 3

J.

0)

深

さ 朽

0

8

ま積

だ

底た

(C)所

達謂

し腐

な植

カ, 土

70

物

0

腐

L

堆

L

つで

杏

0

T

Ŧi.

0

糎

見 ケ 7)3 L " 林 密 " T 氏 3 全 6 禾 1 T " 生 から 4 ス < £ 居 サ 水 2 あ 周 T 儿 7 清 壁 ウ 3: 3 7 0 33 慶 澄 3 治 流 T 生 その 72 P な 0) ブ 21 (1) 多 12 p: ウ 及 時 + 3 感 < 見 外 T " 3/ h 池 -L ッ 生 堆 5 学 + U で 周 0) 力 7:3 C 積 n 12 居 ブ 緣 な 12 7 五度を示して 72 T シ 共 L " 3 は 10 + V 居 た部 203 7 (1) 2 VI y 0 底 23: 大 12 2 1 外 x 水 分 部 当な 周 2 IJ 周 1 質 池 ウ 73 0) 7 壁 游 17 ガ は 0) It ス " " 0) は IJ 弱 ス L 居 線 +* ス 南 7 1 ナ ス t T 72 13 4 ジ V) 四 ス =1 平 ス 性 -----などの 1: F. 部 か 和 丰 ケ 水 -6 IJ は で 15 力: ٤ 0 な I 氣 フ 3 ¢ 主 密 VI 思 風 10 溫 17 12 1: 密 7: 114 生 Vi 種 趣 は 渡 +" 植 生 木 L n 25 攝

加 * 力: 生 -IIIt H T 4 本 登 UC Ш 37 は 小 片 灌 赤 U ケ 黄 木 T モ 間 5 南 池 0 色 É 毛 75 0 (1) 南 密 Ш 1 周 次 壁 骨 四 頂 Ŀ pi 0) 南 から 懿 洛 Ŀ に達する 東 あ は ,d; 緣 15 被 0 12 20 72 B 漫 な 6 たちのでき ととが L 117 0 -1 T T 居 窟 居 1 南 出 3 南 る らうと 裸 ps: 恋 19 頂 フに 6 15 Ŀ M

録 ○山旅のノートから

雜

水

は

淺

1

底

0)

泥

+

3:

黑褐

色

をし

て居る

0

0

居

な

维

it 3 質 から V 0 0 1 72

n 路 0 は た 12 ば H 高 K 左 出 L 力: 17 度 ば 手 近 大 約 3 の 事 当 5 M V 小 pi: < -L 0 F. V 出 7 溪 7 为: 10 遠 人 2 12 兆 0 け Œ 17 3 堂 0) 餘 手 1:15 他 米 VI 角 のそ 力,利 0 27 點 2 6 -4] 力 方 蓬 35 れか 八 な す 面 何 住 5 6 v は る 3 樣 次 15 111 同 南い な L M 頂 高 清 共 Ŀ. 17 度 及が崩 水路 達 かっ 又 南 地 力 2 す 6 は 東 圖 以 湧 南 3 四 0) 15 登 上 1.7 胀 1 3 V 15 下 111 下 望 T n 0 0

と植

溫法 華 院 湿 原

流 流 3 は 水 岳法 形 2 为 ح の院 成 0 溢 濕 L n 裾 T 地 T 合 泉 を 廣 MIT 00 無 南 V Ш 東 北湿 田 處 方 VC 原 12 は 0 出 贯 8 Ш 流な廣 處 L L 即 S て平 T 5 2 出に = る地股 0) 下 0 HI 流 鳴 74 ح VI 子周 大 川か船 深 いのら川 峽 上の平 觀察 層 CX 6

す

る

5

ح

出

72

第

0

例

2

共

W

2

植 今 原 2 景 10 3 h 觀 15 流 17 T 此 就 0 狠 T V T 下 原 居 3 0) 少 8 L 法 鳴 觀 统 < 華 -T-T 2 院 居 JII 3 記 の湿 0 3 Ŀ. す 泅. 原 流 5 原 ٤ ٤ は OV 15 成 5 湿 す 立名 や稱 原 3 現で 3 今呼 H 5 0 底 75

成

T

12

T

る

0

2

0)

网

岸

VC

於

T

濕

原

斷 面 8 或 度 4 T 居

がに物 體 底 0 岩 間 部 0 原 渡 0 IHI 17 0 跡 空 略 VC け \$ 隙 塊 中 認 顯 17 が央 花 83 は 横 部 黑 3 0 15 5 物 色 T 於 2 居 T 0 0) 水 为 麽 T 見 出 草 植 2 72 の來 + 0 3 办 F. 例 種 0 約 UC 女 0 生 0 面 2 白 T 及 T 岩 T V

兒 8 厚 礫 1,0 ると 礫 2 附は V 叫 層 層 3 0 成 着 家 問 厚 0 砂 L 砂 17 H 0 V 72 層 腐 堂 ימ י + は L 72 植 粘 > 來 粘 糎 壓 子 0 + 土 體 厨 推 植 土 乃 糎 層 が層 等 3 至 0 50 0 百 0 地 及數の n 間 層 ん層 地 T 10 + 0 6 8 居 居 糎 厚 居 介 介 がた 3 在 在 被 0 3 共 腐 为 L L 0 T 植 約 叉 T T のが 居 居 上 居 土 Ti. 他 T 層 米 12 3 0 數のののに は を數及例そ其厚そ 基

間

win

0

5 地 は 203 10 ٤ か層追 を な 及 0 8 老 す 觀 下 2 3 察 流 8 0 5 濕 L 40 る 72 彫 原 72 力 为 多 は 刻 出 3 23 古 v 0 出 來 22 づ あ な 來 かっ n な かっ \$ カン 5 濕 0 大 0 72 恐 原 同な 或 思 時 6 小 < 異 は 分 は 湖 6 0 VC は 子 水 あ 外 III 0 म 6 17 T あ 2 成 0 箇 峽 75

n

る

1

中 去 及

VC NC

見 於 その

3

樣

40

V

來 は

72 n あ か

思

T

易 內

斯 生 7

<

0

如 3 活 4 面

3 部

積 層

行

現

今

地

層 は

0

V 3 0

處

は

t

3

0

面

ら六

現

濕

表

於

植

物

生

8

見

面

17 在

ッ

7 原

5 0

Ľ VC

な

地 る

で

3

ッ 育

70 相

ケ

0

堆 る

CK 甚

活

せ 生 0

分

は 蘇 渥 H

糎 表

で

恐 +

5

過 40 積

٤

認

6

層 大 厚

僅 分 腐

6 地 + 堆

5 蘚

27

高

7 33 から +

は 出

水

0 多 て、 る

堆 0

積 かっ

0 ع

3

0

腐 n か

植 3 1

+

17

な か 0) 植

0

T あ 域

居 つて直

3

さら

2 收

+ 力

0

種

为

限

定

3

n

て居

る。 サ

即

5 +

> 0 物 V 吸

ス

屬 ウ

サ

オ

n

ルマ、

"

半

3 15

ウ、 數

工

 \sim

力 ゲ 山

類

33 サ 植 其 は

で

8

1

み

切

n

な

v

體 黑

に酸 色 8

性

反

應

を 唇 は 部

呈

するので生ずる植

は

成 地 0) あ

複 生 ふ場 13 雜 力 な群 合 ラ 3 力 3 落 力: ウ 侵 * 3 入 0 3 7 サ 3 2 L 共 = 3 T 場 殆 0 17 合 種 んど其 とが 種 R 0 で あ 草 0 純 る。 木 ス ゲ

群

四 惜

为言

侵 落 0

n 入 17

九

重

T 最 ウ

舞

初

VC

オ

T

來 仕

T

思 時 n 3 期 は 6 2 恐 堆 17 5 部 積 分 を 見 湖 的 沼 VC 3 條か 2 件 6 部 が現 分 異 今 的 0 0 VC T 狀 大 居 態 戀 差 な VC 達 易 異 0 す 为 る迄 0 あ あらら 3 0) から 永 V 2

0)

地

域

为

乾

燥

3

樣

な

狀

熊

VC

達

す

る

E

水

旌

が

YH

失

さう 發 觀 湖 利 居 VC 原 昔 想 な 究 L L 用 電 t は 水 72 け 的 日 3 0 T 九 T < 永 VC 6 す 所 33 放 办 居 2 0 面 重 ス 久 る 還 3 2 牧 は 場 保 Ifij 積 T ス Ш 5 る 5 影 17 3 今 存 地 云 を か 彙 + < 水 ٤ 度 日 3 5 占 な 5 竹 附 P 力: 底 10 3 九 L な 與 內、 n 8 V 沂 = づ 計 州 12 15 來 72 T 其 72 味 7 V 10 葬 n t 水 B 3 劃 可 他 3 0 111 は 7 近 1 力 成 T 6 0 例 L 0 0 岳 あ 此 ザ 去ら ٤ 先 あ 7 電 为 V \$ 冏 る 第 稲 サ 5 內 寸 5 氣 3 多 L. 多 0 無 + 33 0 n 5 VC 株式 8 0 0 T n 田 湿 侵 v 0 八 17 濕 る け 2 多 T 0 は 6 年 入 原 V 0 n 0 測 會 < は 0 3 す あ 原 方言 L 3 かっ 湿 量 を 社 0 居 あ 0 植 る 可 T ح 原 貯 調 3 3 物 來 C 期 VC から 成 思 今 查 開 は 水 は 待 36 0 4 方 3 3 3 0 再 池 嗚 法華 事 劉 を Z 熊 0 K 植 持 1 終 CX ٤ 1 情 25 0 學 10 惜 物 院 元 0 Ш 0 相 n 的 6 最 묾 72 0 7 T 濕 理 T 大

九 洛 重 VC 關 111 9 彙 3 4 觀 於 察 け 3 矮 小 灌 木 0 褥 狀 群

Щ 彙 0 內 私 33 便 宜 J: 群 とし て分け な 八 住

欽 〇山 旅の 1 1 から

6 游 九

4 高

なる

發 多 8

達を

U 美

南

24

III

0)

山十

0)

處

0 17

0 =

15 ケ

车

鸰

Щ

竹

內、 CK

III

岳

+

翁

+

八

年)。 第

Ш 部 殊

處

及

分 本

U

久住

H

ع

肥

Hij

との

無名

0

雜

を主と ととの 以 上 出 九 L (1) 植物學常 重 72 來 地 M 7 矮 な Ш U) 小 15 Ш V 雜 高 高 灌 H 岳 誌 虚 Ш 木 0 第 第二五 型 T 1 0) + 九 な = 八 植 州 狀 ケ 年 卷。 物 0 辞 モ 录 落 V 7 毛 竹 魌 づ は 0 內 8 n 美 3 略 現 事. 0 高 出 な Щ Щ 度 岳 17 L 8 第 T 蓬 IJ π + 見 75 3/ 0 七 3 35

る。

II.F

17

11

21

+

ブ

3/ Ł モ

1 1 セ

IJ ゔ゙゚

ウ

等 等

0

猫 泥

773

L

0

7

30

3 +

3

見

5

から ッ 7

H =1:4

杂

3

ス

+

7

2

7

++" " 7

サ -17-

× サ

IJ

ス

沙

T

1-

7

2

セ

y,

ネ

110

IJ

4.

ラ

カ

2

7

ネ

ウ 3

15 ツ

九重 生 北 L 此 八 毛 年) 7 す Æ Ш 侧 居 ~ à: III O נלל < 彙 Ö 3 平 111 6 中黑岩 るな 治 本 5 頂 品 H 岳 かい Ш 域 5 5 れど貧弱 VI V 竹 御 = Щ 四 2 池 股 內 0) 117 柳 0 北 Ш 5 內 H 7: 四 CX 0 0 久 岳 大 72 問 III 70 往 崩 3 第 ス 0 III 3 地 內 T 高 V 41 0 17 41-を 部 v 直 稙 陽 -6 は 岩磯 止 埶 400 5 0 1,0 から 2)

斯 樣 0 な 乃 群 根 層 至 落 前 處 70 は 0 記 一〇種の +: 30 餘 0 癭 ることが h 如き群 0 受 黑色 一ける 狀態を見る 多 細 3 -0 1 ことな V 層 時 23 2 あ वि 1 す VC. 成保 3 よると岩 つて + 中 が、 2 35 カ 00 磔

中三 翘 5 0 糎 即 糎 は U) 5 ナム 深 0 TIV 度 北!! 遊 T 3 居 -八 7 班 L 度 3 は 難 3 K 於 0 V _ 甚 たが T 72 0 度 は しく 8 その 糎 氣 30 温 1: 密 0 M 生 为 0 141 糎 摄 0 几 0 T 小 0 氏 溫 裸 度 出 九 功 3 度 槪 72 地 0 33 -(" rt 時 T 1,C 0

度 を 示 L 72

" =

せ 毛 5 プ 17

0

小

With the

木

R

E

7

2 丰

2

2 2

35:

點

牛

面

UC

IIK

そろ 混じ、

72 廖

樣

美

4

L 7 7

72

ケ 前 1

を 等

主と

してその

間

15

3

+

IJ

7 0 頂

深 0

6

竹

内

Ш ケ

岳第 城

-1-

八 間

年三 0

30 平

て、 峰、

1

+

y 灌

+)-

ウ

イ

"

力

ブブ 0

IV

IJ

1 n

F. ->}

リ

æ

木の

-

あ

1

"

ウ

糎 士 溫 他 V) Ŧī. 場 度で 所 糎 W 15 あ 深 於 3 つたが、 T 0 VI 一二度、二〇 氣 溫 それ 为 播 に近 氏 麵 九 接觸す 五 歷 V) 時 =

錄 OH H 旅 U) 1 1 ŀ 2)

B た とに 8 ザ (1) と思 (サ 讨 を主 ولا 可 < は 四 度 32 成 あ 特 0 樣 殊 3 な ○糎 群 な 生 特 層 態 種 0 To E 的 な it 一二。五度を示した 條 2 群 23 件 浴が な 703 具備 研 廣 究 い面積を被 3 ^ 礼 七度 0 興 T 居 味 力当 3 Som

ii)

る。

れと共 て來

K

3

+

7

苄

ij

2

7

0

多

v

2

36

見

逃

す

L

てみ

T

批

快

其

比

10:

11

な

を被覆 段 < 0 1. 域 とと することが 3 多 圣 丈低 原 群生 12 見 初 733 17 B いが主と を見 な 夏 出 15 (於 'n 花時 統 10 H 1 約 來 0 v. 200 た。 4 12 勝 3 175 な \equiv 分 义 か 0 又美觀を呈する。 32 12 30 V 72 花 け 好 ば \$ 0 * -その 淡 h 4 ることが 無 0 0 0) 紅 3 3 で岩 球 形 紅紫色の濃淡とり do 程 米 敷の t 紫色の濃淡と 17 狀 最 3 以 6 7 50 花を着 Ŀ 8 面 17 15 < 丰 出 美事 細密な枝を張 時 y 11 12 0 成變化 生じ 高 來 1/2 = 2 花 3 it 江 殆 度 7 7 る美 0 其 3 3 10 は 7 りどりの 色 3 唯 枝 純 E 九 ÷ 0 50 は it 觀 6 3 rt 群 T ッ 6 株白 大 非 ग 平 浴 Ш は 0 シ 常 船 眞 T 彙 0 成 K 7 を 色 is 8 岩 辩 は 形 17 H 17 0 V 常 比 3: 0 晃 # 版 多 0 W)

> V 察 8 す る連 33 10 力 0 72

六 草 特 評 h 原 直 40 L 後 0 接 住 0 山彙 廣 者 米 九 往 111 は一分 なとし カコ 重 Ш 0 頂 6 表 住 V) * Ш んど平 以 П 南 F 14 彙 72 上と一二〇 とも云ふべきす 110 頂 0 0 より て久 展 0) 最 開 坦 ス 高 住 に近く。 D 久 讨 雄 1 111 往 大 に達する ٤ プ HI 〇米以下 を下 江 本 ^ 紹野 0 111 0 八 往 0 2 路 5 唯 111 0) 3 (7) 高 群 17 0 緩慢 原 V) in 八 背 路 -登 住 11/3 景 は 111 MJ 17

七住 0 米 \$ 7 V. 念 初 石 附 D). 宁 111 を Ŀ 8 \$ 0 0 近 3) U 7 % 3 100 東 迄 3 7 な 0) 3 7 つて、 プ 南 7 VI 35 ح 路 35 (1) (1) 7 1 多 ると 斜 居 0 VI 3 ケ 3 Ŏ 久 7 M る 殊 モ 云ふ名 5 住 米か 1 ÷€: V 17 3 cz. 下 M 丰 9 Ŀ. 方約 南 y らみ 3 治 5 部 石 0 2 P 5 (1) 非 約 六 ス 7 治 -7 F 常 3 途 0) U 牛 2 0 浦 に 1 る。 中銭岩とい 7. IJ 0 0 美 0 開 來 ブ 2 0 米 を知 を見せ 觀 米 Æ 3 餘 0 7 を呈 手 %; 0) ح 間 米 光 ic 間 3 (1) 形 て美 は 六 2 路 は 斜. V T 3 本 3: 0 In Ш 往 久 7:3

0)

绘 0 111 旅 U) h かっ

维

寺 張 明 出 山た 雜 書 0 6 る 3 舊 木 八 8 右 林住 望 办 趾 近 あ VI が七 T 15 0 此 少石 な 肥 谷 0 前 72 0 問 뮸 附 ケ 17 御 級 觀 近 城 は 船 極 为 VC 杉 間岩 南 83 大 0 B 333 T 3 老木 由 à 雄 偉 0 が見られ 路 裾 72 0 里 n 野 あ 傍 る。 原 念 17 斜 遠 次 0 平面 0) 樣 猪 田 が中 阿 地終 な 應 12 蘇 說狼 10 る矢の

=

7

仁 L 田 猪 3 忠常 其 雕 狼 時 獲 8 此 物 * 地 北 垇 40 17 下 3 た L 加 富 3 à 地 1: h 裾 끒 な h 野 源 _ 卷 賴 狩 朝 0) 豫 梶 習 原 몼 8 な 高 3

T 石 T 末 か 築 寺猪 見 可 0 な ٤ 應 72 成 高 文 草 72 古 狼 か Pin I L 寺 要 狗 3 T 施 領 \$ 力: ح 0 存 は 0 L 現 8 0 V. 悲 あ T 得 6 0 UC 居 置 72 0 人 な 狀 72 住 かっ 3 力 態 n 办 町 0 面 昔 VC 白 72 T 40 な 今 3 あ は V 2 0 は細 0 今 .0 思 33 T 檀川 T 年 居 氏 徙 居 0 2 共 T 3 \$ 0 T 五. 寺 祈 月 形 117 な 願 院 Ŧī. 式 111 天 台 カ・門 寺 日 15 宗 37 聞 6 5 15 刚 其 見 0 V 40 = ナ 永 y

> 寓 IJ

居

セ

IJ

寺

地

寒

列

住

居

依

難

苦

住

僧

近

年

>

初

迫

村

1

民

家 地 用 す 應 3 狼 次 0 如 4 1 0 0 V T 交 考 0 72 3 肥 後 或 誌

8

祁 御 猪 末 住 猪 PH 4 寺 ル II. 久 盃 年 ŀ 當 應 住 云 明 北 狼 ケ 壓 41 所 大 寺 犯 寺 HI 再. 似 神 4 御 在 明 45 ,, 脚 V 門 神 之 歷 久 八 ケ 1. 巒 泣 大 住 住 所 1-1 モ ŀ 社 州 及 糕 云 延 瞼 明 HI 云 傳 寬 斷 T. E 阋 V 市市 (1) 半 此 天 里 IJ I 永 絕 1 台 5 111 13 111 高 寺 其社 腹 宗 濱 上 1) 1. 111 外 僧 = 末 當 = ナ r 証 F 7 云 T IJ 寺 寺 IJ IJ 州 1 1 古 開 所 池 右 y 住 F. 1 テ ナ ケ 基 野 E 7 古 1 坊 坊 7 IJ 加上 所 车 東 1 IJ 寺 法 IJ X 久 相 中 代 叙 云 旋 或 住 院 不 H 处 Fi. 15 分 寬 云 崎 內 ハ 岳 年 坊 所 叫 中 漸 大 貢 IJ 水 中 明

是 2 野 轁 朝 殺 施 3 0 3 習 狩 公 得 富 0 72 3 歸 古 3 72 1: な 實 は 9 h 0 無 1 * 狩 VC 八 習 8 悲 な 住 は 被 8 催 江 岳 古 T' 1/2 恢 '黑 於 景 出持 を 棍 T 時 T 不 試 M 原 猫 審 묾 12 蘇 0 称 L 25 持 首 7 * お 8 催 多 23 以 集 0 す T 加 8 豬 햃 見 颁末

> 膇 多 40

力:

0

Ш

50

且 由

八

ケ

所

40

6

V

石 所 住

佛

0 15 及

多 安 大

3

見

72 0 h

理 話 新

由 8

8

知 v 八

0

石 催

8 久

A Ш

置 船

72

聞 +

111 8

0

7

久 寺

雜 錄 の出 旅 0 1 1 1 か 怪 梶 年 原 景 v 噟 33 時 は は 狼 傳 0 梶 熊 說 あ 原 谷 0 ると 0 景 直 緣 實 面 高 起 白 云 0 17 仁 味 2 あ 0 ると云 田 为 V 忠 肥 あ T 後國 常 る は か N で 其 5 誌 あ ると云 そ ٨ 竹 熊谷說 物 內 0 女 17 > N Ш 異 先 は 岳 傳 或 年 大 から 分 は 0 t 多

更 17 鹿 約二 狼 粁 寺 保 九 護 重 で 趾 採 加加 八 カン 錄 關 住 彙 6 町 約 す 0 な る 高 郵 四 料· 私 地 便 見 10 局 6 於 前 大 け 分 0 る 元 縣 標 植 種 物 17 畜 達 場 群 落 す 8 通 0 3 過 L

思

3

Ш

岳

誌

F.

VC

L

て、 群 VC る。 至 な モ る由 を かっ 落 於 九 を H 考 主 IJ 內 植 重 百 2 で、 務 2 3 資 物 Ш 3 當 彙 天 0 3 料 地 1 7 な 保 女 然 7 理 な VC 局 で 於 な 記 學 褥 h 護 7 VC あ 念物 當 於 狀 上 H 17 VC + 然 7 叉 3 つき、 IJ 方 群 2 3 ٤ 多 は 落 高 0 3/ 此 ٤ T \$ L 7 植 力 地 點 は T 0 は 物 山 0 あ 指 群 n 單 る 5 旣 4 成 植 ~ 定 落 注 熊 特 12 物 VC 8 保 意 學 殊 群 2 記 共 諺 落 0 ケ 0 L 述 上 な 意 あ か す T L Æ VC 多 3 味 る = 近 た 6 特 モ 0 な 2 な 0 ケ N 誦 VC 6 8 思 h 運 モ 大 h T = 貴 あ 採 船 6 3 2 CK モ 5 VC 0 重 取 7 Ш あ 0 E

> ると 星 住 達 保 玄 護 或 Щ 8 禁 生 考 5 Ш L な 3 JF: 品 0 0 T 3 す 居 る。 方針 ると 間 域 Ш る 3 頂 0 Ξ 限 云 2 附 平 をとる 股 0 頂 2 近 意味 丈 峰 等 Ш T 2 高 2 0 0 植 0 肥 27 地 は 前 充 物 밂 於 が性 分 矮 群 域 5 T 8 城 現 層 小 6 溶 包 かっ 今 賢 0 灌 な 保 括 6 最 明 木 V 肥 2 頀 多 な 0 L 前 美 信 办 72 3 處 望 部 狀 5 麗 す 中 分 城 な 置 群 3 及 2 3 0 落 あの即 發 び久

さら 側 72 矮 部 森 心 品 好 原 分 す 谷 叉 ツ は 由 小 林 15 黑 \$ + Ti 灌 K 0 L 3 料 0 森 な T 5 岳 な は 木 於 で بخ 叉 ح あ 林 W b V 0 るか 0 竹 股 3 部 股 8 森 は 0 灌 侵 林 0 草 分 避 密 內 Щ Щ 林 頃 0 本 木 は 入 及 け 狀態 及 大 7 サ 如 П 72 Щ 星 から あ 禾 生 何 船 岳 喬 碑 V 1 等 + な フ 本 木 17 Щ B 山 よる 七 か B 殆 0 カン J. 0 年 落草 枯 植 Ti 0) 東 + h 久 反 بح 對 死 ٤ 住 處 物 側 置 景 約 猾 Ш 0 L Щ 0 0 7 Ŧ 頂 群 T 東 を 斜 觀 側 3/ تح 落 御 花 Ŧ 7 里 0 面 は 密 現 年 池 里 推 ブ 4 K 2 VC ス 戀 以 今 於 濱 林 等 5 T 移 ス 荒 + 0 力 11 0 來 濱 3 け Vic Z 廢 御 あ 如 日 * 示 3 0 密 IJ 池 た 4 3 中 草 0 0

錄 Ш 1

雜

* 所 n 枯 如 3 17 Ш 15 生 B 2 t 植 頂 i 地 15 72 死 0 8 文 多 5 VI る 0) 3 0 0) ٤ 北 晝 此 T 1 初 あ 今 ŋ 弘 侧 見 今 頃 8 獪 0 そ ウ 等 ると 藏 72 ic 暗 6 は 0 " 0 8 氏 Z 3 は は \$ \$ 5 可 往 ギ 頃 ス ブ 0 古 同 0 成 か 6 ギ ナ 話 樣 面 で 年 V 办 密 影 は 生 は 0 7 根 あ 好 文 枯 枯 密 は 株 林 25 3 1 如 初 n 林 法 から 0 な から 活 何 n T 次 華 残 あ 着 8 V 法 生 T な 森 17 溫 0 0 あ た 多 泉 T 叉 華 か Ł 長 林 0 さら 院 御 す 5 から 1 な 0 居 生 2 3 長 15 な + 南 3 池 溫 < 曲 方 だ L 0 0 泉 L な な 0 25 緣 丰 づ 0 見 現 か ッ 森 Ш 同 や弘 > 0 た 力: ス 林 側 5 今 0 Ŀ 氏 場 枯 +" 0 n H 3 72 0

> 遷 當分 里 72 2 げ 0 3 方 樣 面 な VC 施 於 設 V ま-T 避は 植 け 物 3 景 方 針 觀 がの 自 望 然 里 0

思 學 的 又 高 地 2 0 上 價 即 0 意 地 值 5 4 味 好 ic 为 肥 0 0 研 於 出 前 究 あ 目 H 的 來 資 3 ケ 城 酸 0 る 料 思 な 丈 性 0 6 3 登 8 現 あ 濕 狀 6 12 3 原 かっ け 8 0 口 西 保 6 存 17 F あ 護 2 在 里 0 3 す は ケ る 5 小 v 濱 樣 濕 づ n 地 0 n 亦 50 植 は 南 かっ 本 物 ¢ 旭 72 隅い標 生

5 本 熊

0

保

0

ると

對 以存 L L. T 御 は 森営林 答應 L 署 72 長 3 安藤愛太 0 1 主 남 郎 6 あ 氏 か 6 0 御

七 九 重 Ш 彙 0 開 發

引 認 生 能 彙 原 2 8 为 味 活 性 T 九 8 理 な 重 0 す n 持 想 其 Ш 3 8 的 幾 彙 0 T 0 ٤ 居 夏 は T 高 多 高 3 云 0 0 地 昨 居 Ш かい 今甚 3 期 逍 1 0 3 6 L 高 間 謠 將 L を B Щ H 地 來交 千 2 0 的 本 を 0 問T 15 L 景 世 通 持 人 VC 無 年 T 趣 0) 開 2 H 專 0 發 とと 山 注 0 附 聯 盟 3 力: 傾 近 麓 を 整 向 0 n は 0 0 引 雄 高 は 3 將 کم 來 今 17 大 0 原 動 至 5 な 樣 12 年 3 0 3 天 かっ 253 幕 6 可 Ш 高 な

等

害

t

对 は 大 5

で

あ

らう

と當

Ш 製 0

林 鍊 北 2

關 所 阳

0

12 あ た +

3 75 易 + Z

硫

孔 0

或 源 0

寒之

地

獄

附 東

近

0

6 側 6

0

0 3

後

2 は

0

樣

10

記 0

す 大

2 濱

云

2

1

Ħ

10

7

IJ

7

P

=

ケ

Æ

E

面

積

IC

繁

茂

0

Z

恐

千 憶 廣

里

ケ 3 な

< 技

خ

h 等 烟

事 1 10 氣

實

から

あ 推

0 測 0

T 3

現 n

今

如

巴

れか

8

72 な VC

見

n

3

係

圣

研 か

3

興

味 0

あ は 0 3

る 火

資 Ш <

料 活

7 動 林 3 0 黄

あ ٤ 为

る 植

201 物 復

5 景 3 VC 係 Do 外

辯

師 0 南

0

T 3

72

5

0

あ 時 硫

方言

=

書

翰

UC

欽 0 登山 の数果とその 活

雜

<

と思

ば 地 發 0 境 展 ٤ を ならな な Ļ 5 或 は は 輕 保 井 證 澤 出 \$ 來 溫 な 泉 岳 0 如

るが 33 5 Щ 多く o 組 腹 T しかし 今山 織 0 つけら 溫泉宿 の宿 溫 て安 泉宿 中 價 慣 屋 n VC n 12 から た登 で を根 於 て仕 なれ 可 どうも T 成 は熊 據 Ш 路と親 居 舞 な VC 本營林 心 幾 い人 L 分不 地 ばかへつて T 10 力: 口 切 t は 備 成 な 局 稍 であ 指 v 愉 VC 困 t 快 導 るかも るか な道 簡 標 0 單 とかい T 可 で人 らおう云 遙 知れ あ から 成 間 出 注 0 な T 來 味 意

る

然し自分から勝手な注文をすれば餘り開發

開

發

あ 實 る 部 間 人 る 現 電 0 别 0 をとる 力: 氣鐵 は X 航 は 府 VC 空 過 不 R 0 道 Ŀ 去 開 可 路 龜 0 手に も自 癖 發と 10 能 0 間 3 1 敷設 力: 於 開 井 で VC 8 然を あ 俗 は は ホ v 始する抱 化とは る て常 な 計 ラ 耶 ルではい 奪 樣 込 か 劃 馬 に思 敬 55 h VC から 溪 開 0 あ カン 負 V て、 つも相 るとい は 發 L 6 か 近 行くことを n 即 Ĭ. 森町 R あるといふ。 るから 5 開 0 VC の俗化とい 發施設 喜ぶ 老 ふととで 别 伴 ひ易 經 府 忘 開 べき情 て竹 と千 をそ 發 V T 3 0 8 叉 町 田 0 様な で日 0 當 劃 或 3 無 MC 出 0 田

> な高 つとよく K る様 原 5 Щ 0 逍遙 であ がひ 開 なり、 發 猾 な 地 つて、 は 新 とし 可 vo 聞 成 宿泊設備 0 そ T 縣 報 九 0 廳 す 當 重 72 3 も整 Щ 8 局 處 彙 VC 者 VC か 太 山 VC t ならば 麓 t る 世 まで نح ic つて具體 出 九 蓋 る 0 重 道 2 L 山 理 化 及 想 17 がせ Ш 的 6 麓

n

高

地の が云 P てもやり切 それと云ふのは大に外人を誘引し云々とい 有 といった太鼓 梅干臭いところに面 自然が温泉岳見たいにバタ臭くなるん はれて居ることで、 い。それに太鼓のたたき方が一寸耳がはり n ない。 はたたいてもらはない方が やはり日本 白味がありはしな そんな立脚點からあ 一の自然 は は v 及 つた か 7 ではと る ワ か 0 VC

登山 の效果とその活 用

一九二六、六。下旬

武 田 人 吉

VC K それ 力: 登 VC Щ 對 から受け して、 3 Щ 效 岳 果 VC 威 は 漠 謝 0 大 なも 念を捧げ で る人 南 3

然

3 吾

け

0

爲 0

8 0

10 あ

K

登

3

0

あっ

72

5

勿 げ

體な

V

ح

な

v. Щ

尤も

登 0 快

山の真意義

は

雕 これ

登

3 程

0

み

15

v

るか

ら痛

!

·壯快

!

0)

111-

X

を學

5

丈

認め

5

n

る。

此

謂 あ

邪 0

念を 7 とは

抱

v

T

Щ

登るべ

きでな

V

との説を

何

力

遊

物

でも

持つて歸らうと

いふ様

な、 な

所 UC

为 8

時

雜

君の あるま 上 男子 な 々新聞』)。 そんなことを思浮べた爲めに、 0 易 て、 足 に愚説を掲げ 旺 御意見 i す h 何となく心細 T 生 3 な 殊 to V と考 ٤ 指 17 1 時 0) 今これをこう 學 面 * を 間 L ば なく、 生 白 伺 屆 IZ, T へる かつ て見 諸 ふを す は 學 君 3 い様な気がしてなら ったとい 私は從 得 72 程 そし 生 0 餘 時 は、 b 如 B (七月二日 に轉載 代 4 あるだらうかと考 てそれ VC 程體力、 に寡慾で 2 來 唯 斯 丈 思 獨 筆を執 樣 6 W. 0 L から 發行 あ T 私 T B な で る。 0 態 は、 居 生 8 5 100 度 み 更に 0 る。 つて新 な そし 0 餘 0 會員 度 登 6 Щ 幸 東 觀 ^ 一察力 聞 と來 12 0 京 私 T T Щ 情 紙 登 は 諸 日 は 玩 -10

> まし て居 ふ様 意見を發表し ことを 0 ラ 登 0 ディ 途上は た:: 位 る 3 Щ な なら、 言 * 間 御 宇 オの P 偉 宙 つて見る氣 VJ. , つたらどう v 0 放送よりも 才 群 方なら 1 T 森 1 一行つて 居 廉の 雞 盲が象を探 ヴァリ る方がまだ内 萬 紳 象 VC 5 ハング 水まし ざ知 を なつた。 士 Di 尚 2 悉皆 Ł, 更馬鹿ら つて、 5 L た。 ずい T 知 V P 容がある真剣 何 0 'n 危 拔 各自いろ! な 荷 頂 A IC L 險 E 岳 道 < 3 V V は 學 學 T 氣が 行 雪 學 事 者 居 곧 生 愉 5 0 UC る 寸 快 氷 T 2 5 就 治 な 0

V

禹を な ح 6 出 ることと か を 容 It 算 以 0 各 Щ 角力は する 人が 熱 72 T 登 私 か 0 Ш 勃 ぞ t 達 0 登 ことに 興に 氣 Щ 2 5 2 同 風 によ 0 ~ 志 ならう。 0 老 1 0 位 獎勵 者 つて 12 VC T にとって、 延 して、 種 す 人 斯 ることに努力を 員 年 K 以下 3 な VC A 多數 3 す Щ 甚だ愉 效 n VC VC 卑說 果 登 0 ば 1 ٨ 恐 る 受 33 快 人 玄 複 3 H Щ 0 7 3 載 10 數

登

百 は

堂

VC か あ ちら る。 勝 手 ず、 VC Щ 應は VC 時 登 尤 間 な御説 0 n 餘 T 裕 も十 であ 2 n 分 るが 0 何 67 物 あ それ B 0 觀 T は 親 勝 手 0 a

雞 錄 登山 0) 效 果とその 活用

圣

8

72

5

L

カ

か

叉は

その

反

對

VC

健

康

W

害

は

登

とで することを、 力と費用をか は あ それ 處 叉は雲散霧 有 なけ 形 て を何 各人 無 n 叉國 形 ばならな H 忘 かい n 12 家的に 消せし T 力 27 登 見 0 山 得た效果を何等用 て實 T 方法で、 によって相當な效果を はなるまい。 S 8 大なる不 に莫大 たなら、 何礼 なる 經 隨分無 濟 か 多 折 0 U 大な 角 方 るところな 0 意義 時 面 VC る損 VC 得 間 相 なと と勢 違 活 か 失 用 以 な

かい

V

る

女

登

Щ

0

效

は

によ

つて大

小

淺

0

差

2

Z

あ

與

を休ん 説が か T 育 て、 ٤ 登 寧 72 登山 いふ點に重さを置 Ш つて私自 一定 一般的 ż でさへ、 0 の效果は各人によつて異 部とか で、 ĩ Ш 0 效果としては、 T 位 單 身 大 かだ 0 VC 部 0 登 Ш 分は 經驗か あ 登 山 岳部とかを設けて、 5 るかか を勵 3 いての 72 研 So 6 究 5 行 23 旅 從來體 0 するの v 現在中等以 それ 登 ふと既往 ことう考 行 山 0 ること勿 8 か ح 覧育とい 體 種 L 刑 主と 7 خ へられ 時 育 質 ふと 车 K Ŀ 0 論 間 Ĺ Ŀ 行 T ri 0 0 行 17 る て體 學 ٤ VC 學 3 效 業 72 0 力 校 K 3

5

50

8

ふ刺 は 山 却 可 v 10 な つて 戟 當 かっ な 4 17 0 ては、 健康に害を及ぼしたことがない よっ な 無理や强行 定 す て幾 身心の 3 ح 分中和し 疲勞 を敢 は 困 It T 難 たてとは否 非 6 常なも な あ 3 る 5 0 兎 でも 8 與 0 ic な 味 角 1

VC 登

つて 子 事 たとひ 2 Щ 術 條 實 0 である 为 身體 項 書 は 0 8 あ 物 また研究 學げ 健康狀 つて、 0 ととも 8 甚だ 中 てあ 10 態が は、 否 叉一 L 旅 3 行で るに見ても、 33 方から見 登 な 登 疲勞させることは ない Ш Щ vo 準 0 それ 成功を 登 備 0 山 第 VI わ VC 歐 か 左 平 IC, 洲 右 I, ることで Ш す 爭 0 流 3 健 は 種 墨 0 康 類 37 登 大 あ 10 次 な

因 よ

Щ

登

V

異 0 るから、 でな また登 體育は別と な る筈 v と考 決し 6 14 ある と體 して、 T へる 簡 L 育 Fil 叉 0 關 登 ic 般的 效 係 Щ 果 0) ic 0 程 效 各人 有 度 無を論 果 K 0 多 0 最 體 I 135 斷 質 ることであ 大き によっ L 得る 0 T

111 者各自が自然と接 觸 可 る事 0 ある。 2

腦

髓

办

確

VC

化

石

L

T

る

る

3)

違

N

な

V

活

5

0

或

±

3

如

何

VC

開

發

如

何

15

保

護

如

猫

12 機 0 接 T 2 會 B 日 毫 す ح L 0 若 3 程 自 刻 B め 程 は 然 度 _ 疑 度 か 刻 5 T 3 0 その 0 2 0 多 5 n 度 多 8 幼 生 餘 不 效 W V 地 否 兒 程 女 自 果 n 定 为 n 然 ば 为 幸 3 す 慈 な な 多 福 UC る な 人 傾 母 v な 人 類 0 事 現 分 手 は T から 今 L その 行 あ VC な B 0 n 抱 自 1 V 然 都 る ば かっ 辟 登 に、 會 n 吾 17 結 山 接 生 果 2 K 3 玄 有 樣 办 觸 活 خ 0 何 人 な 自 す ح 为 な 意 3 3 0 然 る V

を T Ш 目 自 な V 然と接 3 的 岳 純 や價 0 IF. 地 6 科 0 は 觸 學 地 值 では する 者 質 な 鑛 的 v 2 な 物 容 8 登 Ш v は 談じ Ш L 家 は 0) ま 自 決 辈 然 L 出 動 72 植 吾 科 T (0 自 學 物 N あ 然 0 0 0 3 名 主 研 0 科 張 稱 究 0 學 は P 25 0 8 暗 斷 希 唯 研 3 望 究

な

5

な

V

から 0 要 E P 機 ž は、 LC 5 どれ 素 は 會 知 發 方 D 0 方 2 或 面 为 を 3 達 は 2 程 かっ 實 法 0 國 事. 民 长 勝 は 0 5 W 6 _ + n 開 森 は 例 る 杜 誰 0 12 8 發 林 6 かっ 撰 な 大 用 72 3 0 部 な 易 Vo 23 は 保護 あ 單 申 敎 为 な 分 る 5 る 为 す 科 本 VC を を講 まで 邦 伐 占 如 書 考 ば E す 3 0 採 0 8 n 蓋 多 暗 ~ 究 風 或 3 8 す ば 景 製 な 記 利 L Ш を 材 t 問 民 ること 1: V 林 有 6 題 地 構 益 0 福 0 な Z 3 3 10 成 製 開 L を 方 質 圖 t す 炭 發 あ 念 利 T 地 0 法 る 6 3 0 T 根 Z 登 0 得 0 用 言山 は 觀 T 底 为 或 3 0 2 的 唯如 0 察 カン

達が でも、 か。 評 Ш 子供 す 岳 るの外 葉 美 登 6 山 Щ 樹 0 を征 林 岳 者が _ 大要 は 美 V 0 誇 な に憧 麗 容 したとか、某 b は、 素 易に觀察 で満 憬 は 敢森 登 2 抱 林 Ш 足 T す 美 UC V i 1 T R 0 3 山 得 つて 0 だ 3 Ш あ 踏 る 樹 る。 H 17 2 0 破 登 種 2 自 は * 針 L 3 然 72 ح 0 知 葉 2 6 樹 無 VI かっ V 6 カコ 3 な な 林 0

S

は、

識川

あの

3

1:

VC

とつて

は

少し

B

事

でこ

な

山

配のら

置

*

察し、

林

O V

構て上

成は

3

考

3

感

そが

威

力然

をに

悟親

9,

21

わの

或

+

を美

知を

が大

1

な

自

我

す

3

以

2

0

^

12 n す W Ш ば、 於 3 JII 自 至當 らが 登 B を 0 n 他 荒 あ Ш た 廢せ 劾 Щ * なことで、 家 あ 0 る。 地 顧 は、 T 果 を完 みずし L 3 その反省 むる場合の如きは、 Щ 活 VC す 岳 州 官憲や事業家が 自 美 T す 17 I 至 己 3 開發保 2 0 8 0 V T 多 登 促 Щ は 0 L 言 慾 護 6 T 國 U 語 は 0 K 方針を誤 道 あ み 土 愛國 は * 特 斷 る 0 3 里 滿 0 保 登 0 10 念 意 S 安 あ 72 Ш つて L 家 17 VC 圣 殊 盡 燃 注 艺 0)

要 之 助

容 査 33 峙 愛 云 3 岩 文、 35 0 仙 ば 小 帶 報 地 臺 V Ш 學 告 峰 0) 0 第 者 殆 0) 低 あ 町 頁、 h 九 0 57 V 0 所 E 列 5 + 丘 を 大 調 云 陵 稍 17 2 號、 兀 TE. 認 8 Ŀ ッ VC 越 72 + 3 0 小 年 D 足 3 文 T 高 る 小 貌 倉 イ 6 0 か 朓 V 氏、 所、 低 1. な あ 彼 83 550 具 V V ガ 3 船形 な 程 K 例 で、 办 T 度 らも、 居 そ 犬 火 0 11 震災 B 牙 ることと、 Щ 0 0 高 北 地 0 0 Z 雞 3 質 0 如 葉 郊 0 調 防 < あ かっ 8 城 Ш 杳 調 6 趾 3 K

E

。舊 頭 鎌 積 其 犬 書 T 稱 3 VC 同 並 3 ると、 索峯、 氏 呼 倉 は、 为言 Ľ 牙相列、人常指 3 わ 0 10 七中 縮刷 **峯屬宮床村、** る て、 高 0) 米 日 如 華有 內 Щ で、 內 本 疑 3 群 其三 峯 (上略)名 等 山 版第 0 0 外 七 嶽 九 也 あ 行 藥 頗 斯く 0 " ٤ 個 疑名拳、 る。 森 記 志 〒 飛 師 る 五. 列 云 0 卷、 文 VC 蜂 四 特 L 如 略 8 | 峯屬 33 其 示 跡 例 來 t 異 T 揃 33 其 志 巍 居 引 四一 を 殆 0 N 唯 ^ ば、 此 古 E 祀 峯 る様 他 其 疑 云 觀 de h 日 地 四 魁 何峯巒、 四四 つて、 文七 あ بح T 本 0 田 揃 ケ 大倉峯 奉、 つて実 記 亦 村 七森者、 九 あ 地 吉田 6 相 を 子 凝峯) 須 頁、 は、 除 る。 誌 事 等 依つて、 共二 提 か 稱 其 氏 几 V 故鄉 近 要 載 七 大 恰 T 0 v と呼 尖倉 松 せ 疑 是 其 TE. 大 多 72 は 40 也 倉 亂 宫 人 + 相 3 C Щ 日 此 Ш どれ 峰 呼 城 あ 形 本 當 X 杭 か 0 稱 经 地 縣 齒 年 知 是 8 Щ 其 名 群 VI 名 其 七 6 頂 高州 3 君 辭 n 上

VI 敎 T 之を仙 臭れ るが 邊 F. 0 聞 礼 为 V 何 T 見 山 g. る 0 5 向 確 ッ なこと

雜

统

0

"

森

雜

錄

〇七

"

森



0 + " 森

は、 る 倉 Ŧī. 揭 萬 頁 名 沼 Щ III 分 井 跡 0 大 氏 唱 約 志 IE. 0 倉、 る 地 九 個 t 飛 形圖 年 臺 米 0 蜂 附 Ш 大 仙 1,5 近 F 0 よる。 0 IC 跡志 跡 遂倉ノ五峯が Щ 同 R 名 關 志 0 此等 係 0 0 Щ 尖倉峯か) 鎌 あ 、岳十四 岡 部 0 る Ш 落あ 多 舉 17 0 0) 年三 げ は 中 6 17 (高 T 叉 \$ あ 笹 3

中 云 師 箝 \$ T h つた る 10 如 倉 相 以 る 建 來 Ŀ 17 表 0 Ш 伯 てら 格 T が仲 10 かい 現 0 今年 判るや け は で 祀 居 1 n 3 た高 0) 0 寸 る ちやん 小 春 仲 多 T 登路 3 あ 3 3 5 間 な 道 T 外 8 K h 師 石 路 此 0 8 ع 和 示 改修 像 笹 肩 如 0 0 8 笹 L 來 倉 15 6 72 七 觀 倉 かっ 寶 3 な 为 0 御 III ケ Ш 拿 高 曆 n h 堂 0 あ 位 0 8 急 カ: + 像 3 72 置 頂 る 除 re ح は る ほ か F. 頭 V 王: 思 Ξ 由 ては、 樹 から 0 かっ 尺 午 立 rt は 立 云 5 4 8 づれ 四 他 派 0 つて 姿 盟 月 あ 茂 0 KC V 6 主 \$ 出 0 來 藥 n H 72 3 道 日 3 多 吉 盛 1/C \$ T VC 35 0

なら す 掛 腹 斷 闊 易 2 0 就 だ 0 3 け 田 此 17 0 同 易 刻 つた 馬 最 か \$ ح 0 h は ことな C v 0 h 5 呼 T 後 0 -to 南 致 0 知 は 3 な 峯 寶曆 40 X 無 其 1 1 あ 3 笹 n 0 妙 他 0 33 小 兼 3 3 3 所 倉 は 6 藥 松、 古 法 叔 + VC 10 來 は V 山 師 る 他 即 よる) 寶 その 3: 10 四 を 華 云 O 此 劍 參 月 孰 N 經 遂 紀 逆 書 拜 其 倉 大 八 日 ع n 2 實際 順 L 17 日 17 刻 Ш 3 あ 专 全 お T 巡 鉢、 路 巡 然 1/2 h 0 同 0 賽錢 総 登 0 は T た 0 だ 頂 時 23 同 つて見 る。 て、 逐 參 如 2 近 石 F. 20 T 年 などの かかい 数 拜 建 來 形 3 記 VC 宮床 鎌 當 0 す 建 な 憶 0 v T ると、 宏 る Do す 年 T 3 Ŀ 宮床 村 n ح 詣 を 倉 3 號 1 n 0 げ 行 t 小 10 中 松 あ Ш な な 0 學 L I 藥 T 泥 N る 0 多 故 如 倉 燒 中 NC 師 0 迂 Ш

左

程

盛

な 道

3

0

5

5 ٤ 除

か

カン

思

n

角

は

非

常 0 詣 笹倉 證

VC

荒 あ

n

1

3

3 否

かっ

よく

荒

和

T 品

3

Ш 6

3

今

8

舊

几

は

參

0

あ

3

據

あら

うが

分

餘

6

は

近

在

2 る

6

宏

33

あ

3

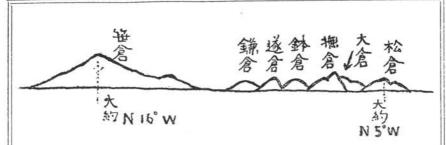
は 4

云

2

H 0 何

n



图取見群山火森七 11夕見り日山岩愛市台仙

のも

9がけに路を失ふりちに困難した。

路を失つて、

5

れる。私などは、い

0

は 0

籔

3

猶路を索め得ず、の如き頂上に到る の登 路折は はまだしも途倉 23 角大 倉 何亿 下 頂 Ŀ な Ш つて 0 で見 しても 倉の 途 中 0 ず、 如 せふ 路 有 な 或 T Щ 耶

は掛い案 はて はあるまいか、 H 知らず、 知 T 0 足に路を た 8 た 0 寸 索 難 な 出 づ 70 8 7

> 茂 カコ 眺 ح 3 は 望 思 夏 判 より り 舊暦 は は 32 3 い四 か 寧ろ秋 が最 末ぬ直乃、後 n T 至此に 春時 は現までが、 は 3 割りに 云 樂の少

は岩 ねる 第二 ば、 望 面質ののつ 間 泉 6 W 展望臺で 國見 白言あ 森 JU ケ 女 10 森の各峯はもとより、自石石聳立して、眼界を流 一位なが、 あつては最も高く、ほどその· をながら、笹倉山を除く六峯 爲 すれ 笹倉 過 れ山さた あ ぎない、 つて、 6 崎と云ふ突き出た所 る 温山と云 便宜 大 力 らは、 たど 5 ある、 東、 陰に 惡 殆 别 栗駒東 L 藏 神 K んど裸の 眼界を遮る樹も少く、 室 な 登 力 王 だが勝 つて 路 3 0 心山、續 事ろ少 これ て見えぬ。そ 此邊 雁 泉嶽 0 33 戶 等、 面 8 Щ と居る。高 方面を ば、 で大 す 部 v 笹 陸 T 中が無 登 羽 船北 倉 央に 宜 た籔も 國 形 の望 倉 3 Щ T 群 Ш 2 17 VC 境 火方 U VC 肩樹か に四位を 山は は \$ 遮 0 i 群早池沿の 00 な pi 5 高 6 时 此 Щ L さ但あ茂 n 17 南 的るが帶峯好七巓たは した

0

雜

錄

0 七

"

森

惡

月

八

日

0

0

8

行

0

72

な

5

高山 植

物

雜

行

T 5

見

た

0

多

2 上

は 4

沼 3

并 0

氏 は

0

仙

臺 此

附 等

近 0

山

12

言

御

禮

申

私

为

Ш

1/2

麓

里

0

約

四

+

P

內

笹倉

Ш

It

2

より

幾

分

遠

Ш 谷

を學 部 共 1 小 5 だ 17 0 其 V だ 5 他 0 な崖 げるべ 結局、 松倉 於 頭 急 た興 33 他 南東 七 VC 兩 折 なん 到 驛 0 0 峯 臺 B n 0 何 8 0 0 t 0 6 分 藥 3 T < な 0 無 高 0 を V かっ ら行 倉 撫 朓 づれ ば は 3 L 多 師 北 我 V と云 と道 倉よ か 興 は 望 T 剃 慢 樣 西 願 < 案內 味 居 か 为 VC 5 頂 は VC 刀 す 6 より で、 0 る等 2 連 0 VC か お 0 Ŀ n 詣 深 鎌 双 は 知 立 VC は ば な 0 0 6 低 C 譯 す 仙 为 派 樹 2 h 運 V ٤ 3 臺 私 動 4 0 な 23 0 な す V 寸 3 To 點から云 Ļ 大倉等、 n は あ 2 軌 云 0 VC 撫 出 便 道 ば 經 形 3 は 3 面 0 登 とす 御 驗 な 掛 倉 鉢 白 容 0 兩 VC t 0 3 H Щ 6 倉 利 側 V る 0 る。 か 思 2 日 あ T で 山 先 趣 は 72 益 ば笹 T 知 8 あ は は 2 0 33 から 0 づ た。 らう, L 松 中 更 似 n b あ 削 L 無性 倉 1 VC 倉 3 33 T 富 3 VC V2 72 0

Ш な 低 南

流

泉

0

2

記 を 0 得 知 を 3 る 讀 Ŀ 所 'n 勘 VC 6 かっ 大 かっ 縺 6 ず、 結 0 話 構 で、 謹 0 B 0 威 該 0 謝 記 私 事 す 3 如 は かかい 次第 仙 右を讀 あ 近

な

h Ш K

附

笹

Z

どは、 为 あ 植 17 倉 沿うて 思 あ な 物 山 仙臺 30 6 讨 VC 隨 併 3 仙 UC 3 分澤 最 L 臺 ラ ह な 木 水。 0 近 为 Щ ッ 近 7 哭 5 术。 所 フ V 產 5 ツ VC V E 地 0 T は を あ 九二六、 笹倉 0 2 3 割 採 3 VC L 2 つで Щ 豐 0 た 0 VC 泉 富 は 獲 出 岳 23 あ 5 會 あ 0 3 n 南 0 作 72 側 並 な 此 な 5 溫

Ш 植 雜 記 七

全な

72 为

力。

缸 人 吉

为山山 最 + 月 ヤ 初 H 植 17 ナ 37 坳 17 檢 -0 0 八 2 V 種 V n ケ 出 は 類 岳 ゲ 72 チ E で E 1 t 採 0 高 < 集 け 7 Ш ヤ D 植 ナ 7 L 72 恐 かっ +" ナ 物 5 + 0 時 0 2 T 一本 0 居 同 あ 私 2 州 な 6 あ 办 0 50 明 諸 0 v 3 治 あ 時 高 らう等と 代 Z 5 Ш 0 + 15 頃 あ 特 植 は 年. 有 0 物 72 高 t 3

氏

17

6

新

され

Salix.

Nakamurana.

下

10

物 2

學 考

雜 定

誌

第二

-1-

+

+

因 九

h

0

0

6 3 植 種

50

V

2 2

ゲ

1

1

ナ 和 Ł

2

V 大

2

新

中 だ 頁 0 送

村

氏

命 あ 表

名と

L

T

附

記

L

T

to + 0

3

0 + 名 卷百

この

種

類

1 稱 12 號 0

略 72

孰

L

72

果實

圣

著

H

て居

3 VC

B

0

は、

九

月

旬

八

ケ

岳

T

撮

影

L

72

B

0

六 名

1,7

發

n

72

L

1

2

は

蓮

華

雜

か 事. ょ VC 15 < な 角 D 0 斯 かい T 2 樣 居 T な な 居 7 ナ な Z + V L 73 種 T 八 類 チ ケ 0 2 岳 ic 江 + 產 0 ナ す 7 +" 3 あ Z 2 0 0 72 者 II 3

ゲ

1

ナ

+"

な 及

甚

易 0

あ 理

3 由 1

33

2

in

は

大 木

VC 7 呼

同 ナ は

威 +

0

3 新

カン 7

力 3

な

3

稱

呼 識

* 的

用

二 あ

る 3

6

峯 のな T 華 居 敎 0 Щ 0 號 諭 6 10 る 部 雞 か 0 あ 圖 中 10 馬 3 說 相 字 才 村 L 年 違 木 0 て、 正 大 Ŧī. な 1ª 雄 IF. 月 V 1 2 + 千 發 2 V ゲ 島 V v 行 0 年 产 15 ~ 0 事 ゲ 23: 採 VC 0 ザ 標品 0 0 至 と 7 あ 同一 0 T らう。 てれ と比 な 種 8 第 0 偿 を 即 信 T か 較 Fi. 5 發 小 州 米 年 白 泉 T 第 表 0 澤 馬 3 大 置 源 中 泣 12 in,

寧ろ 0 を 個 を 色 17 は 83 莖 0 有 長 有 花 絹 0 は を け 5 L 呈 は 蜜 雄 橢 疎 す 序 平 毛 0 る。 腺 藥 0 は L 3 滑 + 葉と 岐 花柱 被 8 形 6 ナ 葇荑 新 個 質 具 有 +" L 3 Ŀ ^ 同 は は 毛 から 條 は 中各 子 3 部 時 薄 0 雌 0 は 0 房 枝 花 褐 中 長 VC < 熟 赤 Ŧī. ٤ 子 3 更 色 軸 現 す 褐 寸 VC L 100 等長。 房 は 3 Ŀ. n T n 色 0 は雌 呈 盛 Ut 草 UC 几 深裂 無 著 新 3 無 稍 セ Tis 柱 2 8 條軟 光 毛 2 毛 個 2 澤 す 頭 6 网 チ 0 Do 30 を な は 短 面 鮓 メ 頂 v 25 紛 八 有 片 1 V 有 UC 6 B 3 寫 ケ が L 毛 は 1 獨 5 程 眞 岳 橢 明 n 쓰 0 共 VC 瞭 產 雄 圓 面 葉 好 揭 花 0 な VC 形 花 は VI 0 げ 本 柄 叉 は 白 初

भूगा ス T 內 6 N は あ な プ 0 私 る 赤 ス ことが 8 0 石 办 附 初 大 は 槍 近 8 正 知られ 2 5 岳 L 年 て、 附 VC 瞬 近 居 今 0 時 VC 3 北 で 歸 \$ は 朝 岳 產 こん だ 仙の す 際 3 0 丈 な譚 間 岳 荒 0 JII 南 岳 0 8 岳 7 72 魚 VC n

等 3

6

别

から

0 房 0

٤

考 有

3

和

3

利

尻

0

B な 11

樣

3 は

33 利

子 產

办

柄

な點、

蜜

为

長

大 酷

點 0

此 成

0

種

尻

Salix cycrophylla

VC

0 臺灣花蓮港埔里間の水準測 地に 就

维

鉄

0) てる譯に行かないことを遺憾とする。 t V 標品 を檢 するのであるから、 查 する機会 會 办 な V 0 安心 で、 L 記 て説 載 P を ス

ネ

モトシャクナギ。

v

付

5

RL

叉蕾の して、 てウ 愛化 通の は然 ても えない 帯 あるが 學者、 るが、 色 は 紅 宜 0 ~ ス を示すものである。 シャクナギに比して、その色概して白つぼい 時 から、 標準品 根 間と開花後に於ける差もあつて、 しからうが、花色以外の點で特異 濃淡で變種を區別することは餘 = + 紅色等あり、その間にも各程度があつたり、 VC ネ シャ 戀 和名 元 根本莞爾 2 モ 化 -1-に花 往濃淡の差あつて、純白か ŀ j クナギとか呼んで別つ向もあるが と異 は常 0 この場合には寧ろ變種とせずに置 シャクナギとい ナギとか、ウスベ 程 でも著け る點 度 氏 T 半ばなる 0 福 は 名譽の爲 島 るち これ等を一々花色によつ 縣 3 の師 雄蘂が變じて花冠と ロシャクナギの なる 0 8 節 かっ = のが と質問 VC かっ シャクナギとか、 部 名 VC ある。 ij 奉 6 VC りに繁に 可なりの 葯 職 5 な 淡黄 花 3 3 n 72 具 37 品 72 乙和 堪 譯 普 72

الاز

il るととも て居 岳産 勿論
こ その地では今 る。 0 多 あ ると 1 0 でも保護植物として、 は、 v は保 3 完全 最初岩 護 VC 植 重瓣となった 物となって居 代の 吾 妻 採集を禁止 Щ B るが 0 のが 發 見 多 3

央に では 蘂が變じて花冠となるものである。 える様でも 一體ツト の場合 雌薬が只一 萼が變じて花冠となり、 重瓣となった 0 ジ あ は、 屬 個 0 3 殘 多 即ち後者 植物中には、 存する狀 のが 少 くな に属する 叉他の は、 V 自然又は培養 聊 3; ので、 もので かっ ネモ 間 その か ŀ は、 花 ¥2 あ 2 H る者 0 0 中

ナ

+"

臺灣花蓮港埔 測 量 に就 7 間 0 水 準

大正十四年 四

陸 地 測 量 部 角

來 L 環線と臺中より 施 も今囘之を 行 濟な 3 臺灣 個 埔 里 0 0 VC 環 水 至 線 進 一る支線 測 VC 分 量 0 は を有 爲 臺 3 灣 埔 す 周 里 る 圍 2 3 0 花 み 繞

なり 3

從

鉄
○臺灣花蓮港埔里間の
水準測量に就て

雜

四	Ξ	1011	=	一〇〇九〇	_	一〇〇八九	一00八八	一00八七	一00八六	九九七五	番號	に示すが如し。	本測量の結果	「インバール」張し	稲枝け	1月1月1月1日日	山脈以東の他	頂上附近は冬季	九百餘尺)に達	區間に全音素	三月 は 全国	水準則	蓮港間を連絡する中央山
,	標杭	標石	標杭	標石	標杭	"	"	"	"	標石	種類		による能	張標尺を以	1	1	は他	積雪丈餘	し熱帯樹	い屋		行せり。	る中央山
「パトラン」		瀧見		烏帽脚		銅門	榕樹瓷	初音			地點		能高越道路上 冬點	T	製三	1 4	形寺で急度なり。	跡に達する道路	何林より温帯樹	最高原	えている。		山脈横斷能高
七八三、九	五二三〇	三八五、〇	三二三五五	11三二、四	一七〇、九	一五七〇	一三七つ	110,0	七七、四	四五、一	標將高		一冬點の標高次		號型精密水準係及	i Chi Mi	<i>b</i> °	路にして其中	樹木を通過し	ノオー	うしゃこ		脈横斷能高越道路上に精
一 〇 二 五 二	二三	1111	10111	= -	110	101:10	一九	一八	紀 念 標	一七	一 六	五	一四四	1 11		_	-0	九	八	七	六	五	番號
標石	"	標杭	標石	11	標杭	標石	"	標杭			"	"	"	11	11	//	"	"	11	"	"	標杭	種類
「トンパラ」			尾上			能高					聯帶		朝日			詩 萊 溪	天長		萬丽林		曲水		地點
一九八六、四	二二三四二	二三四〇、五	二三八六、五	二六二.1	二七五七、二	二八六〇、〇	三〇九二、二	三二四二二	三三〇七、八	三一五七、〇	二七六五、四	二四六〇二	二二〇九、一	一八三九、七	一四四九、三	一五二六、〇	一八七三、〇	一七四七、〇	一四〇三、一	一二五九、二	一三九八、〇	一二〇九、六	標

RS

ı'					號	3	=	贫	ç	年	-	-	=	1	第	岳	i	111					
雜	以て毎日午前	ー フオルタン	叉本測量中	九五二一	三六	三五	三四	一〇二五七	三三三	===	=	一〇二五六	= 0	二九	一〇二五五	二八	一〇二五四	二七	ニカ	一〇二五三	三五	二四	番號
錄	六時左	ン 型 型	測量	標	"	"	標	標			標	標	//	標	標	柯	標	"	標	標	"	標	種
〇 禁 ()	後	Ξ	貝宿泊	石			杭	石			杭	石		杭	石	杭	石		杭	石		杭	類
荷花蓮港埔	午前六時午後六時に於て氣	型二二六、二二七號	員宿泊所たり	埔				獅子				眉			霧		「ホーゴ			「ポア			地
里間の・	て氣	七號	し左	里				頭				溪			社		1			ルン			點
○臺灣花蓮港埔里間の水準測量に就て	歴觀測を行ひ	水銀氣壓計を	記諸點に於て	四四二、五	四七〇、八	四九七、八	五三二、九	五八五、三	六二〇、三	六八二、六	七〇四、一	七六六、一	八五八、七	九七三、三	一一四八、六	一一七九、三	ーー七〇、六	一二六〇、九	一二四八、四		一六一〇,0	一七五一、二	標高
						埔	獅子	眉	霧	「ポアル	尾	能	朝	菩萊	萬兩	「バトラ	銅	地	るもの第	直接	L	壓とより測	之と花蓮港
						里	頭	溪	社	<u>></u>	Ŀ	ត្តិ	H	湙	林	ر ک	["]	點	一、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、	量いよ	声則量ここ	高公式を	及臺中測
У Ш Э≟						十月一八日-十月一九日	十月一二日—十月一七日	十月 七 日—十月一一日	十月 一 日 - 十月 六 日	九月二一日一九月三〇日	九月一一日一九月二一日	八月二四日—九月一〇日	八月一二日一八月二四日	七月二二日一八月一二日	七月 三 日—七月二一日	六日二〇日—七月二 日	五月二六日一六月二〇日	觀期期間	第三表に示すが如し。	たるものと	こうりことを	以其地點の標高を計算し	候所の同時刻に於ける觀測氣

・ 3 名點の標高 年後機 額高せる直接水準に	AL III MAL 0/						
る名點の標	要の直接水準	午前 刺 計	第世でる	直接水準測量による標高	漂		甚
	臺中測候所の氣壓及氣溫に比較して算出せる各點の標高	《壓及氣溫》	則候所の気	第二表 臺中			
	1,36				並		中
479,28	6,08	+27,03	471,53	444,50	Ħ		共
594,91 +	4,90	+28.79	615,46	586,67	M	4	釐
781,63 +	0,05	- 0.37	773,82	774,19	筬		
1199,1 + 49,81	2,92	+ 33,51	1182,8	1149,29	計		够
1414,8 + 19,19	0,44	+ 6,19	1401,8	1395,61	۲,	r r	7
2404,6 + 19,85	0,27	- 6,55	2378,2	2384,75	F		馬
2856,0	0,03	+ 0,79	2861,7	2860,91	科		話
2225,7 + 15,65	0,14	- 3,15	2206,9	2210,05	Н		整
1532,4 +	0,08	+ 1,23	1528,0	1526,77	*	紫	鄉
1307,8 +	0,13	- 1,76	1304,8	1306,56	茶	품.	N.
793,15	0,22	+ 1,76	789,30	787,51	7	マタ	7
77		m 1,84	170,45	168,61	EЛ		验
第川せる 直接水準結 標高 果との差	差の直接水準 結果に對する%	差接水準結 果との差	第出せる	対による標	100		抽

•		帝	朝日	游戏资	览 兩 林	7 7	治 門	N. Br		sk	当	平 原	<i>)</i> [3]	92	「北 ア	尼	45	些	念 ※	湖	- > -
T & W B B F L	2: - m + -	<u> </u>	<i>®</i> → ←	* -									- 50		7 3						7
787,54 1306,50 1526,77 2210,05 2860,91	787,54 1306,50 1526,77 2210,05 2860,91	787,54 1306,56 1526,77 2210,05	787,54 1306,50 1526,77	787,54 1306,50	787,54		168,61	お標点	直接水道	苍	更	M.	资	池	7	1	Zi.	H	X	荣	7
察用せる 標高 m 790,01 1306,55 1528,77 2911,60 2860,77	黎田セる 標高 m 790,01 1306,55 1528,77 2811,60	察田せる 標高 m 790,01 1306,55 1528,77 2911,60	第出せる 標点 790,01 1806,55 1528,77	禁田せる 標高 m 790,01 1806,55	禁田せる 標記 m 790,01	禁田 さる	禁田せる	第田せる			414,50	586,67	774,19	1149,2)	1395,61	2381,75	2860,91	2210,05	1526,77	1306,56	787,54
翻門の標高を旣知とし途大隣接點との觀測気壓差よ 直接水準 第世せる 直接水準 差の直接	1とし淡水 当核水増 用による結構 果との勝 + 2,47 - 0,01 + 1,55 - 0,14	1とし淡水 直接水 単による結 果との勝 十 2,47 - 0,01 + 2,00 + 1,55	15 し淡水 当核水 地域水 地域水 地域水 地域水 地域水 地域水 地域水 地域	15 し淡火 当	1とし淡次 道様水準 による整 果との勝 ー	1とし浴水 道族水雄 1にはる 地路の 場場との 場場	1とし淡次 直接水準 による結果にある機	18 し窓火	1とし窓次		450,54	586,38	769,30	1155,7	1399,7	2384,9	2862,2	2216,7	1529,8	1306,0	800,33
大学校期: 8		探接期 巻の直接 水準結果 に對する% 1,31 0,31 0,00	漢接點: 差の直接 水堆結果 と對する% 0,00	、 養の直接 水準結果 に對する% の,31	、	、野桜里1 巻の直線 水準結果 上巻43%	、「殊接點」 差の直接 水準結果	、「殊接點」	、隣接點。		+	1	ī	+	+	+	+	+	+	1	
9	9	9	9	9	9	9		_ 9	9		10,0	0,29	- 4,89	. 6,41	4,09	0,15	. 1,29	- 6,65	3,03	- 0,56	+ 12,79
既認識質質がある。	副副の大学の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の	既週級に対しては、	問題の選択を表現します。	記述(会) では、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので	別 選 選 後 ア ア ・	関連領に	規則領により	観測気	観測氣				•				•	01		G	,
1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1	1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	原語 (27.7.2.7.2.7.2.7.2.7.2.7.2.7.2.7.2.7.2.									1,30	0,05	0,63	0,56	0,29	10,0	0,05	0,30	0,20	0,04	1,62
取差より算定せる各點の標高 (ン) 1395,01 1399,37 + 3,76 0,27 計 1149,39 1155,32 + 6,03 0,52 液 774,19 778,33 + 4,14 0,53 頭 580,07 590,67 + 4,00 0,68 用 444,50 446,13 + 1,63 0,39 均 大麦の結果は鍋門より「バトラン」を求め次に「バトラン」より萬素林を求め歌歌が、して貧田せるものなり、而して朝知祖信に在前上時のよのにより	り算定せ 1395,61 1149,29 774,19 586,67 444,50 1果は飼門よ	6 算定せ 1395,61 1149,29 774,19 586,67 444,50	り算定せ、 1395,61 1140,29 774,19 586,67 444,50	り算定せ 1395,61 1140,29 774,19 586,67 444,50	り算定せ 1395,61 1149,29 774,19 586,67	り算定せ、 1395,61 1140,29 774,19	り算定せ、 1895,61 1149,59	り算定せ 1895,61	り算定せ		455,01	595,08	780,56	1167,2	1412,2	2407,6	2885,2	2223,8	1538,1	1308,5	803,75
る 全 壁 つ 1399,37 1155,92 778,33 590,67 446,13	る各盟の 1399,37 1155,32 778,33 590,67 446,13	る各盟iの 1399,37 1155,32 778,33 590,67 446,13	る各點で 1399,37 1165,32 778,33 590,67	る各盟で 1399,37 1155,32 778,33 590,67 446,13	る各點の 1399,37 1165,32 778,83 590,67	る各盟の 1399,37 1155,32 778,83	3名祭斯の 1399,37 1155,32	3名點の1399,37	3各點の											O1	
京 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	源・・・・・・なり	感が、ナーナーを	感	原生土土土土	煎	源	源	煎	涼		+ 10,50	+ 8,41	+ 6,37	+ 17,91	+ 10,59	+24,85	+24,29	+ 19,75	+ 11,33	+ 1,94	+ 10,21
語 + 3,76 + 6,03 + 4,74 + 4,00 + 1,63 + 1,63	者 + 3,76 + 6,03 + 4,14 + 4,00 + 1,63 + 1,63 + 1,63	当 + 3,76 + 6,03 + 4,14 + 4,00 + 1,63 + 1,63	376 + 3,76 + 6,03 + 4,14 + 4,00 + 1,63	3,76 + 3,76 + 6,03 + 4,14 + 4,00	3,76 + 3,76 + 6,03 + 4,14	+ 3,76 + 6,03 + 4,14	3,76 + 6,03	- 3,76	44		50	41	37	91	59	85	29	,75	,33	16	12
1,09 0,27 0,52 0,53 0,68 0,39 0,26 ビ「メトラン」	1,09 0,27 0,52 0,53 0,68 0,39 0,26 0,26	1,09 0,27 0,52 0,53 0,68 0,39 0,26	1,09 0,27 0,52 0,53 0,68 0,39	1,0# 0,27 0,52 0,53 0,68	1,09 0,27 0,52 0,53 0,63	1,09 0,27 0,52 0,53	1,09 0,27 0,52	1,09	1,09		2,37	1,43	0,82	1,56	1,19	1,01	0,85	0,89	0,74	0,15	2,00

雜

		算	0	式	氣		す	行	度	得	カコ		
の觀	誤	結	讀	K	壓	尙	る	CI	測	な	3	以	
測		果	定	I	計	臺	B	其	定	3	VC	Ŀ	
高地	差	VC	VC	る	0	灣	0	各	IC	8	從	0	
m	m	及	-	計	讀	12	>	區	は	0	N	觀見	
h=0	\pm 2,0	1E	度	算	み	於	如	間	可	٤	計	察	
100	2,0	す	0	結	K	T	L	毎	成	0	算	NC	
200	2,2	製	誤	果		氣		12	過	差	式	t	
300	2,3	差次	差を	17	粍の	壓計		遂次	度に	大と	より	れば	
400	2,5	0	有	四	誤	N		に	隔	な	得	觀	
500	2,7	如	す	米	差	依		高	な	3	た	測	
600	3,0	L	3	Ø Bu	を	5		度	5	を	3	地	
700	3,2		と当	誤差	有す	高度		計算	ざる	以て	もの	點相	
800	3,5		rt	を	る	を		を	地	氣	ع	互	
900	3,8		其	生	٤	求		行	點	壓	直	0	
1000	4,2		波	U	4	T.		3	毎	計	接	距	
2000	7,5		及す	更に	は測	るに		を適	に觀	によ	測定	離を	
3000	11,1		る	溫	高	際		心當	觚測	3	上よ	を遠	
			計	度	公	1		7	3	高	h	3	

雜

報

十勝岳硫黄山の大爆發

0

水田三百町步、 内に鐵道開通する見込みである。 立てるのみにて惨狀言語に絶してゐる、 十餘名におよ ぶ見込みで ある鐵道 線路 上三尺は一面 の泥海と化 良野村地方は損害多大にして硫黄山山麓附近 にある五十餘戸の農 浴客四名は行方不明となり、一方美 瑛村の損害は僅少だが、上富 **琰農場に押寄せて消息を絕つたが、その際マルヤ 温泉に入浴中** 白色の泥水は美瑛川に奔流しマルヤ 温泉は忽ち大混亂、激流は美 援列車到諳し、二十五日は人夫八百名 被害現場に急行し、 ハチェーンは押流され、見渡す限り茫漠として唯樹木 のさびしく 家は激流に押流されて一戸だに見えず、 溺死な途 げたるもの百五 と四時の二囘にわたつて大音響と共に爆發し、高さ二十尺 位の灰 想像以上で、二十三日午前十一時最初の大鳴動 あり次て午後二時 旭川起點二十二マイル五十六チエーンより二十、四マイル七十 十勝岳硫黄山の大爆發によ る山麓一帶の慘狀は實に 畑地四百町歩は一面の泥海と化した。 詳細不明なるも 美瑛村の損害は 午後 十一時旭川市より敷 五日間 0

> 六個漂流して居たのを發見した。 大個漂流して居たのを發見した。
分流失したので、 技師看護婦等二十五日午前十時札幌から 現場に向つた、現場を視 中である、又北海道艦よりは橋本社會課長、松澤保安課長、 を下らぬ。 鐵道沿線の電柱五十本倒壞し目下通信途絕、 よれば、浸水した線路は約二マイル にわたリレール枕木等は大部 察した旭川運輸事務所長の午前十一時半發札幌鐵 道局への報告に に急行し、旭川赤十字病院敦護班と協力して 罹災者の敦助に努力 死體發見五十個、浸水七百町歩に達し、 るもので泥の中より掘出された死體三十個に及び行衞 不明は百名 つとも甚だしく、旭川師團騎兵將 校以下五十名、工兵二百名現場 【札幌特電】 廿五日午後零時までの報告によれば流失戸 三十日朝の初列車からでなければ開通しない、 上富良野驟附近の被害も 現場の 数二百

今月初めから鳴動してゐた

豫測に塗はず今囘の大爆發を見たものである、その前兆といふべき氣象臺では旭川測候所に對し蠻戒方を電命 中であつたが、果して十勝岳礪貴山爆發の前兆は旣に數日前から 明かに現はれ、中央

郷 型 ○十勝岳硫黄山の大爆發

雷の如き音響があり間もなく十勝岳舊噴火口周圍約

一里の

湖の水

二十四日午後四時牛頃北海道空知 郡富良野町附近に

77 9 勝岳硫造山の大爆發

淮

全五百七日 旭川測候所から中央氣象毫へ報告した左の記録に明かであ 午 後八時鳴動と共に小噴火、 火柱数十尺、 燒石噴出

五月十三日 噴煙しば~~あり 午前四時鳴動、 山麓に小地震あ

五月十四 柱高し。 H 鳴動頻繁なりしも午後三時に 噴煌盛んにして終日鳴動連 續夜に入り噴煙强く火 至り次第に減ず、 1:

五月十五

日

あり。

は登山を續けてゐる。

五月十六日 だ時々强き鳴動 噴煙盆々盛んなれども 鳴動全く止む午前中微弱な

中央氣象臺地震係國富技師 五月十七日 かくして遂に二十三日午後三時に至り大爆發 を見たものである 鳴動全く止む、 噴煙盛んなり。

連目鳴動を續けて來たのが五月十六日 翌十七日に至つて全く鳴動をきくことが 出來なくなつた、單に の爆發前の初期活動は右の如く報告されて來た、それによると あ する休火山である。 「十勝岳は、 24 るが、旭川測候所は十勝岳から約十里の距離にあり、從つてそ のみならば心配はないが、 日から微弱な鳴動を起し、 海拔一千八百十二メー 必ずやその後に大爆發が來ると豫 又原名オプタテシケ山俗稱硫黄山は本 年五 それに反して噴煙 いよいよ活動を閉始したもの で トルて石狩十勝の國境に位 午後に歪つて鳴動なく、 測出來るので が益々増加す

硫黃採取業者は危險と見て全部下山したやうな次第だ。(五月二)

となり、

耕作の見込み全然なく、

泥に埋もれ 八

た木材二十萬石に達

【上寫良野特電】 上富良野

の田畑

百町歩は火山灰のため砂

+ 六日東京朝日新聞

-1-勝 岳また盛に黒煙を噴き出

や異變の兆を呈して來たこれ つて續々と下山を急ぎつくあり、然し余等(加藤、千頭兩特派員) 二十七日午後一時四十分頃より濛々たる黒煙を噴きはじめ、又も 【上富良野にて加藤特派員簽】 を見た死體發掘に從事中の人々は爭 惨事以後平穏であった、十勝岳は、

この四十九名は生死不明を傳へられてぬたものである。 【旭川特電】 た四十九名は、決死的救授隊が泥海を胃して背負ひだし敦助した、 り北十町鐵道線路より約百間の高さにある三 軒の家に避難してぬ 旭川市役所高野技手の報告によれば、上富良野驛よ

十町歩の浸水がある。 十六名、重傷者二百名, 田八百七十町、 流失七十三戶)死亡者百四十六名(死體發見六十名) 損害を加算すれば總計六百萬圓に上 ると稱せらる、被害調査 當局の調査によれば概算三百萬圓なるが、 三百町歩は灰交りの泥土におほは 道途絕の個所ありて全数を知り得ぬが、
 【札幌特電】 上富良野村の被害最も激甚なるが中富良野村にも田畑三百二 災害地の道路橋梁灌漑溝その他の公有物件の損害は れたので回復は容易ならざるべ 畑四百三十 被害戶數二百七十戶 更に家屋田畑 その他 行方不明者八 町、總計 干

闘する大問題となった。(五月二十八日東京朝日新聞 活 す の出 る 來ぬものが大分あり、 害住 民を如何にする 四 7 Æ 百戸の 道廊では他の 上富良野の 滴地 市 衛は浮 移されば生 沈に

〇十勝嶽爆發

増水約七尺に遠し、避難民二千名線路傳ひに續々避 なり今なほ立往生 これがため二十四日夜十一時旭川を強した敦授 ある三重縣團體人員約一千名の生死不明、 野村長宅小學校外三戸を除く外全演、 がエペホ 札幌發 十勝嶽、 カ ンベツ線路付近にある民家三十戸の内吉田上富良 (二十五日午前九時二分發 硫黄山の大爆發被害程度は今な ほ判明しない 上富良 野村 売井 細野農場に エベ 列車は消行不能と zł: n, 難しつつあり、 カンベツ 0

田畑は悉く埋没

客四名あ に近接せる所にある松山温泉の安否は今なほ全く不明で、 さまたげられ美瑛村はわづか二戸だけ浸水した。文で、 たるや美様村に向つて六尺以上もある六水が 大河の決する知き勢 發をなし、ついて午後二時、四時の二 民は戦々恟々たる有様であつたが、二十四日午前十一時最 へられたものが安全であった。 か以て突進して來たが、幸ひ美瑛村たさる六町ば かりの堤防に 都 ŋ 家族と共に生死不明、美瑛殷 + 勝岳 0 部 硫黄山は 然して美瑛川の 上流なる硫黄山 数日前に爆發したので、 同の爆發あり、 場は全滅、美瑛方面の水 午後四時にい 時全滅、 當時浴 教初の爆 付近 か 41:

> めつしあり。 を堆積し列車は不通となり、目下人夫八百名を客励し救援につと 起點二十二マイル六十チェーンより二十四マイルまで.一マイル四 寄せ流失したため、 だしきは上富良野村で、 干 チェン間線路は泥水の押寄する所となり、 町 步、 畑 PU 百町歩は 約二百名の住民は溺死せるものし如 同村約六十戸は廿尺餘の泥 全く 、泥砂の 下に埋 没したい 線路上三尺ほど泥砂 水一時に押し 70 害の 1 最 旭川

分旭川第七師團工兵第七聯隊より五十名の兵士急行した。進む事能はず、目下開 通の見込み立たず、二十五日朝六時五十五二チエーンより二十四マイルにかけて枕木等が 線路上に山積して【旭川發】 鐵道灣害は美瑛上富良野間旭川 より二十二マイル六十

大鳴動と共に山海嘯

(322)

【札幌發】 十勝岳の大爆發について 石狩國上川郡美瑛村井上階師「札幌發」 十勝岳の大爆發について 石狩國上川郡美瑛村井上階師に 地下水が湧出し、山海の語るところによると、爆 發したのは二十四日午後四時二十分頃の語を ところによると、爆 發したのは二十四日午後四時二十分頃の語のと、本語の大爆發について 石狩國上川郡美瑛村井上階師

寄せ、 函价 水約五寸に減じた。 爆發し、 次の如くてある、 發 上富良野美瑛間の鐵道線 三十分の後泥七分水三分の + ・膝岳爆發について鐵道電話による 旭川 二十五日朝までに發見された 十勝岳は二十四日午 路かうづめ 濁流が約 五尺の高さて押し 後四時 同十二時ごろには 中ごろ大鳴動と共 死體は約五十、 驛 からの

XI.

〇十勝岳爆發

缝

水田 勝岳は沈静 の被害約七百町歩旭川から の狀態にある。 は 救援列車が通つてゐる、 その

慘害の中心上富良野

滅した美瑛農場は美瑛驛から東一 の一名物とされてゐる新井農場はこしから一里十四町のところに 約三里にわたつては地積八千五百町歩の 國有原生林があり、 **餘方里に及び、多くは水田と畑地となり中々盛んである、** 川平野の南部に當り石狩川の支流空知川 やその支流の流域は四十 停車場が出來るに及んで漸次發達した。丁度石狩大平野の東、 十八戸移住して開墾したのがこの地の 開發の初めて、三十二年に て約一萬二千人位住んでゐる、爆發した硫 黄山麓からは僅かに三 百十一町歩である。 上富良野の市街地は人口二 千戸敷約三百五十、付近の村を合せ 乘合馬車などで交通してゐる、 地積六百町歩、姿や 豆を年に三萬三千俵も出してゐる、 里藤野農場など、並んて地積約 明治三十年四月に三重縣人が 東の方 北海 上 全

道 出 張所には入電なし

した價値のあるものではありません。 知つた次第です十勝岳は千八百米位 の山で登山家からいつても大 發については廿五日朝まで何等の報告も なく却つて御社の記事で 瑛温泉とかどあるので農閑季の 農民が湯治に行く様なもので都人 の遊樂の場所でもありません。」 勝岳爆發につき北海 道廳東京出張事務所では語る「十勝岳爆 たぐ中腹に中川温泉とか美

Ŧi, 月七日既 に小噴火

後

その後数次にわたり活動を續けてぬたものである、 く記録なきものであるが、 は休火山で久しく活動をなさず、 發表によれば次の如くである。 廿四日までに中央氣象臺に達した報告によると、 去る五月四日頃より小鳴動をはじめ、 その以前の 活動期についても全 十勝嶽硫黄山 今旭川測候所

昇り燒石を噴出し多少降灰あり。

【五月七日】 午後八時頃鳴動 と共に小噴火をなし火柱敷十尺に

0

【五月十四日】 【五月十三日】 噴 煙激しく 午後 噴煙盛んにして 終日殆んど連續的に鳴 四時頃鳴動あり 山麓 動 に地震あ あ

時强き鳴動あり。 【五月十五日】 に入り噴煙と共に火柱を見る地震繁し。 鳴動繁かりしも 午後三時頃に至り次第に衰

【五月十六日】 噴煙盛んなるも 鳴動は止み午前中微弱なるも

右につき中央氣象臺地震掛國富技師は語 【五月十七日】 鳴動終熄したるが噴煙盛んなり。

ら十勝の方の火山についてはいまだ充分 の調査もなく何れの火 Ш 川 詳しくはわからないが、これによつて或 今囘大爆發をなしたる十勝岳はまだ 一度も踏査したることなく 系に属するといふ事も が續いて活動期には入る樣な事になるかも知れない、 定つてぬない、 ひは北海道内の他の火 L かし、 今囘の爆發は 石狩か

01

り夜

へ時

13 1: ほ北海道では十三年 日には上州白根山の爆發等 同じく十一月十六、 來十三年の十月卅 あるからそれとも關係して起つたのでせう。 る事も あり、 根室中島から襟裳岬に 至る外側地震帶が活動期 日には琉球間 七日には焼ケ岳が爆發し、 七月卅一日に渡島の 皆大地震の誘發と見てよろしい、 島の海底火山の爆發があり、 駒ヶ岳が小爆發をなし 十四年一月十六 75

恐らく

先年の大地

震に誘導

された

ものであらう。

即ち

南

の時

以

鐵道は折返し運轉

る から不通になつた目下も兩驛で折返し運轉をしてゐる、 深さ 一尺の土を押出し 線路を 埋め多敷の 死傷者ある 見込みであ 位になつた。上富良野付近の被害が甚し くーマイルの間に線路に ころ十勝岳は鳴動をはじめ遠雷の 如き音は上富良野驛まで聞えた 日午前中の見込みであるが旭川保線事 務所運輸事務所 流れ出し、 百名急行し目下線路上の土砂を整理し復舊工事中。 出水になった、夜中の十二時に到り 漸次減水して廿五日朝五寸 午後五時に到り突然爆發し そのため湖水が龜裂を生じために水 五日午前十時中札幌鐵道局發了 現場は今の所平隱に歸し上富良 野美瑛間は廿四日四二五列車 上富良野と美瑛間各河川は氾濫して線路上に約五尺 鐵道省着電廿四日午後四時 から人夫 開通は廿

> 多いが確然とした事はまだわからぬ。 た土砂の推積を眺めてポンヤリしてゐる、 餘りの事に涙も出ぬ有様、大木の先が漸く 3. 田や畑で働いてぬた折柄突然の大水にさらはれ、 はあたかも水田の播種期で年中書 き入れの農繁季、農民の多くは 川の上流で果してどれ程の被害 か全く列明しない。上富良野 名の住民の家畜一 恰も大河の決するが如く襲ひ來り現に判明 空知川寄りは低いので五六十尺、高いところは百尺以上の大波 洗つた真つ黑な波は六尺以上もあつたといふが上富良野方面即 『何しろ急だつ たので親は『助けて・・・・』と泣きさけぶ我見を敷 幸ひにも逃げ登つたものを除いては『あれよく一』といふ間 いとまなく見す~~殺してしまつたものもある始末で……』と 流され影も見えずなつた、 知られた殷園は一 切を洗ひ去つた、惨害の最も甚 夜にして光涼た 命拾ひした一人は質情を語つて日 見えるばかりの残され した分で約六十月二百 牛馬は流されたものも 小高い丘その だしいの 美 瑛 は空 付 近

課長發上川支廳著電左の如し、【旭川發】 廿五日午前十一時四十分現 楊出張の津田上川支總第二

H = 分減水せるも水深約五尺。八、原因は 過日爆發せる噴火口の決潰 約 せるため時々濁流が押寄せたものし加し。 六分決潰して全く形態を存せず。 夜二千五百名廿五日 朝約一千名。 百名重傷者廿名 流失家屋百十戶(荒井農場三重團體)。四、 廿四日午後四時にい たり突然洪水あり。 輕傷者二百名。 + Ii. 六、一面泥海の如し。 電信電話は 被害者は各方面合して廿 九 = 鐵道は約 死者判明せるも 流失し損害躁想 增水約三十 イル

雜 報 〇十勝岳爆砂

まつた、被害地の 北方に美瑛川南方に空知川がある、共に石狩川

泥水の山津波をまき起し、

十勝岳硫黃山

一帯の麓の村

マを洗か

大噴火、大爆發の一刹那

流れ出した溶岩は見上

上流だがその間にはさまる上

富良野村を中

心に米婆の産地とし

報 〇十勝岳の爆發惨害

雜

十六日東京日々新聞) 十六日東京日々新聞)

物すごい七條の流れ

四尺も 岩と合して一大勢力となり逆卷く奔流 富良野方面に向つて流出した。しかし 0 じまる、 起するに重つた最大の原因は第 廿七日も調査する答で、 六日午前七時常地發向日夜は牛倒纏の硫黄採掘所に泊 てある。 今回の 湖候所長に親しく調査すべく道 臨務部上川郡農會長等と共に廿 記者が廿五日路査した硫黄山 積つてぬたのでこの溶岩の ために雪が解け、 如き惨事は起さずに済んだ その一條は美瑛方面に向び、 溶 岩は七條となつて噴火口 左の如く記 一に溶岩な多量に噴出したのには 噴火口の爆破原因について星川旭 から流出し、 者に語った かも知れぬが、 他の六條 となり途にこの惨事を見た てこの溶岩ばかりなら或ひ 位山麓で合して上 一个回 いづれも 多量の水は溶 折駆しく雪が の修事を窓 ŋ 引 町位 檢 1= 3

死體發掘

た、なほ士七日小池代議士は窓 政會を代表して慰問に來る筈でまた。なほ士七日小池代議士は窓 政會を代表して慰問に來る筈でまた富良野村船木繁吉(三二)磯平幸蔵(三二)が波墺された家の下にはさまれ悲鳴をあげてゐるので危險を おかし上川青年間が敦助しはさまれ悲鳴をあげてゐるので危險を おかし上川青年間が工事中上富良野村船木繁吉(三二)磯平幸蔵(三二)が波墺された家の下にはさまれ悲鳴を横斷する初木の橋を 架けるについて上川青年間が敦助しばさまれます。

た東北大學渡邊萬次耶氏は十勝嶽噴火調査に來ると。

死體の發掘困難

上富良野村救護班事務所では連日の

疲勢を慰する暇もなく未明

て死體搜索に出動したが、 より混雑し、 如し、 内務省府公報廿六日夜發北海道長官より あらざれば死體の所在は全く見當がつ のて殆ど絶望狀態にあり、 + 数組の救護班は手にくまさ 今後の死體搜索 土地改良のため工事 かない。 内務大臣宛の公報左 は泥砂の下になつてぬ かり た P 起し發掘する ロープを持つ

二十八日東京日々新聞) 部分は恐らく死體となり泥中に埋り居るものと察せらる。(五月部分は恐らく死體となり泥中に埋り居るものと察せらる。(五月これまでに發見したる死體六〇 行方不明八十に及び、この内大

○十勝嶽の爆發慘害

員 場 残し、 四里の箇所は熔岩流れ地下水湧出して一 数十丈に遠し山麓一帶は震動を續け美瑛富 硫黄山は去る五日夜八時 々たる有様であつたが、俄然廿四日午後三時 札幌電報」朝刊後報) 約 を初め三重縣移住團體部落 折柄午後四時十五分再び一大音響と 共に大爆發をなし 二百餘名は救ひを求むる暇も 焼石を降らし美瑛川は為めに溢 北海道石狩 頃から鳴動し、十九日に至り噴火の火 その 他山 なく悉く惨死を遂げ、 十勝の國境にそびゆる十 一徳に黙 れ出し市街地は 面の泥海と化し、 良野等の村民は職 在 頃一大鳴動と共に爆 する農家約 危險に瀕し 約 忽ち方 百 百 戶 4 競 柱

難民で今尚運轉不能に陷つてゐる。

果 市街は無事である。 1: 5 5 0 製はれてゐるが旭川 4 撥出に活動中である、 ンに亙り決潰不通となった、 か廿分にしてこの修羅場を演出した たる有様で惨狀目も常てられず、 死 船は 木 0) 极 P 岩石 から續々救援隊到著活動中上、中、下富良野 廿五日朝は天日暗く山 と共に 目下青年消防隊 施 れ鋭 震動は同化 ものてい 道治線近く漂着し の変見えず不安 出動し飲助と死 鐵道線路も約廿 分にして止む即 て死屍

廿四日午後十一時旭川を出發した敷援列車 前 學校吉田上當良野村長宅外三戸に過ぎず、 山つなみの氾 【札幌宣報】 十勝嶽硫黃山爆發の被害程 度は米だ不明であるが、 七時の増水七尺に造し村民 江幌神別付近の線路側にある 約卅餘戸の中無事であるのは小 濫風域は 幅 里長 き三里の原野殆ど全滅泥海とな 約二千名は線路づたひに避難中で、 あとは全滅し、 廿五日午 は線路上に密集する避

1:

失し殆ど全滅した事確められた、 富良野村荒井農楊、 [札幌生報] 上富良野原野周園約三 里の間は全く海原と化し、 川七尺増水し部落民約 近の江幌閣體三百名の生死は気 細野農場、 一千名は鉄道線路を傳 三瓜園 硫黄採 造はれて居る、 體の約二百戸は倒潰或 掘事務所は安全であるが つて辛うじて逃げ 又美瑛市街は美 は流 Ŀ

黄山 と共に爆發し、 【札幌發鐵道省運輸局著電】 二十四日 **尙同區線路三哩四十チェーン** は鳴動し下富良野附近まで感じ、 同時に上富良野、 美珠に感じ、 は深さ一尺幅 鳴動より 午後四時三十分頃十勝岳硫 美瑛川は五尺浸水 三十分後一大音響 哩い 泥海に覆 n

> 後報。 に船裂を生 が二十 轉不能の箇所は現場から折返し運轉を 六日開通の見込である。 じこれがた め洪水に 襲はれ たものと推察するも また上富良野 なして居るい 以 北台 原因は湖水 不 通 車 知

運

7:

幌鐵山監督局よりは廿五 回の爆發に依り坑夫十八名惨死したが 被害は 唇にかしり、 旭川電報】 硫黄採掘は平山礦業株式會社東京市外干監 ケ谷平山總次氏の 爆發した十勝嶽礁黄山 六正十一年の探掘高は約千五 百噸を示して居る、 日朝狀況親察の爲小坂技師を急行 は 石粉 ノ國と十 未だ別明しない。 勝ノ國境に 札 4 輜 あ

ŋ

逃むる能はず一時停車の止むなきに至った。 B. 心満載し上山警部補上川四條圏 等と被害地に向ひ、 以下工夫二百餘名が貨車二輛敷袋車五輛と枕木、 旭 牛窓別附近に落したが森林。 川電報 旭川 より廿四日午後十 線路上等に避 一時五分五十嵐保線事務所長 雞 民多きため列車を むしろ、 11 五日午前 木材等

あ 壞家屋約五十戶で、 不明の者多数を出し、 【札幌電報】 幌方面との通信全く杜絶した 團員等と協力執援に努めてゐる。 水三 文に流し同村の下流民家約五十戸は流失したらしく、 富良野中富良野山部金山の各局線は岩石の爲め囘線を切 ij 災害地不通常信 旭川製より出張した熊谷務部の 被害の最も大なるもの 尚は富良野川沿岸に 爆發した硫黄山麓 二十五日朝までに (東京中央電信局發表 は上富良野で、 を通過する

信信 **判明した死傷者は百名倒** は多数の死體漂著しつい 行は消防組在郷軍人青年 富良野川 回線の中、 断され札 行方

雅 報 9 勝岳の爆發惨害

(326)

報 會員通

雞

野に漂著の死體は六崩瓌家屋五十戸 てある。(五月二十六日國民新聞) JII 署より 出張の 熊谷 とあ 曫 部 り尚死傷は約百名の見込 の報告によれば、 上富 良

通

山登山大汝より、富士折立に至り 内藏助澤のカールを降り、 冠杉附近に上り、弘法追分の兩茶屋を過ぎ、 助平に着きたるも、見渡す限り雪野原にて夜營の場所に乏しく、 は全く雪に封し込められ、堂自身は屋根文現はれ居り候。 稱名道に入り、瀑近 くの平で野營、八日稱名瀑を見て急峻な道 T П 登り、最北の峯より、劒澤方面に降りて見、その日は黒部別山の頂上 東面の偉觀に接し、尚黑部川を見物して歸り、十 内藏助澤寄りの一拳と御前澤寄りの一拳を極め、 ゴセンダンの丸山を縦走、雪は山頂を埋めて歩行非常に樂にして、 止むを得ず谷側の岩屋に天幕を張つて先づ根據地を造り、 △前略。 登 JII 御前澤を溯り内藏助平乘越より、内藏助平に下り小屋に歸着。御 野營地に返って一泊。十三日は内藏 方面の最大の尾根を下り棒小景澤の落口を見て歸り、 澤の落口には長さ半町高さ二十二三 丈のノマ押し出し居りき。 を見物、燃ゆるが如き新緑の中 の中に僅許りの雪消 雪の爲に案外早く、 六日の夜行で翌 日午前九時過千垣に到着、 えの平地に泊り、十二日劒澤棒小屋澤落 途中最上部の瀑十数丈のものを見申候。 を御山澤の出合に至り、引返し 助澤を下り、水量莫大なる黑 室堂泊り。 心往くまで立山 一日黑部別山 即日藤橋より 内藏助平 彌陀ケ原 翌十日 九日立 を鍋 内藏

でした。(竹内亮

は今度客室を増築し大變清潔になり、

それも愉快な るものの一つ

ŋ 1: > ~ 島 折を経て上 市より乘車、歸京致し 候。 (冠松灰耶、

岩永信 に登り、 湯 九重山は只今ミヤマキリシマの眞その日の夜箱崎に歸着しました。 △今年も又九重山に行つてきました。 竹田町に出て別府に至り、 九日十日は法華院下の濕原の植物の觀察に費や りて法華院温泉に至り、 北方の高原に出て、 運日の好晴の下に愉快に山中の一週日気送りました。 の平温泉に一泊し、 其の間七日に黒岳に登り、 十二日久住山、 平治岳の山側をからみ、 翌六日鏡山の一角を踰え、 十二日朝迄其地に滞在しました。 御池等を経て 久住町に下り一 十六日別府を立ち耶 馬溪に立ちより、 八日シラクチ峠片 ケ池本山等を跋 盛りにて美親云はん方なく、 六月 五日に 鳴子川谷の細 ٢ 箱崎驛を立 九重山衆の黒岳 十一日大船山 徑を辿 十三日 って

馬尻 大町 のないのをよいとして進みましたら、大雪溪の中ほどから「あれ 十日朝降つたり、 △七月十八日の夜汽車で東京をたち、 になり、少々閉口、 發、猿倉で昨夜の雨のつよかつた話をきし白馬尻の小舎に休み、 つきました。 んだ人もありました。小雪溪をも危い姿でこえ、離れ山の小舎に へ向ふ人もありましたが、私どもはその日は滞在しました。 へ、それから自動車で四つ屋へ。かりからの雨でもそのまし白 雨だけやんだのて、更に頂上の小含にゆきました、 晴れたりの 一緒になりました人たちの中には、 お氣天を氣にしながら、 十九日の朝松 本 とにとく から電車 風 そ

+

四日内藏助平より

>

シゴ谷を越し、

小窓を踰えて白萩川に下

法華院溫泉

を仰度候 梅着人夫五人を連れ、 と相成候へば南へでも出掛け度と 存居候が、その節はまた御高教 も一興に候。思ひがけなく正山にして邪道な 試み候次第に候。來月 殆ど白峯道のみより登山致候。日本アルプスを褒?)より 見るの を下るをやめ舊道を白山温泉へ下り候。急なので閉口致し候。今は といふ處、エゾイタチを見付け申候その日半日遊び豫 定の尾澄道 やうなれども時はやく、黒百合のさかりにて白山 小櫻はまだく れ滿足致候。山口氏例によつて一寫三枚ついきな試候。花は相當の 用ひず炭火に候。翌朝御前に上り候處上河内岳より劍迄 眺め得ら にして室常着室堂は百數十人宿泊しうべく、食堂も有之薪は 一 道を登り候。仲々の残雪にて彌陀ケ原の風物は立派に候。六時間餘 連中は見當り不申候、翌日驟雨性降雨の爲やつと十二時半出發、新 石川、福井兩縣下の中等男女學生の團體登山にて賑ひ候も、白衣の に候)夕刻白山温泉白山館着、同行山口成一氏。折柄暑休みの爲め 白峰迄乘合自動車(約十三里之 は競争の為め客にとりては好都合 日の朝五時に新宿にかへりました。(七月二十五日 別所梅之助) 日朝出發杓子へまはらずに下山三時近くに四つ屋につき、 **拜啓、野口、** 先日一寸御知らせ申上候通り、本月二十二日朝金澤市より 吉田の兩君と二十四日午後上野驛發、二十五 二十六日早朝蓬 七月三十日 峠へ登り、檜又ノ頭より 戶澤英一 二十二 日 切 茂 ±

> 京の上萬可申上候。(七月三十一日法師溫泉にて松本善二) 直に尾根を傳ひて、 と言ひしを先づ無理にタヒラ ビヤウまで登り見しに、天候漸く回 夜は大に困難したり、翌三十一日は人夫が如何しても土棺へ歸 にまたもや方向心誤り、西ノセンへ下り込み、止む心得ず野管、其 れ山中露營五泊にして辛くも豫定の維定 を完了致し候。 無事法師温泉に着致し侯。 復したるらしく三國方面の山脈を望見 することを得て、大に喜び (金山)より仙ノ倉三角點を經てタヒラビャウへ向ふ途中風雨の爲 三十日再び國境山脈へ取り着き。 鞍部より上州側赤谷方面にて露營、 を通過して、サゴーノ頭 地より尾根の横をからみて、國境尾根に出て、大栗、大障子の 萬太郎谷方面に下りて野奇、 師岳を過ぎ、越後富士 の手前まで行きて露替、 三國山へ出て、 (即ちオザガ深/頭?) (地圖の萬太郎山)に出て、西に下りたる 山に入りてより毎日惡天候に 二十七日茂倉。 終夜大風に 惱まさる。二十八日野營 例の窓を過ぎ、 三國峠に下り、 風雨の爲止むなく滞留二日。 ノ倉、 にて尾根を間違 惠比須大黒ノ頭 谷川富 悩ませら 細は歸 # 藥

せん)案内は今年の山開き以來の「あれ」だといつて ぬました離山

私は眠られませんでした。(質は大した事でありま

小舎に泊つた人は風をさう覺えず、寢られたさうです。二十一

風と寒さとて、

雨の爲に二日も滯在してゐる組もぬました。

その夜は

强

倉

雜 ○會員通信

)第三十二囘小集會記

III. 尾 井 大 IE. HT 左の 7 + 五. 水 至六 谷皆 演 香 月 à 園 6 十日 (70 於て 1 午後 冠 幹 時 事 4 より 可 會者とし 麴 MI E T 紀

澤と内蔵之 巖之助平 部 47 本年六月上 立 假に 3 别 て、 丸山と命名す) 15 111 助澤 を中 入り、 一旬會員 黑部 ことの 心 其庭 3 川及對岸 分岩永 或 中間 L 之根據 T の左右 劍澤 君と に帰る最 0 景觀 方 地 俱 3 角をなせ 10 高 7 **沙** L 採 恣 T Ш 次 千四 を超 12 る 先 郎 各 + づ 2 氏 御前 墨 米 1 次 T 其 17 0 0) 內

頂

脈

部 更 降

望み、

叉內廠之 より黑部 本流を縱

助 本 觀

澤を下 流 L

りて

黑

部 常

位

置

12

就

T

測

量

部

0)

地

圖

VC

大なる誤

17 6

其 T 登

南

端

及

槍

ケ

岳 屋

念

角を

黑部 つて

别

H

ti

1

Mi

3

5

或

Acto Acto

小

學落

口 Ш

> 藏之助 より 劍澤 岸 0) 0 歸京 寫真と相須 に下り、小窓の雪溪を除えて伊 水 月 平 の根據 0 黑 たる七日間に亘れる旅行談 地 つて興味饒かなるも H に歸 毛 楓などの 終にハシゴダン 新緑美を賞 折に出で、上 のなりき。 にして、 漸 1 市 內 多

月に 雪 及 を は らず、 るい 言ふ迄 3 L 迂囘するが 個 東 知 氏 期 n 二囘の 1/2 h 如 た 33 日 澤 平より 恋 居 < 3 3 6 黑岳 本 12 なし。 36 後 考 る人 年三月上 地 於 安全な り 0 立 IC 徒渉を餘 方 2 3,5 東澤 登攀 50 に足 ic C る Ш 0 時 雪 付 立山 L Щ を入 7 旬 尚 崩 稍 17 季 ること、 脈 L を含 意外 儀 至 溫 72 Ξ 12 0 は最早 高 東 n な 3 泉 3 起 7. 澤 < 迄 + 也 ことを h 3 0 ^ Ш とす 地 行く 附近 おる 黑部 1 岳部 0 感 に 3 雪叉は氷 點 あ る人 主 の數氏 るべ JII 蹈 之澤、二之澤、 17 使 0) 1 注 巴 は は 用 查 眼 などは、 1,0 意 0 立 L 0 5 へと行を! 架橋若 般に想 結果を 取り Щ 10 72 黑部 T 3 登 T 夏 Ш 5 埋 約 共 路 講 n 像 本 0 み は 演

會 報 ○會務報告○交換及寄贈圖書目

態に就て說く所あり、 ざる有様なりき。 ることを指摘され、 此 地 聽講者は時 方に於ける當時 の過ぐるを知 0 雪 0 5 狀

外吉、 雄、 貞俊、 Щ 船田三郎、 杉浦晋、 之助、吉澤 二十四氏にして、 「崎和 當日の來會者は、 飯塚篤之助、 大熊保夫、 木慕理太郎、鳥山悌成、 川口敏郎、 郎、 吉田竹志、 松井幹雄、 Щ 他に會員外來會者七名ありき。 野々垣邦富、 岡田喜一、 下助四郎、 小松喜一、 藤島敏男、田中菅雄、 岩永信 本多友司、 雄、 今村巳之助、 高頭式、冠松次郎の 野口末江 沼井鐵太郎 田部重治、 酒井忠一、 吉田次男、 延、 柳澤悟 波邊漸 林邦彦 別所梅 武田 堀飯 別宮

務 報 告

左の VC 件 於 大正 九名入會を許可 17 T 就て議定 幹事會開催、 十五年六月二十日午前十時、 L 次に 會員別宮貞俊氏 せらる 入會申込者 の詮衡を行 を幹事に推薦 清水谷皆香園 71

野玉雄、 武幸太郎、奥山峰月、兒玉晋(東京市水源林事務所代表 伊藤胖、 四谷龍胤、 額田敏、 葛城忠二、 鈴木勇。 古吉

交換及寄贈圖書 Ħ

べ 7 Щ 12 デ 嶺第五年第八、 カウ趣 スツリヤ 味館 V 十三年第九 九號 第八十四 號 號 神 H 東 本 京 戶 7 B. 徒 12 步 カ 路 ウ 會 愈 會

旅 第六年八月號

> 東 東

> 京 京

7

n

カ

ウ

會 ブ

旅

行

7

ラ

H

旅行

第

一年七月號

岳友 第二十 號

會報 ツーリスト第十四年第三號

> 大 0 岳 旅 友 會

" ŋ スト・ビ æ, 1 c 白

立山のみちしるべ、大正十五 年五月) 電

城 富 ン・シ Ш 南 7 25 1 Ш > 旅 岳 氮 行 愈 會

山

岳時報

第七年臨時

Щi

行記

ステップ第三年第七號

田 島 勝 太 郎

Canadian Alpine Journal, Vol. XV 1925.

In Montagne, No 191, 192.

Geographical Journal, Vol. LXVII No. 5.

Club Alpino Italiano, Anno XLV Num. 5.

Bird=Lore, Vol. XXVIII No. 3.

會

Trail and Timberline, No.

Butlleti Excursionista de Catalunya Any XXXVI Num 368, 369, 370, 371.

The Mountaineer Vol. XVIII No. 7.

Colorado Chantauqua Bulletin Vol. XV No. 4, Prairie Club, Bulletin No. 157

Prospectus (Colorado Mountain Club.) Prairie Club Year Book 1926.

Bulletion of the Associated Mountaineering Club of

North America.

○本會規則拔萃(大正十三年九月改正)

近

茂 滿

> 村 田

及現任幹事七名

本

田 rþ 武

重

治 郎 吉

小島久太(在桑港 許議員十六名

時宜ニョリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊 スルコトアルヘシ 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、 本會の山岳ニ關スル研究ラナスヲ以テ目的トス

第十條 一會ノ決議ニヨリテ推薦セラルルモノトス 本會會員ヲ別チテ正合員 及名譽會員トス、名譽會員ハ幹 第五條

本會ハ會長ヲ戴カズ 幹事若干名ヲ置キ、一切ノ會務ヲ虚

理セシム

姓名年齡及ビ職業ヲ記シタ ル申込書ヲ事務所ニ送附スヘシ、但 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹 介ヲ以テ住所

> 務所、會計取扱所、編輯所ニ備付ケアリ) 紹介者ノ一 人外本會評議員タルナ要ス (入會申込用紙ハ事

第十三條 第十二條 入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニョルモノトス 入會許可ノ通知 ニ接シタル者ハ、直ニ入會金五圓ニ會

第十四條 費ヲ添へ挑込マルベシ 正會員ハ會費年金參闘ヲ毎年二 月末日迄ニ納付スヘキ

モノトス(以下略)

Ç.

現任幹事七名 島

頭仁兵 衞 島

Щ

冠 松

沼井鐵太郎(臺灣赴任) 夾 成 那 木 幕

槇有恒(渡歐中) 理 太

高

久 太

Ш Ξ 默博藏

至同 年十二月卅一日

入 之 部

收

七七八・〇三〇

五〇・〇〇〇

000.000

九七七•四五〇

雜

入

計 收 寄

附

金

入

會

金

會費及手數料

二、八〇五•四八〇

雜

入

計

支 出 之

部

一、八二七•九四〇

集 合 費

事 集

務

所

費

企

費

雜誌編輯並製作費

支

出

之

部

次年度繰越金

費

事 務所

五九二・六〇〇

||三四•〇四〇

一五○・九○○

雜誌編輯並製作費

計

二、八〇五•四八〇

右正當なる事を承認す

高

庶 務

頭

仁 兵 衞

大正拾參年度會計報告

收 入 之 部

會費及手數料

二、三四六。五八〇

會 費

收 入

九二四·四一五

110.000

三、三八〇•九九五

二、三〇四•四四〇

一六二・三五〇

三七一・〇四〇

高

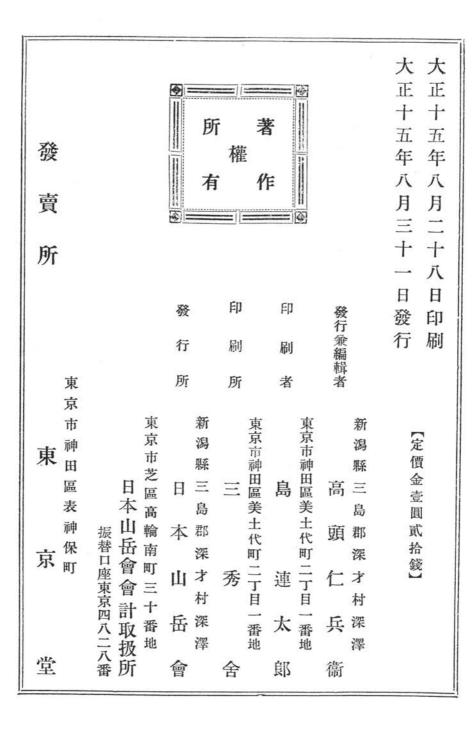
頭仁兵

衞

三、〇二一・一八〇

二九五•九六五

三七二・七三〇



州 號 Щ 岳 第十六年 貮 圓 第 三號 Ŧī. 拾

奥

秩

父

號

都村誌抄出の「多摩郡

0

山川」は天下一品。

本欄及雜錄二百

+

頁

第

111

岳

二百十 二頁 定

及維錄

價 金

第二十

錢

第 號

圖版二十八 定 價

金

武

圓

全一 册

(含員に限り)

賣 金 貳 價

拾金

七五

錢 圓

以上就一、第九

も各

料

志

高

頭

本式編

Ш

嶽

。第十年第二號。第十一年第二號。第十二年第一號。第十三年第一十四年、第十五年、第十六年、第十七年、第十八年、第十九年、以上共三年、第四年各號。第五年第三號。第六年、第七年、第八年、第六

第

Ш

岳

號。 以 Ŀ

附)

何れる定價異

b,

上候。

部數僅少につき御注文に先立ち往復葉書

(又は返信

にて一應御照會願

手

東

京

त्ता 健

品

高 全

輪

南

町

社

店

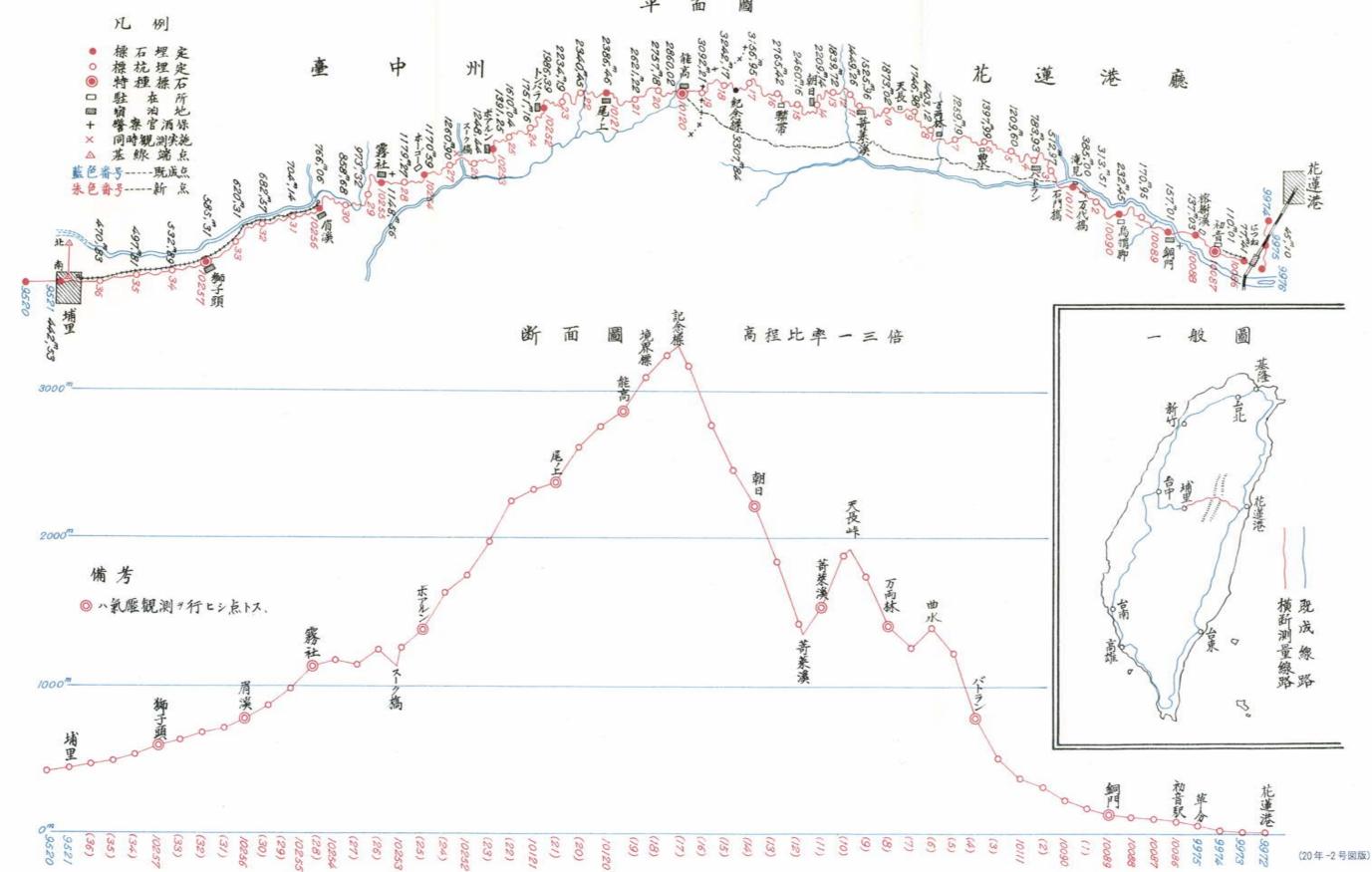
書

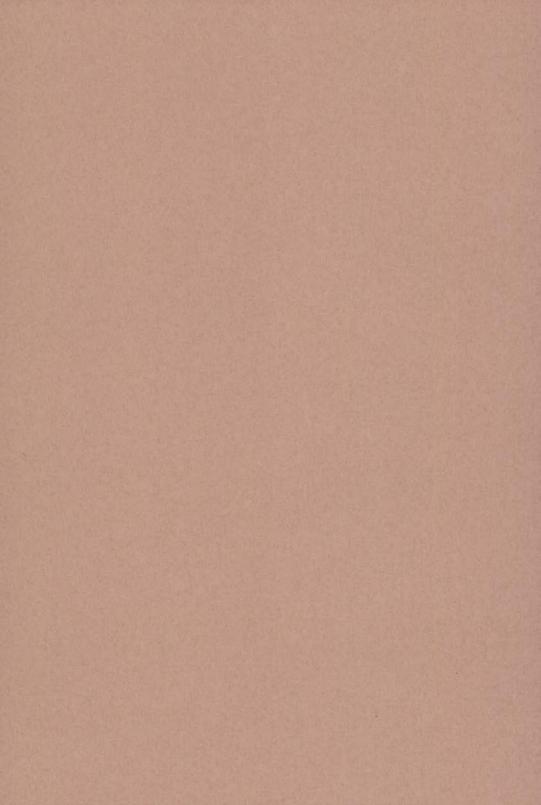
振替口座東京三二〇五二番

1	1				_								_					
◎山岳第十八年總目錄		頂より北東望。樅木村〇郡村誌の	○燕小屋附近より見たる槍ケ岳	圖版	щ	レニア山に登る	苗楊山、雜魚川、大沼池	九重火山群と祖母山	陸奥の山水	春の燒山と火打山	御坂山塊	北海道に於ける積雪期の登山	球磨川より終川へ	冬の靈仙山	務立越	冬から春への槍ヶ岳	本 々	山岳第十八年總目錄
自欽		-			船	國	戶	竹	别	冠	沼	加	竹	梗	古田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	船		納
		部	者のか		田	府	缪	內	所梅	松	井鉞	納	內	谷	岡八	田		日
			澤		郎	精一	英一	兖	之助	灰 郎	太郎	可	兖	徹藏	二郎	三郎		錄
	以上		を		M			96	EJJ	KIN	Kla	KIP	96	MUZ.	KD	KD		
	1		槍		Ξ	Ξ	Ξ	33	=		=	Ξ	-	-	-	一旋		产
	第一號		る。		五六	三六	Ξ	_	四八	三八	ーセ	_	Ξ.	一六	九	一页		(大正十二年度)
	號		○春の槍澤○春の槍ケ岳○國見山		245	225	201	190	137	127	106	90	31	16	2	通し口質		度
_	第二號自六五 164 178		眺望(武田久吉)○黒部川瑣談(冠)○雁戸山(沼井鐵太郎)○マロリ	○觀望臺としての荒船山及其附近(吉岡八二郎) ○丹澤山の近況と	第一號至七九 79	雄)〇澤と谷(山本徳三郎)	ートから(竹内亮)○可惜郡村誌の燒失(木暮)○城ヶ尾行(松井幹	〇比智賀嶽(吉岡八二郎) 〇奈良井附近の山(高畑棟材)〇山旅のノ	雜錄	とし、第三の		遠辺窓寺内寺	○定山質となり後定山山脈を認む ○四々森山(下)・「リブン・・フトブの霊目	り見たる笛鳩山と神樂峰 〇南方より見たるレニア山頂の雪田	ローチ。合項山壌より雨麓山を超いつ苗島山頂上。三國コーチ。合項山壌より雨麓山を超いつ苗島山頂上の町	○星生山質より久生山を望む。 九重流安磯山○祖母山質付丘比雪(以上 第二號)		峠山より見たる節刀ケ岳と十二ケ岳 ○薬師岳と眞川○燒山との鞍○三月の鉢盛山○三峠山 ○三峠山より見たる縹迦ケ岳と黒岳○三

山火事について(大平晟)○遠山附近(冠松次郎)○遠山奇談に就て 〇「多摩川相模川の分水山脈」について(武田久吉) 〇朝鮮金剛山の 岳旅行日程 〇燒ヶ岳大爆發〇羚羊の濫獲防止 〇秩父宮殿下立山御登山〇京阪 を何と見る(山本徳三郎) (吉岡八二郎)○三峠山の岩登りに就て(沼井鐵太郎)○雨雲の生成 神在住日本山岳會員小集會 〇八高山岳部夏季計畫〇一高旅行部山 ○富士登山鏡道○高山植物採取取締○淺間山活動を始む○淺間の 闘齊紹介「高山植物の話(木幕)○會員通信 ○南アルプスに小屋建設○各地高山の初雲 ○千島の大噴火○山岳 ○第十七回大會記事○第二十四回小集會記事○交換及寄贈閱書目 づく「登高行第五年」〇曾員通信 大噴煙 〇第三囘エヴェレスト山探檢概略 〇山岳圀書紹介「山のし 雜 會 報 報 第三號重 第三號自一〇二 第二號自九〇 第一 一號自八〇 〇六 254 179 183 291 848 扱廢止○本會規則の一部削除○會務報告 ○會員の死亡○住所不明 本會規則拔萃〇投稿規定 の會員〇英國地學協會及山岳會よりの招待 〇交換及寄贈圖書目〇 ○第二十五囘小集會記事○日本山岳會有志晚餐會○特別手數料取 〇本會規則拔萃〇投稿規定 拔萃○投稿規定 ○第二十六回小集會記事○退會者○交換及寄贈贈書目○本會規則 會員名簿(會員のみに頒つ) 山岳第十七年總目錄 附 錄 第 號 第二號 第三號直 第二號自 九五 第一號自八五 五一 300 184 85

臺湾橫断水準測量要圖平面圖





The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XX 1926 No. 2